

# 北東日本海域における 中世窯業の成立

吉 岡 康 暢

---

## 序記

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1. 須恵器生産の終末     | 3. 北陸・東北の須恵器系中世窯 |
| 2. 創業期の珠洲陶器と年代観 | 4. 中世窯成立の史的背景    |
- 結言
- 

## 序 記

中世窯業の成立は、中世考古学の中心課題の一つであるばかりでなく、近年は文献学でも庄園公領体制の形成、ないしそうした中世的変革を支えた商品流通経済の視点から、しばしば言及されるようになった<sup>1)</sup>。そのことを当面する須恵器系中世窯（陶器）についていえば、その創成に当たり古代の須恵器生産との連続的側面を重視する見解<sup>2)</sup>と、筆者のごとく不連続性を強調する立場がみられるように、窯業生産形態ないし生産物を介して古代社会から中世社会への移行の理解の一助にしようとするれば、どこに中世社会の始期と以後の変革の諸画期を設定するか、という基本論題と緊密に結びついている。そこでは、窯業生産形態ないし生産物の普遍的存在から、文献学では捕捉至難な当該期の社会的分業構造とその地域的展開の解明に期待が寄せられているのが実状であろう。

中世窯業の創成については、檜崎彰一氏がつとに論述されたように、(1)須恵器窯の分布圏外に中世窯が出現する。(2)器種が甕・壺・片口鉢の基本三種に集約され、地域により碗皿類も併焼する。(3)甕の成形は瓷器系が紐輪積技法、須恵器系が紐叩打技法を採用し、轆轤成形技法は限定的に使用される。(4)当初から量産体制を整え、遠隔地窯は臨海地に築窯される、として特色を整理された<sup>3)</sup>。その後、各地で中世窯の発見と個別調査が進展し、特に瀬戸内の須恵器系諸窯の発掘資料が集積されるなかで、前

記中世窯業にみられる特徴的な諸事象を惹起した史的背後事情について、院政権や国衙、ないし庄領主による政策的契機が説かれ、工人の存在形態も国衙直営の生産機構とみる論調が支配的となりつつある(後述)。これに対し筆者は、能登・珠洲窯の経営主体の考察を通して、中世窯業を庄公権力ないし経済機構と直結させて理解しようとする所論を批判し、中世陶器が公事物等として収取される事例があってもごく少量で、基本的には民間必需の非需給品であり、地域間広域流通物資としての側面により時代的特質が反映されていると論じた<sup>4)</sup>。中世窯業生産においては経営主体の保持するこうした二面的性格を、庄公経済の枠組みあるいは在地の商品経済の展開のなかで正鵠に位置づけるのは容易でないが、窯業生産地を庄公領の領域と重ね合わせる分布論的方法だけでは説得的な論証をうるのは難しい。端的に言って、中世窯業成立の政策的契機を論ずるほど、考古学的方法による作業が進捗していないのが現状といえよう。例えば、古代から中世窯業への転換の指標となる基本三種=貯蔵・調理器の技術的検討は、供膳器に比べて著しく立ち後れており、瀬戸内の中世須恵器系の甕類を特徴づける器体の一貫した紐叩打成形技法や、東海の瓷器系で案出された大甕の紐輪積成形技法の系譜と始期、評価は依然不透明のままである。また、課題を分布論から構造論に深化させるためには、窯跡群構成の分析が必須の前提作業であるが、基礎データの整理未了もあって、備前窯に関する間壁忠彦・葭子氏の研究<sup>5)</sup>および珠洲窯についての拙稿以外、具体的な成果に乏しく、そのため工人集団の存在形態とその段階的変質をあとづけるに至っていない。

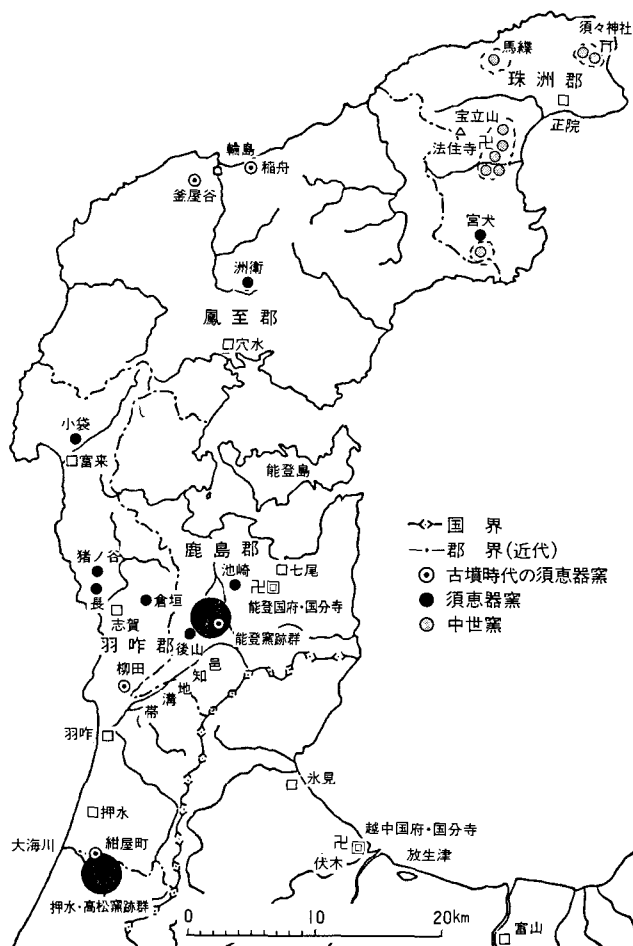
小稿は、これまでに論述してきた珠洲(系)陶器の器種組成、生産技術および加飾法に関する所見を珠洲窯創成の時点に限定して概括的に再構成し、北陸在地の須恵器生産の変容の諸段階を経て、中世窯創出に至る過程の検証に努めるとともに、後発的な珠洲(系)窯の複雑な技術的系譜を他地域の中世諸窯に求め、その特質を明確化しようとした。また、珠洲と珠洲系窯との異同にも言及し、中世窯創成期における技術伝達、工人移動のあり方について推論をめぐらした。そして、中世窯成立にかかわる政策的契機や庄公経済の収取機構との関連についても、文献学の成果を取り込みつつ検討を加えた結果、従前の私見がやや商品経済の側面を強調しすぎたきらいがあり、政治的背景を充分ふまえた論の展開が必要であることを痛感したが、なお生産器種を規定する消費層との関係、生産形態の地域性等について一定の見通しを提示するにとどまり、法制的な年貢・公事に現われない収取機構との関連など多くの課題の解明を今後にもち越さざるをえなかった。

## 1. 須恵器生産の終末

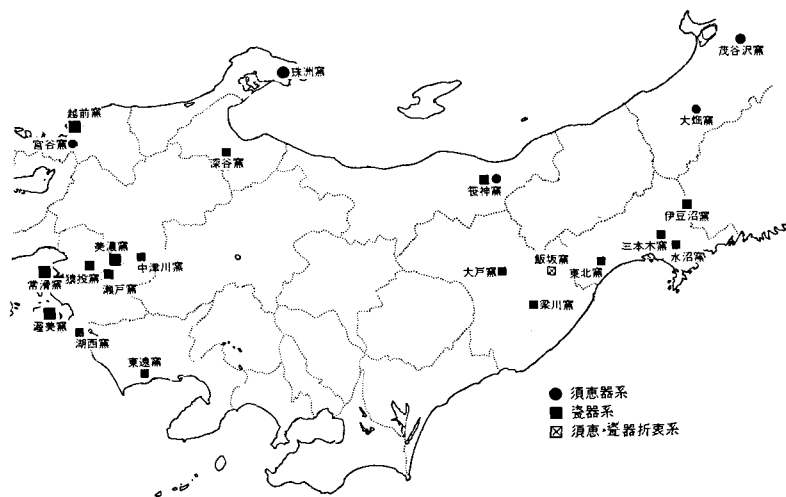
東日本の須恵器系中世窯、ないし灰釉陶器生産を母胎としない瓷器系中世窯が、先行する在地の須恵器生産（工人）から転化して成立したと予測する通説<sup>9)</sup>からすると、珠洲窯の場合、一応能登あるいは加賀、越前を包括した北陸南西部で12世紀前半代まで須恵器生産が存続していたことが前提条件となるが、事実関係に即してそうした状況は想定しうるであろうか。珠洲陶器創成の問題は、この点の検討から始めねばならない。

まず、従来暦年代観に1世紀以上の齟齬を生じていた平安時代の灰釉陶器の編年問題は、昭和56年11月、愛知県陶磁資料館で開催されたシンポジウム「平安時代の土器・陶器—各地域の諸様相と今後の課題—」<sup>10)</sup>の討議を通して、ほぼ最終的な帰結をみた。そこで述べた、北陸の須恵器生産がほぼ10世紀代をもって終焉するという私見<sup>9)</sup>は、越前では供膳器を主体とする須恵器生産が12世紀前半代まで存続し、12世紀中葉頃越前窯に継起するとみる田中照久氏等の暦年代観<sup>9)</sup>を止揚し、大方の承認をえられつつあると思う。平安時代の土器を4段階7期に区分する編年私案は、その後田嶋明人氏らによって細分作業<sup>10)</sup>が進捗中であるが、9～10世紀代は、Ⅲ<sub>1</sub>・Ⅲ<sub>2</sub>期（9世紀前半～中葉頃）、Ⅳ<sub>1</sub>・Ⅳ<sub>2</sub>期（9世紀後半～10世紀初葉頃）、Ⅴ<sub>1</sub>・Ⅴ<sub>2</sub>期（10世紀中葉～後半頃）、Ⅵ期（11世紀前半頃）、Ⅶ期（11世紀後半～12世紀前半頃）に整理できる。以下、この加賀・能登を中心とする編年案を軸に据え、律令的土器様式（生産体制）の変容・解体過程を概括しよう。

さて、能登の須恵器生産（第1図）は、半島の基部を扼し、終始政治・経済的中枢の位置を占めてきた邑知地溝帯を南北に二分する羽咋<sup>はくい</sup>地域と鹿島地域に、各々羽咋窯（羽咋市）と能登窯（鹿島郡鳥屋町、一部鹿西町・七尾市）が所在し、TK47併行期から併存・稼動した<sup>11)</sup>が、前窯は9世紀前半頃までに廃絶した模様で、以後、後窯が唯一の中核窯として操業しつづけたが、供給圏が半島全域におよんだかどうかは明らかでない。能登窯は、地溝帯北西辺丘陵径約9.5km圏内で7支群約40基が確認され、今後の分布調査によって優に100基を上廻る大規模窯であって、律令国制施行（養老2年〈718〉→越前より分立、天平13年〈741〉→越中併合、天平宝字元年〈757〉）後は、北東7km程に国府・国分寺が設営され、国造級氏族能登臣族の管掌下に、律令地方官衙と緊密な関係を保持して生産を維持したとみられる。当窯では、鳥屋町<sup>ふかそう</sup>深沢1号窯<sup>12)</sup>（7世紀末葉、窯体・灰原）、同春木3号窯<sup>13)</sup>（8世紀前半・窯体）、七尾市池崎窯<sup>14)</sup>



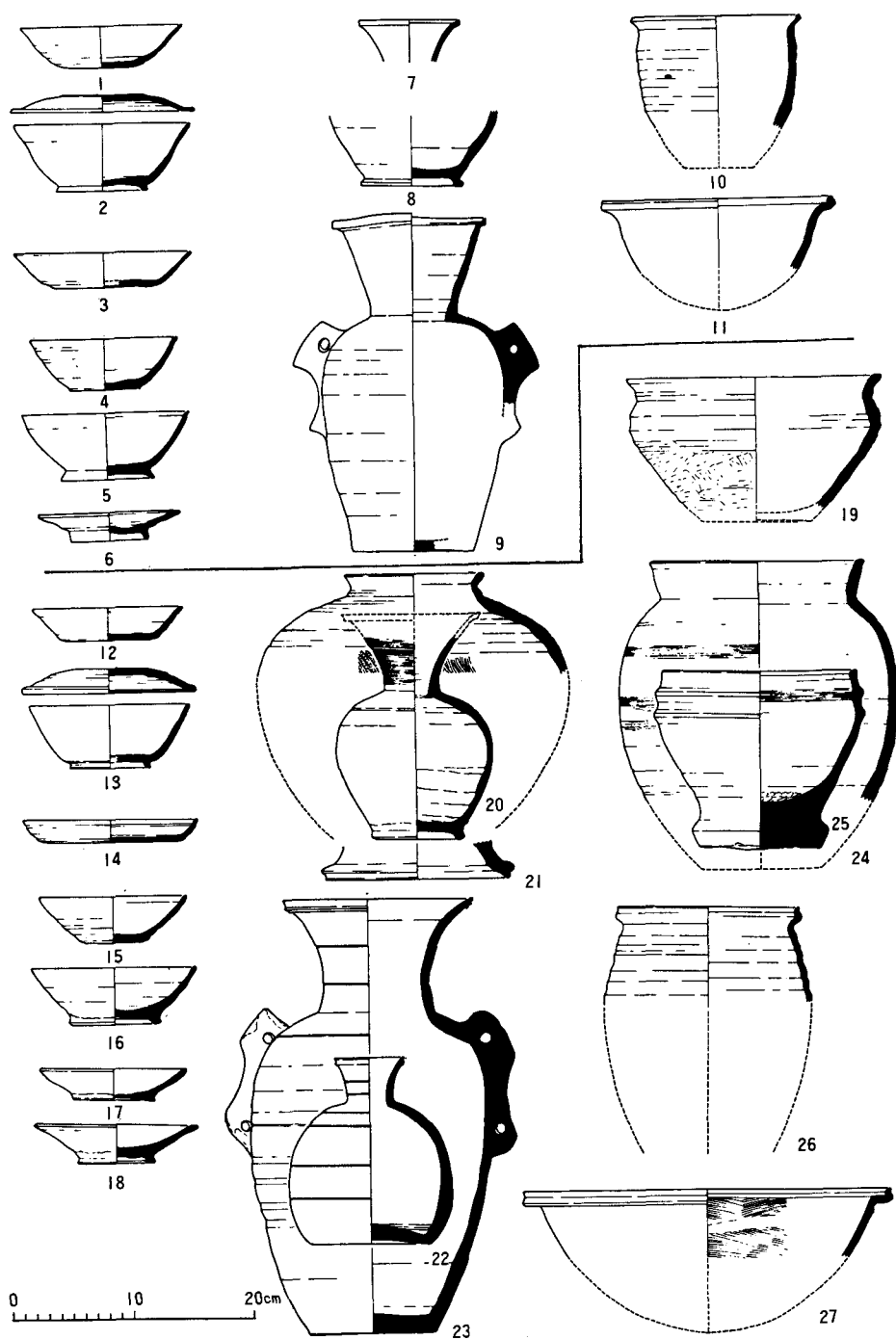
第1図 能登の古代・中世窯



第2図 東日本の中世窯

(9世紀後半, 灰原)の発掘が行われているにすぎず, 群構成の把握は今後にまたねばならないが, 採集遺物を援用すると, 地溝帯低地に面する前山に築窯された深沢(6~7世紀代)→末坂・春木地区(8世紀代)から, 奥山の伊久留川流域の狭隘な低地縁辺の池崎・瀬戸(9世紀代)→花見月(9世紀, 一部10世紀代), 後山地区(10世紀代)へ移動しつつ継起的に操業したことが窺われる。時期別生産規模・構造は不明であるが, 消費遺跡の一般的な土器組成から帰納すると, 9世紀後半代には窯跡が減少し, 10世紀代には花見月地区で2基以上, 西へ3km遊離した後山地区で4基を検知しているだけで, 規模縮小の反面, 生産域の拡散が著しい<sup>15)</sup>。9世紀後半代の変動は, 窯跡群内部にとどまらず, 半島の外浦沿いに, 羽咋郡志賀町町長池窯(IV<sub>1</sub>期, 3基), 同猪ノ谷窯(1基)→同富来町給分小袋窯<sup>16)</sup>(IV<sub>2</sub>期, 2基)へと転移し, 10世紀代には, 反転北東上して内陸奥部の志賀町倉垣コマクラベ窯<sup>17)</sup>(V<sub>1</sub>期, 1基)が点的に築窯される。これら邑知低地と峠道で結ばれた外浦海岸平野の小群が, 能登窯から派出した一連の軌跡として捉えられるのか, 位置関係からみて倉垣窯が後山地区からの二次的拡散の所産なのか詳らかでないが, 次にみる器種組成と製作技術の転換と連動して, 能登窯の周縁におそらく短期間に1基が単独で稼動する小群として転移するのは, 当該期における東日本の須恵器生産の普遍的な動態とみなしてよいであろう。能登ではこれと別に, 9世紀後半代に奥能登の要枢, 鳳至郡穴水町洲衛窯<sup>18)</sup>(IV<sub>1</sub>期, 1~2基)が確認でき, 10世紀代には珠洲郡内浦町宮犬窯<sup>19)</sup>(V<sub>1</sub>期, 1基)が珠洲窯分布の南辺で複合して所在することが知られている。

上記9世紀後半代にみられる能登窯の変容は, 須恵器の組成に明確に投影する。特にIV<sub>2</sub>期は, 器種・器形および法量の淘汰と統合, 製作技法の簡略化に伴う須恵器の粗製化が顕現するとともに, 消費遺跡では須恵器=供膳・貯蔵器, 土師器=煮沸器の器種別機能分担が段階的に解消に向かい, 供膳器が土師器に置換される形で北陸の律令的土器様式が解体の方向に大きくふみ出し, 10世紀代以降に連なる在地の土器組成の方向を決定した画期であって, 一步すすめて中世的土器様式の起点と評価する見解<sup>20)</sup>もみられる。この間の推移をいさ少し具体的に約言すると, IV期の供膳器は有台坏の激減により坏と有蓋深坏(大・小), 坏との区別が不明瞭になった小盤の組み合わせを基本とし, 貯蔵器のうち甕は一部格子目打圧原体の使用とともに, 従来ほぼ同心円状原体に統一されていた押圧具に, 粗荒な平行条線状原体や同心円文の崩れた重弧状原体がかなり普及し, 窯具規制の弛緩が認められる。この傾向は, IV<sub>2</sub>期の標式をなす給分小袋窯では一段とすすみ, 打圧原体は木目と平行に条溝を刻む平行条線状原体c類<sup>21)</sup>に限られ, 一部内壁の平行条線状押圧痕を消去する調整技法が現われるのが



第3図 能登・加賀の終末期須恵器  
(上 倉垣コマクラベ窯灰原, 下 戸津3号窯灰原)

注意される。また、壺瓶類では、Ⅲ期に東海・畿内の影響下に合成・更新された器種組成が継承され、短頸壺・肩衝壺・長頸瓶等が少数生産されているが、北陸特有の双耳瓶が目立つようになり、それも北信・北関東の突帯付四耳壺<sup>22)</sup>の意匠を採用した小耳を付し肩に鋸状突帯がめぐるタイプが製作され、新たな加飾技法の地域間交渉の開始を示唆するとともに、北陸内部での国ないし窯跡群を単位とする小地域差が顕現化したことの指標となる。

そして、Ⅴ期は消費遺跡で須恵器が供膳器で占める比重が加速度的に低下し、器形・法量の斉一化がすすむとともに、須恵器の土師器への形態・技法的同化＝瓷器型土器の盛行と、双耳瓶など特産品の器種の多産によって特徴づけられる。いまⅤ<sub>1</sub>期の標式をなす倉垣窯についてみると、供膳器は、Ⅴ<sub>1</sub>期に削り技法が一時的に復活し、器肉の薄い均一化された伝統的な匏切り、丸底ぎみの坏（第3図1）、無鈕有蓋の有台深坏、盤（2・3）と、糸切り不調整の碗・有台碗、少量の有台皿（4～6）より構成され、須恵器、土師器両系列の製作原理は、加賀南部の加南窯（加賀市・小松市）ほど厳密に遵守されていないものの作り分け併焼が行われている。ここでは、坏と碗の量比は約4対1であるが、加南窯では両系列の量比は、Ⅴ<sub>1</sub>期の5ないし2対1からⅤ<sub>2</sub>期の1対4.5ほどに大きく逆転し<sup>23)</sup>、終末期にはほぼ瓷器型碗皿に統一されるようである<sup>24)</sup>。倉垣窯の貯蔵器は、加南窯に比べ口頸部の肥大化が目立たず、シンプルな鱗耳を付した双耳瓶が依然多産され、長頸瓶・直口壺・横瓶のほか水瓶などⅢ<sub>1</sub>期で定型化された器種が焼成されている。甕類は良好な資料に恵まれないが、器高30～40cm前後で体部がずん胴に近い小形平底のものばかりのようで、(1)底部叩き出し工程の省略の結果としての平底化、(2)叩打原体の平行条線状c類への統一、(3)内壁押圧痕の刷毛目調整ないし撫でによる消去、の諸事象は現象的に珠洲陶器と近似しており、着実に中世陶器へ一定の傾斜を示しつつあると評価してよいであろう。ただ、倉垣窯の延長上で明確な基本三種の専業生産体制を確立した珠洲窯が創出される見通しをもてるかといえ、否定的といわざるをえない。能登における終末期の須恵器生産の実態把握が不十分な現況では即断を避けねばならないが、倉垣窯ではすでに大甕類は生産されておらず、旧守的性格の濃厚な須恵器生産技術からの自律的刷新は期待し難いように思われる。当窯の存続年代を直接割り出す傍証資料は存しないものの、相対編年の枠組みでは10世紀第3四半期頃が想定されるので、能登の須恵器生産は、越前・加賀より一窯式程度早く終焉を迎えたことになり、そのことは、北陸でも土師器の供膳器での一般化が東高西低の形で進行する事象とも整合する。したがって、私見で大過ないとすれば、珠洲窯の南辺で錯在する宮犬窯の廃絶<sup>25)</sup>と珠洲窯の成立の間

には、約1世紀半ほどの時間的空白が生ずることとなろう。

上記概述した終末期須恵器の生産形態は、加賀南部の中核窯加南窯では一段と鮮明に捉えられるが、そこでは、東国的な能登とは異なる局面が見出される。

加南窯は、能登・羽咋両窯同様、古墳時代以降平安中期まで加賀最大の窯跡群として推移したが、南接地域の辰口窯<sup>26)</sup>（能美郡辰口町）の製品と比較すると必ずしも良質の陶土に恵まれたとは考えにくいにもかかわらず、終始新来技術の導入を梃子に在地の土器様式の創成に主導的役割を果たし、高度の政治性を有していたと推察される。そうした本窯の特殊性は、8世紀中葉と9世紀初葉頃を画期とする地方官衙の関与が弛緩し、郡に基盤をおく分業圏が再編成され、須恵器生産が急速に9世紀末葉から10世紀代にかけて衰退に向かう過程で、辰口窯や加賀北部の金沢窯が廃絶し、加賀北辺の中核窯加北窯も10世紀代には縮小・分解の方向を辿るなかで、ひとり一定の生産水準を保持したことによく示されている。10世紀代の加南窯の生産域は、窯跡群北東部の小松市戸津・ニツ梨地区に集中することが知られていたが、昭和57年～59年度に小松市教育委員会が緊急発掘を実施した戸津支群の主要部分約1万㎡の範囲で、須恵器窯25基、土師器窯18基が検出され、須恵器窯は8世紀代（I<sub>1</sub>期）の3基以外は9世紀末葉から10世紀代（IV<sub>2</sub>・V<sub>1</sub>・V<sub>2</sub>期）に帰属し、終末期の操業実態が把握されたが、特に多数の土師器窯と生産の場を共有していたことから、終末期須恵器の生産形態の考察に貴重なデータを提示した<sup>27)</sup>（写真図版1）。当支群の群構造＝生産規模・組織の分析は詳細をまたねばならないが、時期別窯跡数を配置・切り合い関係から整理すると、1世代最大5～6基程度が稼動した1～2の単位群を基礎として展開することとで、それも終末段階には窯跡数が減少し、おそらく単独窯で終熄しているようである。窯体は、狭隘な緩斜面に改築・縮小と小形窯の派出を反復する形で過密に築窯され、窯体規模の推移は必ずしも規則的とはいえないが、全長6～7mから後半には2～4mばかりの矮小なものが増加しており、構造も焚口を絞った幅広の平面プランと、床面傾斜が焚口から燃焼部に向かっていったん下降し、焼成部で反転して40～60度の急傾斜で立ち上がる火の引きの強い燃焼効率（燃料節減）を意図したものに改変されている。これに、緩斜面の下段に2m前後の多様な平面プランを呈する土師器の開放式平窯が併設されている点を加味すると、一定の集約的生産と表裏一体をなす山野の用益に強い規制が看取されるのである。ここで検出された須恵器窯と土師器窯の併存に表徴される須恵器工人と土師器工人の関係については、北陸の律令的土器生産体制の評価とかかわるため詳細は別稿に譲らねばならないが、律令国家の成立を現実的契機として、土師器工人も煮沸器セットの製作に須恵器製作技術を導入する

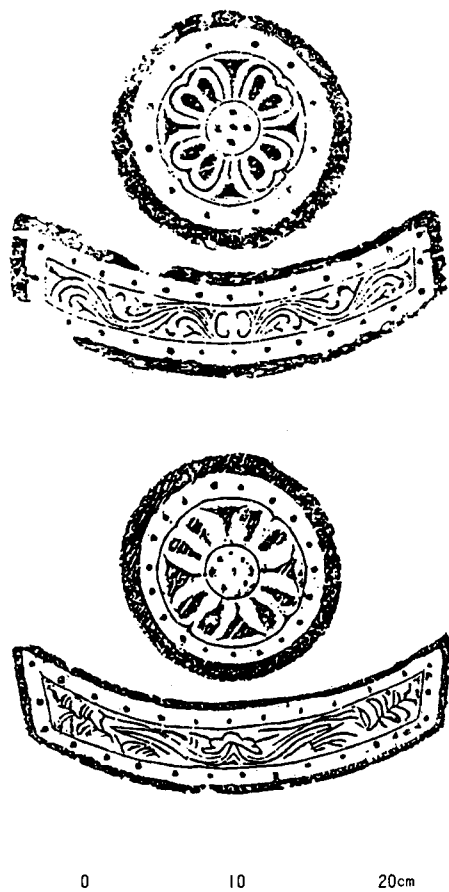


形で、世襲的特殊技能公民＝匠丁として国衙の匠丁帳に登載され、おそらく郡ごとに生産域を共有する単一の土器工人組織に編成され、10世紀代に至ったものと理解しておきたい。ただし、須恵器窯より先行することが確認された土師器窯は若干で、大部分が須恵器窯と併存ないし後出するとみられる<sup>28)</sup>から、単一の土器工人が各種の須恵器と土師器（黒色・赤彩土師器を含む供膳・煮沸器一式）を作り分ける段階から、須恵器生産の終焉に伴い律令公民＝匠丁身分を離脱して、国衙・有力寺社の寄人化し、あるいは村落の土師器工人として帰村してゆく状況を窺知することができるであろう。

ここにみた戸津支群における生産域の規制と一元的に編成された生産組織のあり方は、10世紀代の須恵器生産が国衙権力を媒体として維持されたことを示唆するが、そのことは、当該期にみられる瓷器型土器の盛行と屋瓦技術の導入によっても傍証されよう。

第一の瓷器型土器<sup>29)</sup>については、すでに9世紀後半代その影響下に有台碗などの新器種が出現しており、有台碗・皿のセットに耳皿、小瓶などを加えた須恵器組成の祖型は猿投窯黒笹90号窯式<sup>30)</sup>に求められるが、併存年代を考慮すれば、平安京と特定の需給関係を保持した丹波・篠窯<sup>31)</sup>からの間接的伝播とするのが妥当であろう。そうとすれば、当該期を特色づける器種として量産された広口鉢や徳利形中瓶の器種系譜の理解も容易となる。そして、越前南部の中核窯、越南窯（福井県丹生郡宮崎村）<sup>おぞ</sup>小曾原支群の生産形態が戸津支群と近似しながら、器種・器形がかなり相異する<sup>32)</sup>点に留意すれば、さきのV<sub>1</sub>期の須恵器供膳器にみる技術改良に伴う品質向上の努力とあわせ、平安京からもたらされた土器がモデルとされたことは想像に難くない。

第二の屋瓦は、戸津地区の2基（37・38号窯）と二ツ梨地区の2基の灰原から出土しており、国衙権力を介する平安京からの直接的な新来技術の伝達方式の実在を端的に示す。確認された瓦当は、一本作りの復弁八葉蓮華文軒丸瓦1種、変形均正唐草文軒平瓦2種（A・B類）、斜角文1種がある<sup>33)</sup>。軒丸瓦は、貞観16年（874）創建にかかる貞観寺推定地（深草中学校遺跡）をはじめ、洛北東播枝（栗栖野）瓦窯、奥海印寺瓦窯、あるいは平安京大内裏の創建瓦に後続する一類<sup>34)</sup>の退化型式であって、セットをなす樹枝状の変形唐草文軒平瓦の図形は、貞観寺式のセットを構成する軒平瓦とは直接対応関係を有しないものの、類似のモチーフは平安京出土品に見出すことができる（第4図）。この一群は、戸津支群から約10km北東の梯川中流域の<sup>かけはし</sup>古府台地に設営されたといわれる加賀国衙周域に占置する加賀国分二寺推定遺跡（小松市古府十九塔山廃寺・軽海廃寺）で傍系瓦として使用されており<sup>35)</sup>、一本作り造瓦技法の導入と



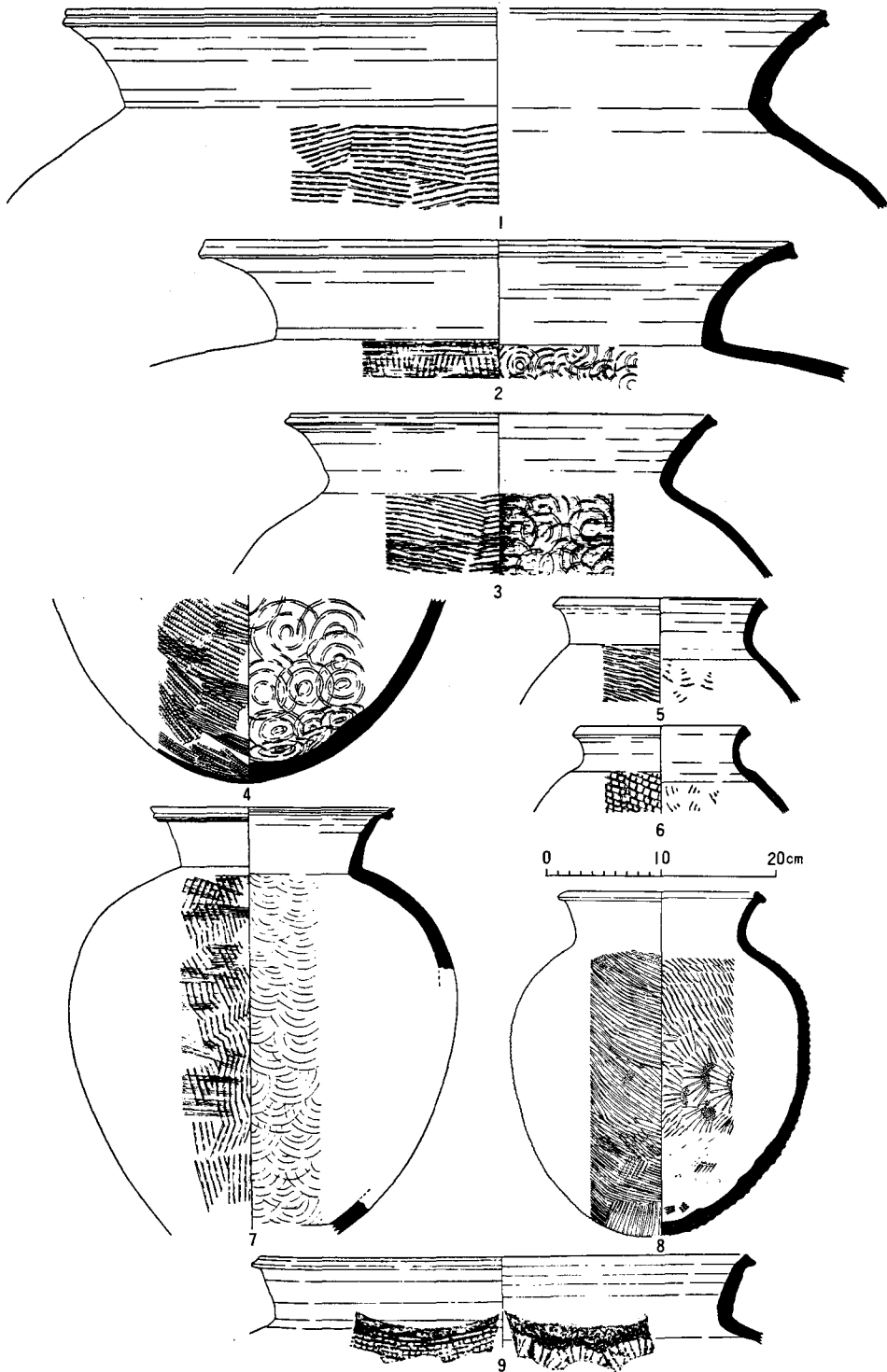
第4図 加賀南部の平安京官衙系屋瓦  
(上 平安京朝堂院跡, 下 戸津37・38号窯)

瓦当意匠を、平安京から招寄された瓦師による須恵器工人の新技術教習の産物とみることに異論はあるまい。当期の国分二寺修造は、天慶5年(942)、加賀国守源中明に対する、「国分寺并諸定額寺仏像・堂舎尤実破損、(中略)国分寺堂舎者、以例料、若不足者、申官請料、(下略)<sup>36)</sup>」を旨とする勘解由使勘判の提示があり、屋瓦に共伴した須恵器(V<sub>1</sub>期後半)の推定暦年代観より幾分古い、この間の史的背後事情を知る上で看過できない。

かくて、北陸における律令制須恵器生産体制の終末が、地域格差と生産形態の相異をみせながら10世紀代のうちに求められるならば、中世窯成立までの長期間、在地産の貯蔵器が欠落することとなる。この点を、11~12世紀前半代の消費遺跡で追試してみよう。

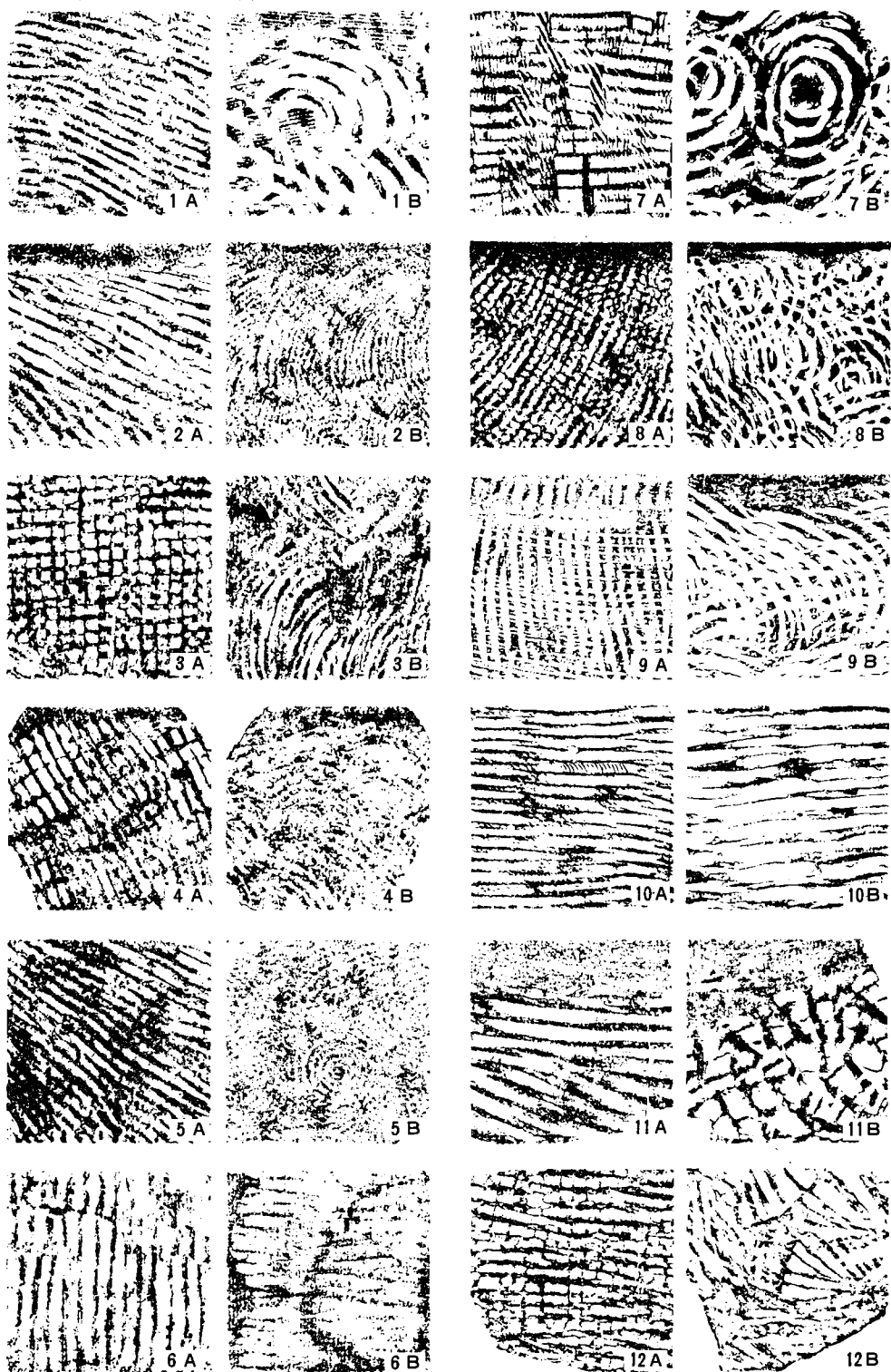
能登では当該期の良好な遺跡が報ぜられていないので、加賀の事例をとりあげ

たい。まず、11世紀前半頃の郷保長級在地領主の居宅跡と推定した、加賀北部の松任市三浦遺跡<sup>37)</sup>の調査所見によれば、供膳器は緑釉・灰釉陶器を除けば全て土師器で占められ、圧倒的多数の糸切り不調整の碗と一定数の有台碗、少量の皿・有台皿・小碗および黒色土師器有台碗よりなり、器種・器形・法量の淘汰と統合が極限状態に達したことが知られる。ここで注目されるのは、第1調査区で検出された掘立柱建物の北辺で、複合して掘り込まれた小竪穴付近を中心に大甕が2個体分出土したのをはじめ、掘立柱建物の柱穴覆土および包含層から多数の須恵器甕壺類が集中的に出土していることである。甕類の叩打原体は平行条線状a・b類とc類の量比が半ばし、押圧原体は同心円状が主体をなし、平行条線状ないし重弧状がこれにつき、加南窯V<sub>2</sub>期で30%を占めた細同心円状および放射状原体は僅少で(第6図5・11・12)、器形的特徴も同期と変化ない(第5図1~4)。これに対し、壺は器高30cm、口径15~16cm



第5図 能登・加賀のⅥ・Ⅶ期の須恵器  
(1～6 三浦上層遺跡, 7 戸津3号窯灰原, 8 珠洲沖, 9 田尻遺跡)

北東日本海域における中世窯業の成立



第6図 加賀のV・VI期須恵器の叩き目 (1/2)  
(1～6 戸津3号窯灰原, 7～12 三浦上層遺跡)



第7図 加賀のⅦ期須恵器・珠洲Ⅰ期の叩き目 (1/2)  
(1～10 田尻遺跡, 11・13・14 神田遺跡, 12 荊波神社経塚)

前後の撫で肩長卵形丸底の体部に、正・長方形格子目ないし粗荒な平行条線状叩き目c類を施すが、押圧具に同心円状のほか放射状原体を使用し（第5図8）、これを消去した個体（第5図5・6、第7図4）が目立つ。甕の大半は胎土の観察からしても加南窯産と判断してよいが、壺は加南窯での出土例がなく産地未詳である。

三浦遺跡でみられた甕類の所有・使用状況は、平安京左京四坊一条所在藤原国明邸推定地内SE8井戸出土の寛治5年（1091）墨書銘東播産小鉢に存続期間の一点をおく中国陶磁のセットを伴出し、浦刀禰級在地領主の居宅跡かと推定される加賀市田尻シンペイダン遺跡<sup>38)</sup>でも認められる。すなわち、当遺跡の供膳器はVI期の様相が一変し、土師器碗皿類が4種28類に細分される反面、口径8～9cmの小皿が総量の47%を占め器形別法量分化示向が定着し、瓦器碗の影響とみられる黒色土師器の一時的復活とともに、一定量の中国陶磁（白磁碗皿）が共伴し、磁器模作の土師器小皿も存する。そして、居宅域と野鍛冶工房を含む生産域を画する大溝に遺棄された相当数の須恵器甕片は、胎土・焼成および叩打技法によって、三浦上層遺跡同様、打圧原体は左下がりの平行条線状c類のほか細正格子原体を若干含み、押圧原体は同心円状のパラエティで占められ、一部押圧痕を指頭状撫でなどで消さないし二次調整を加えた、加南窯産とみられる一群（第7図5～10）と、産地未詳のグループ（1・2）に大別でき、後者は少数である。問題の産地未詳の甕片は、概して焼成不良で、簾状ないし細正格子目の打圧原体を用いた右下がりないし横位叩打を行い、押圧痕を柔軟な草木状器具による撫で調整を施す特徴的な技法が目立つが、1点のみ口縁形態の判明する個体で、簾状打圧原体と放射状押圧原体を使用したもの（第5図9）が存する。なお、加賀のV～VII期に帰属する須恵器甕壺類で特徴的な放射状押圧痕は簡略化された同心円状押圧痕（第7図11B・12B）とともに、珠洲I期に少数ながら使用されている（13B・14B）のは、珠洲工人ないし技術の系譜を考定する上で看過できない。

三浦、田尻両遺跡で示された土器組成については、なお他遺跡での検証を要するが、前者がIV<sub>2</sub>期を始期とする律令の土器様式解体の終着に位置づけられるのに対し、後者は中世的土器様式として定型定量化される直前の不安定な構成を示しており、そのことは甕類の寄せ集めの流通状況とも相即する。三浦遺跡の甕壺類の出土状況については、全てをVI期の伴出物と確定できないが、田尻遺跡では被火痕をとどめ同時に使用された一括遺物に、加南窯産と観察される甕片が相当見出され、器形および打圧・押圧原体に変化がみられないことからすると、長期間伝世的に所有・使用された可能性も皆無とはいえないが、11世紀代以降、加賀南部で未発見の甕壺専用窯が引きつづき稼動したと考えるべきであろう。いずれにしても、三浦遺跡から出土した一

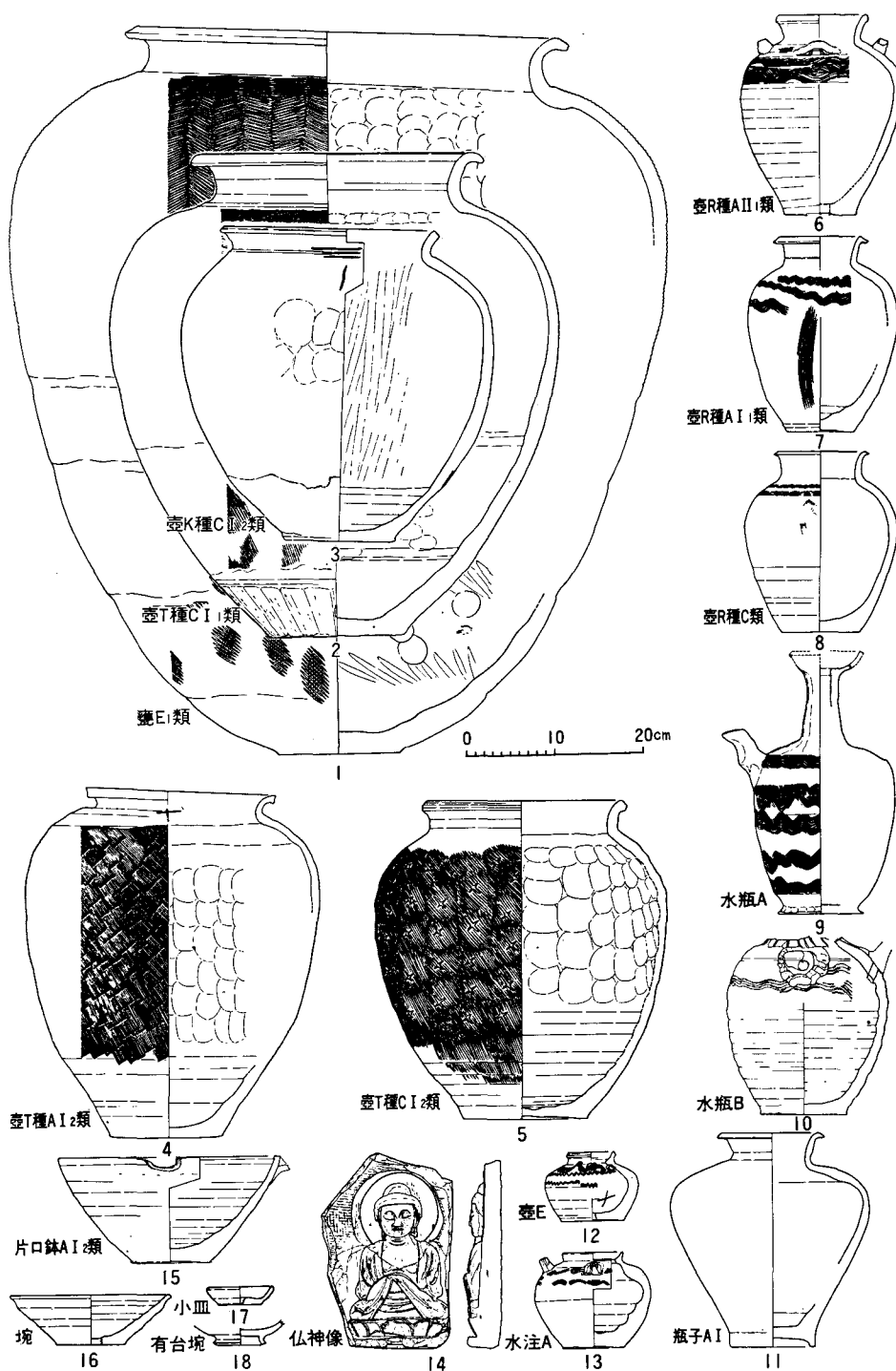
群の壺と同類の甕が田尻遺跡でも出土し、これと胎土・技法がやや異質な遠隔地からの移入品が実在する意味は大きい（後述）。ここでは、10世紀代に郡を単位とする律令的分業圏に代わり、より狭域化した在地産供膳器（土師器皿主体）とは対照的な、貯蔵器の一国分業圏の形成が予測されるとともに、さきの瓷器型土器の盛行と表裏一体をなす、近江産の緑釉陶器を主とし、東濃産の灰釉陶器を従とする施釉陶器が、在地寺社・領主層の日常用器ないし祭器として一定量消費され<sup>39)</sup>、平安京内<sup>40)</sup>に準ずる食器の様相を呈している。すなわち、11世紀代には須恵器＝貯蔵器、土師器＝供膳・煮沸器という機種別機能分担が完結して、特定器種の広域流通が貯蔵器におよび、在地中世窯が開窯する基礎的条件が醸成されつつあったことを指摘するにとどめたい。

## 2. 創業期の珠洲陶器と年代観

珠洲窯で現在確認しうる最古の窯跡は、珠洲市寺社カメワリ坂1号窯<sup>41)</sup>である。調査が灰原の試掘にとどまっているため、厳密な一括遺物を獲得するに至らず、後述のように消費資料に即していえば、若干先行する窯跡が今後発見される可能性は残されているが、創業期珠洲陶器の基本的な器種組成および生産技術は寺社1号窯および幾分後出的な同2号窯で把握できるので、まず当窯の遺物の検討からえた珠洲陶器の特質を要約してみよう。

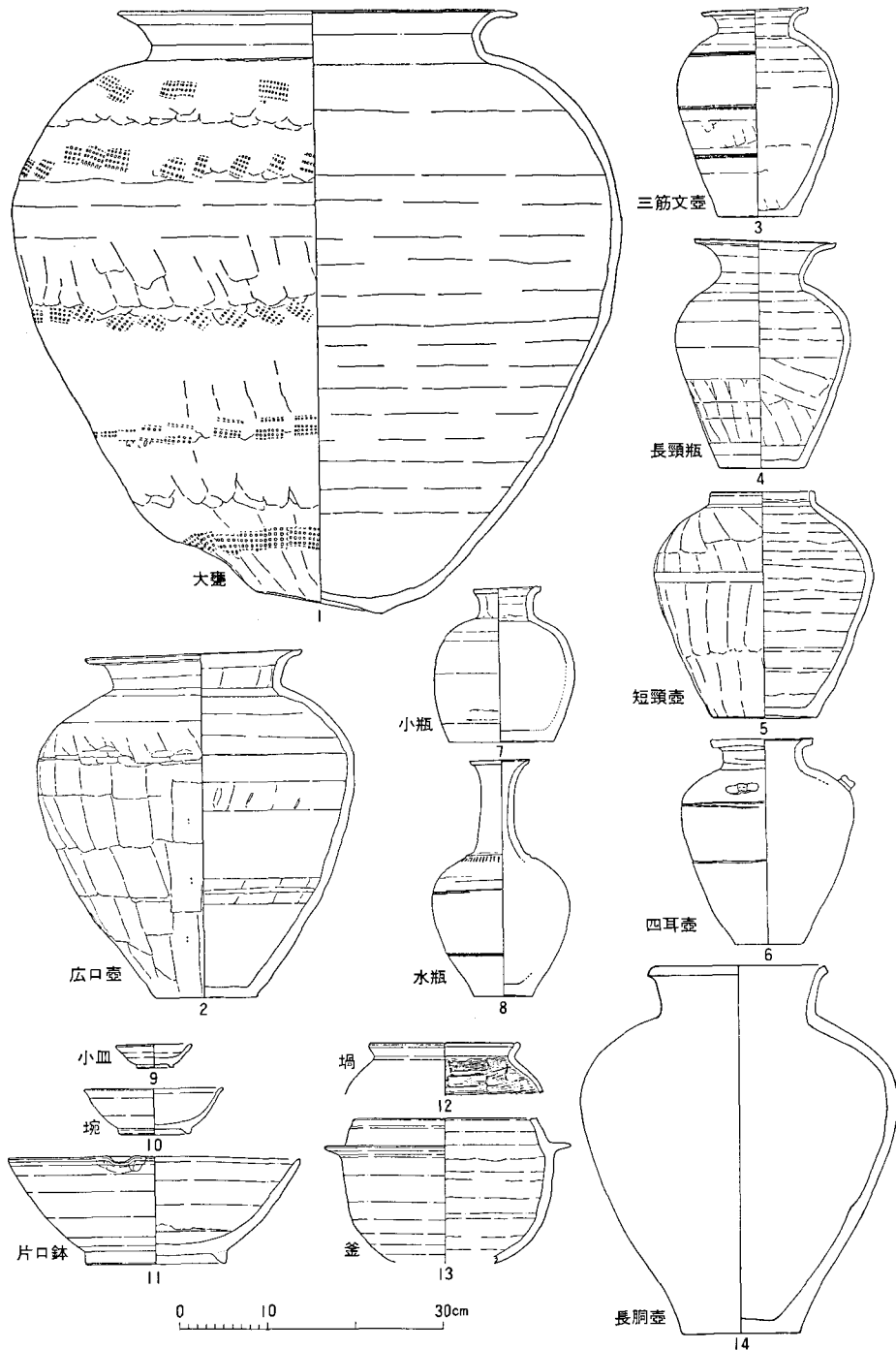
寺社1号窯期（Ⅰ期）の器種組成は、ほぼ基本三種に限られ、甕A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>類、壺T種（叩文）大壺A<sub>1</sub>類、中壺A<sub>2</sub>・C<sub>2</sub>類、K種（削磨）中壺C<sub>2</sub>類、壺R種AⅡ<sub>1</sub>・Ⅱ<sub>2</sub>類（櫛目文長胴四耳壺）、AⅠ類（同文無耳長胴壺）、B類（素文長胴壺）、C類（櫛目文短胴壺）、および片口鉢A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>類よりなる。これに、消費資料によって、瓶子・水瓶（浄瓶）・小瓶、経筒、仏神像、有台碗・小皿が加わり、珠洲陶器の器種が殆んど網羅されている（第8図）。正確な器種別量比は算定できないが、甕と壺T種が多く片口鉢は比較的少ない。また、甕は口径40～50cm前後の中形品が多いようで、壺T種、R種A類の口縁・体部形態および法量に斉一性が認めにくいことは、次に述べる加飾技法の多様性とあわせ全体に規格性に欠けるとはいえ、当初より基本三種は定量的組成を確保していたといえよう。

次に、製作技術についてみると、甕・壺T種が紐叩打、ないし固有の紐轆轤（口頸・下胴）＋紐叩打（上胴）分割合成技法による3段、ときに4段成形成品とするところに当期の特色が見出されるが、紐叩打→削磨仕上げによるK種もすでに存する。壺R種、片口鉢は、いずれも底面に回転あるいは静止糸切り痕をとどめる紐轆轤成形成品



第8図 珠洲Ⅰ期器種組成図 (壺16・17のみⅡ期)





第9図 常滑Ⅱ期器種組成図(14のみ渥美窯, 6はⅢ期)  
 (1～5・7・9～11 出地田1.4号窯, 6 伝松原山東窯,  
 8 西椎の木山窯, 14 坪沢10号窯, 拠註43.136.58文献)

で、前記分割合成技法とともに、轆轤への依存度の高さを指摘できる。また、加飾技法は、刻文を主とし刻印を有する個体は少ないが、装飾印打文が目立ち、轆轤の多用と一体的に発達した変化に富む櫛目波状文が壺R種A・C類、瓶類にとどまらず、一部日常用器=甕・片口鉢にも使用されているところに、創業期の特性が認められる。打圧原体は整正な平行条線状ないし装飾の原体による多分に加飾的な整然とした右下がり一方向の印打法のほか、甕壺類に鮮鋭な綾杉状印打を施したものがあり、珠洲陶器独特の製作・加飾技法が出揃っている。

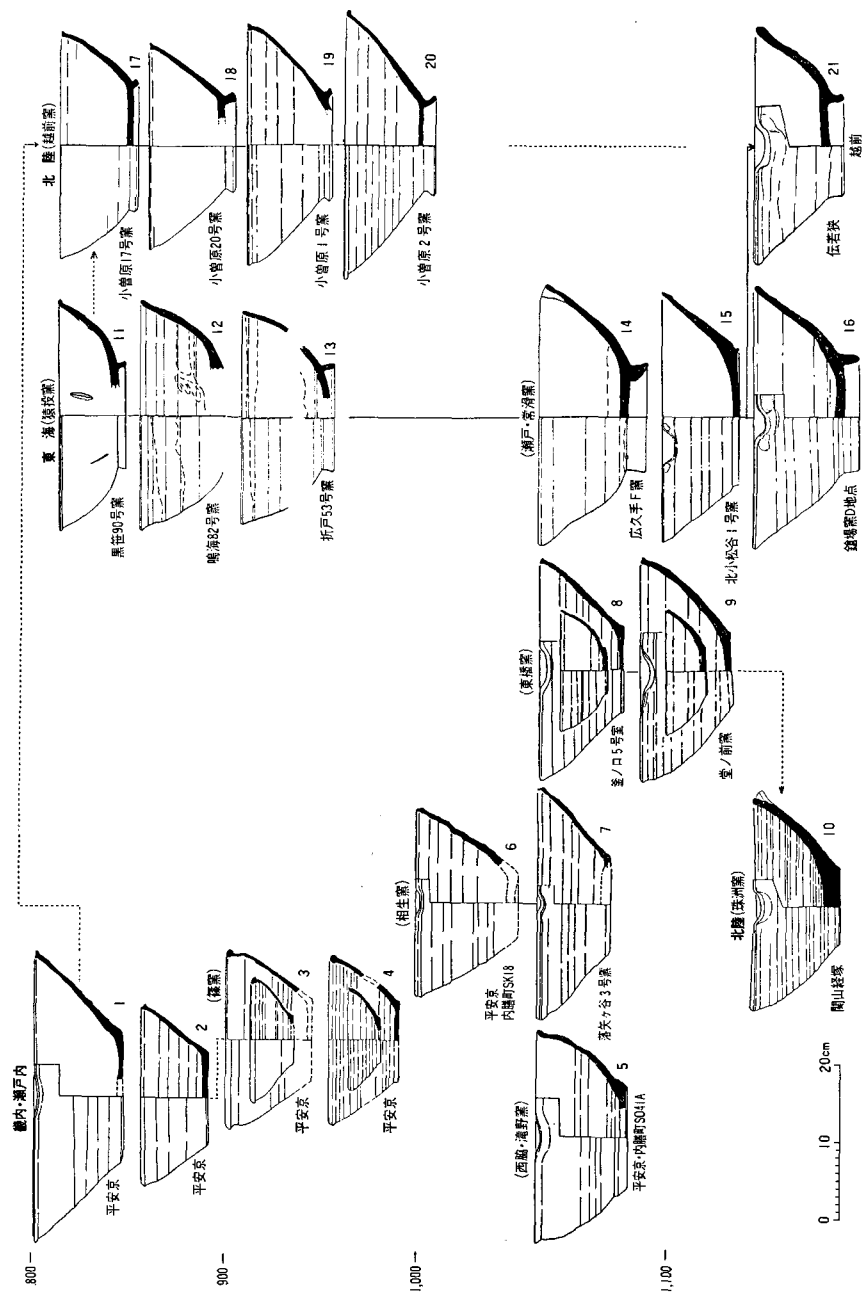
このようにみえてくると、珠洲陶器は、成立当初から旧来の在地須恵器とは断絶性の濃厚な、器種組成および製作・加飾技術大系として完結性を有していたことが明らかである。そして、加飾性の濃厚な奢侈品、あるいは宗教器、壺T種・R種に代表される非規格的特注的生産品の比重が比較的高い側面を有するものの、民間必需の非需給物資としての基本三種を主体とする、定型定量的な量産体制をとっていたと評価してよいであろう。

上記概述した創業期珠洲陶器の特質は、紐叩打ないし紐轆轤成形と還元焰燻焼成という須恵器の伝統的な生産技術を継承しながら、在地の須恵器からの自律的展開あるいは技術的改良によって創出されたとは考え難く、そのことは、前項でみた須恵器生産終末の動態あるいは11世紀代以降の甕壺類からもいえよう。そこで、珠洲窯に先行して開窯した常滑・渥美・猿投窯を核とする東海の瓷器系諸窯と、神出・三木両窯<sup>かんて</sup>に代表される瀬戸内の須恵器系諸窯との対比・検討を通して、その技術的系譜を探ってみたい。

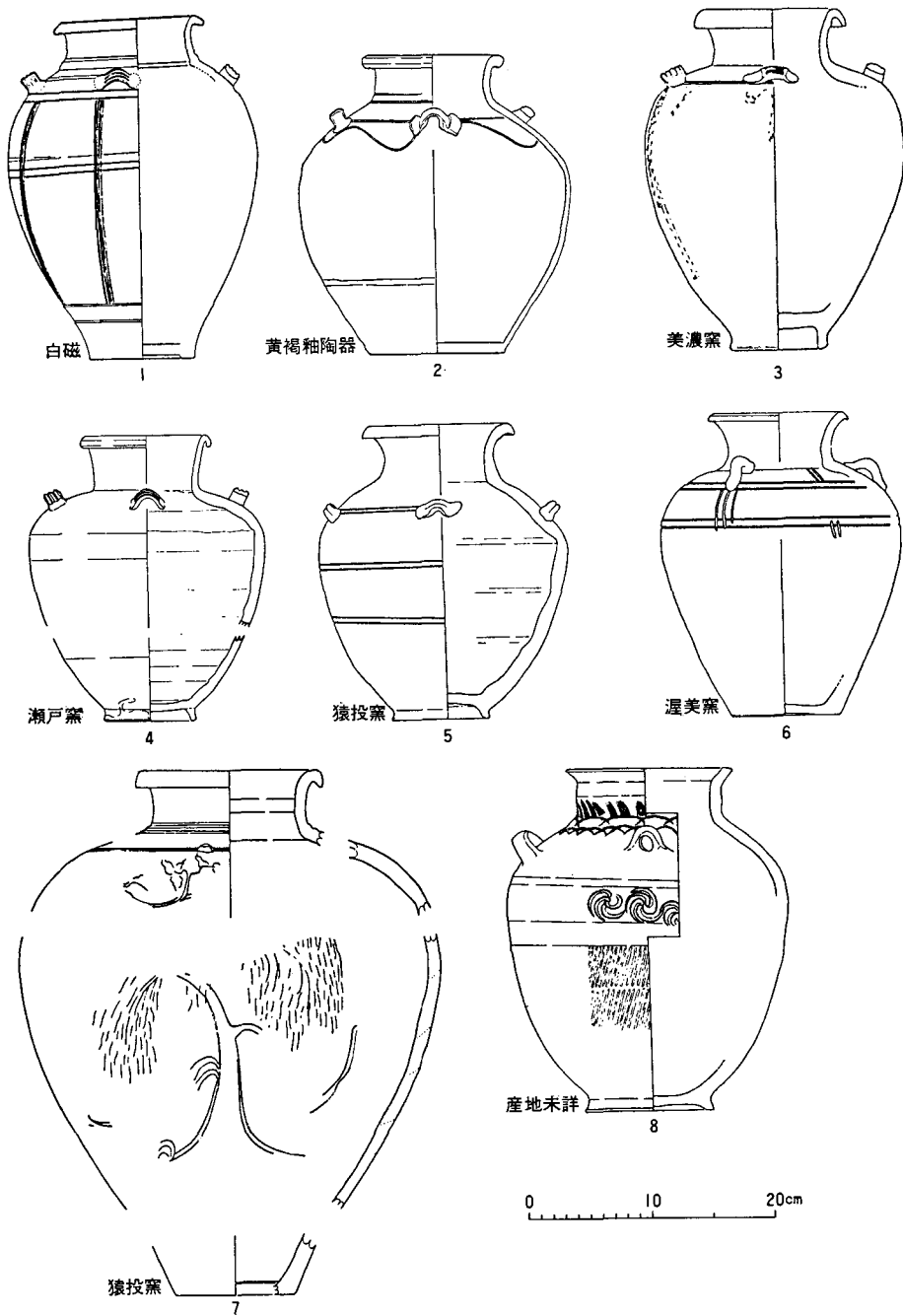
常滑・渥美窯の器種組成（第9図）は基本的に珠洲窯と同じいが、珠洲窯に埴皿が欠落しているほか、(1)器種・器形を共有するものに、大甕・大壺（広口壺）、壺R種の一部、瓶子・小瓶、蓋身を印籠作りとした経筒<sup>42)</sup>、(2)器種は共通するが器形が異なるものに、片口鉢、壺類の一部、水瓶、経筒など宗教器、(3)独自の器種・器形として、常滑・渥美三筋文壺・広口瓶、珠洲瓶子A I類、仏神像がある。また、東播系陶器と対比すると埴皿の有無のほか、器種が殆んど基本三種、それも壺R種は僅少で大体甕（珠洲のT種に相当する中小甕主体）と片口鉢に限られ単純で、花文・紋章文刻印以外に加飾法が殆んど発達しない点で、同じ須恵器系でも珠洲と異質である。前記常滑・渥美窯と同じ設問で対比すると、(1)片口鉢、(2)甕・壺、(3)瀬戸内・九州の諸窯に通有の有帯広口瓶となる。

これをやや仔細にみると、常滑・渥美窯との類似は、倒卵形長胴小平底の体部に、コの字状に立ち上がり端部を舌端状に拡張する口頸部を取り付けた大甕に端的にみら

れる。もっとも口胴指数は、珠洲が65～85と幅をもつのに対し、常滑の諸窯（出地田4号窯、松淵12・22号窯、ニツ峯6号窯他<sup>43)</sup>）は65～68と幾分狭口に作る傾向があるようで、口縁部の作工も寺社1号窯では舌端状に拡張しつつ外屈させるタイプが目立つ。そうした形姿とともに、小さな平底から体部を6～7段積み上げた後口頸部を内側から接合し、下胴は珠洲陶器に一般的な器全面に密な縦位の叩打を施さず、継ぎ目にまばらな横位の叩き廻しを行い、初期の押印による打圧と同じ効果を連想させる個体（第8図1）が存するのも、偶然の一致とはみなし難い<sup>44)</sup>。また、広口壺(2)も口縁形態を含め常滑・渥美のその模作とした方が理解しやすく、壺T種のなかには、短頸壺タイプのもも見出せる。有台短頸壺、広口瓶に該当する双耳瓶は、北陸では10世紀代を通して生産され、特に後者は特産品として量産されたが創成期の珠洲陶器のセットに遺存せず、須恵器との器種系譜の断絶性を明示すると考えてよい。小瓶は、同じく10世紀代に一定数製作されており、備前窯でも認められるので多能的な共通器種とみられなくもないが、形態は常滑・渥美製品に近い。また、瀬戸内の須恵器系諸窯との関連については、口頸部から底部まで一貫した叩打成形と丸底の器形も異なるものの、規格的な縦位の叩打法や轆轤回転を利用した隔列蛇行式叩打法は、東播系陶器との親縁性を物語るものであろう<sup>45)</sup>。そのことは、高台の有無と口縁形態により瓷器系と須恵器系との区分が明確な片口鉢が、灰釉陶器有台大碗（丸鉢）の器種系譜を負う東海と、無台の盤Aを祖型とする瀬戸内の須恵器系諸窯の二系併列で発達し<sup>46)</sup>、端部平縁で高口指数が大きく身が深い珠洲片口鉢が、後者に帰属することにもよく示されている（第10図）。さらに珠洲陶器には、東海の瓷器系、瀬戸内の須恵器系のいずれの器種系譜でも捉えにくい壺R種AⅡ類がある。当類の器形と加飾は個体差が著しいが、口頸部が弧状に外反し倒卵形長胴の体部に流動する櫛目波状文がめぐり、肩にブリッジ状横耳を付す形姿は、一見して白磁四耳壺と平底の黄褐釉系四耳壺ⅡE類<sup>47)</sup>の合成的模作を思わせる（第11図）。白磁四耳壺の移入は12世紀代に始まり、青白磁合子類とともに主として経容器・蔵骨器への転用例が多い<sup>48)</sup>が、平出紀男氏分類ⅠA～C類<sup>49)</sup>を忠実に写した国産灰釉四耳壺の案出は、12世紀第3四分紀頃の年代観が与えられている猿投（東山）窯H—G65号窯期を遡らず<sup>50)</sup>、瀬戸窯菱野団地群水無瀬窯<sup>51)</sup>および美濃須衛窯も12世紀後半代、常滑窯は13世紀初葉に下がる（第9図6）。<sup>52)</sup> しかりとすれば、無高台で口縁形態が便化し、櫛目波状文の加飾を加えた珠洲四耳壺は、15世紀代以降呂宋壺写しの球胴四耳壺が生産されていることをも考慮すれば、白磁四耳壺を直接モデルとして案出された可能性が強く、宗教器を含め中国陶磁の代用品として、北東日本海域から一部畿内周辺まで広域に流通したのである

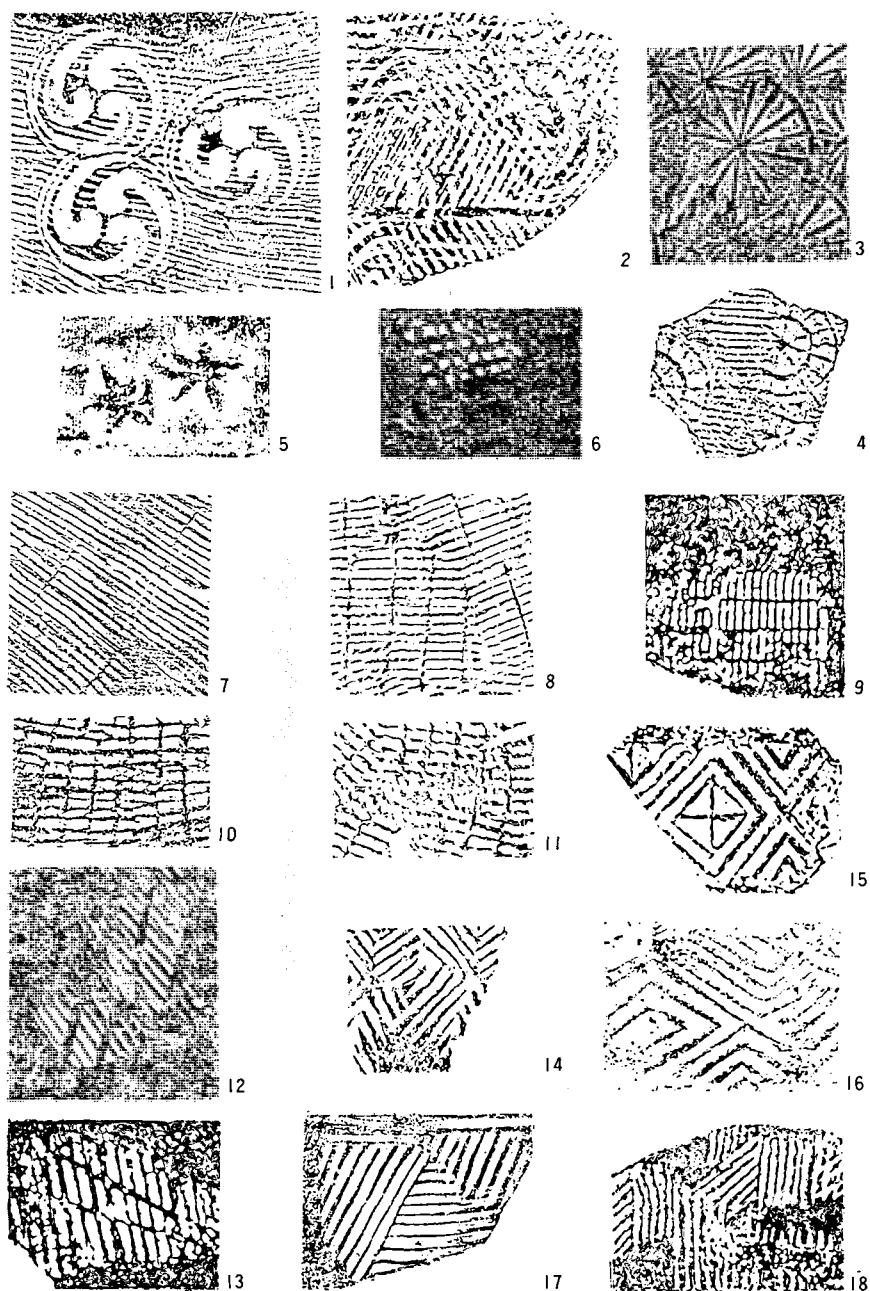


う。このほか、東海の瓷器系と器種が共通しながら器形=系譜の異なるものに水瓶がある。珠洲系水瓶は数例知られているが、うちA類(第8図9)は佐波理布薩型水瓶の先駆とされる紀伊・那智経塚の遺品<sup>53)</sup>に近似している(受口状口縁、撫で肩長胴に中



第11図 四耳壺各種

(1 新潟県十楽寺経塚, 2 奈良県於美阿志神社十三重塔, 3 未詳, 4 瀬戸市水無瀬中学校遺跡, 5 未詳, 6 岐阜県横倉寺裏山遺跡, 7 愛知県清林寺遺跡, 8 京都府永明寺道勘山遺跡, 拠『日本出土の中国陶磁』『美濃の古窯』註51.136.50文献他)



第12図 珠洲窯と常滑・東播窯の加飾法

(1.3.5.6.7.10.12.14.17 珠洲, 2.4.8.11 東播,  
9.13~16.18 常滑, 抛註43.57文献他)

途でかるく屈折する注口を付し、高台を台底に作り出す)のに対し、常滑、渥美のそれは古代の猿投窯で製作された仙蓋型と王子型2系統の水瓶のうち後者のタイプを継承・製作している<sup>54)</sup>(第9図8)。なお、I期の珠洲系に散見する小型把手付水注は、黄褐釉系水注に近似例<sup>55)</sup>が見出せるが、常滑・八巻2号窯出土水滴と同様大阪府榎尾山経塚出土花鳥文金銅製水滴<sup>56)</sup>等がモデルかと思われる。さらに、珠洲宗教器で比較的目的立つ瓶子のうちA I類(第8図11)は、怒り肩台底の漆器写しとみられるが、供養具をセットで仿製せず、それぞれの器質・形態・加飾の総和された尊貴性を発揮すべく個々に選択・模作したところに、創成期中世陶器の商品的性格の一端が窺えよう。

上記略述した器種組成ないし特定器種の器形の類似は、一見同時多発的な“他人の空似”現象とみなされやすいが、東海の瓷器系と瀬戸内の須恵器系との合成的要素を基礎とする珠洲陶器の基本的性格は、加飾法についても確認できる。すなわち、珠洲製品の加飾法のうち、I類刻文(A刻字文・C記号文・D抽象文)、II類刻印(D印花文・E紋章文・F格子目文)、IV類装飾叩打文(A物象文・C幾何文・D簾状文)、およびII期以降のV類刻画壺が、前記瓷器系、須恵器系中世諸窯との技術交流の所産であることは、すでに述べた通りである。このうち、II類とIV類の大半は東海の瓷器系の押印文様の転写とみてよい。格子目文は最も普遍的な押印文様であって、これを使用した壺R種A I類の刻印(第12図6)が当該原体としては異例の長方形を呈するところに、押印文様に由来することが明示されている。また、装飾叩打文はI・II期を特色づける加飾法であるが、甕壺類の一部に用いられた重線菱形文(14~16)・重線三角文(17・18)などの幾何文、格子目文の一類としての簾状文とその変異図形(9・12・13)は、常滑陶器の12世紀第2・3四半期頃に盛行した押印文様に類似の図形が見出せる<sup>57)</sup>。物象文とした紅葉文(5)は、渥美大アラコ6号窯に小刻画をあしらった甕が周知されており<sup>58)</sup>、個別的な対比では彼我の交渉を裏づける物証とは即断できないが、各種刻文の盛行は例えば珠洲窯では花押状刻文に連なる略押状刻文が独自に発達するなどの相違があるものの、渥美窯で多用された刻字文刻文のごとき加飾法と無縁の存在とは考えにくい。一方、東播系諸窯との交渉を示すものに紋章文刻印(II類E, 1・2)と車輪叩打文(IV類A, 3・4)、簾状叩打文(IV類D, 7・8・10・11)が挙げられる。これらは、壺T・K種大・中壺で使用されているが、巴文は12世紀中・後半代と推定される三木市与呂木7号窯<sup>59)</sup>、車輪文は魚住窯III期<sup>60)</sup>(13世紀前半代)から甕片の出土が報ぜられており、珠洲窯に確実に先行する資料ではないが、巴文軒瓦の初現が堀川天皇御願の六勝寺第二尊勝寺(康和4・1102年落慶)にあり<sup>61)</sup>、寛治5年(1091)には西園寺家の車紋に使用されている<sup>62)</sup>ので、初期中世陶器

にみられる巴文・木瓜文・橘文等が六勝寺系寺院造立の実質的な推進主体となった、院近臣＝受領国司をはじめとする顯門の家紋として普及したとすれば、造瓦備進を介して緊密な連携を保持した東播系諸窯の装飾文として採用されるにふさわしい。また、簾状文は東海、瀬戸内のいずれにも見出され、特に讃岐・十瓶山窯では10世紀代以来の伝統的な打圧原体であった<sup>63)</sup>。したがって、珠洲窯のその発源をいずれかに特定するのは困難であるが、ここでは、11世紀代に加賀南部で検出された産地未詳の外来系甕類にみられた格子目文グループとの関係も無視できないことをつけ加えておく。

以上、製作技術および加飾法を吟味してきたところによって、珠洲製品がきわめて独創的な技術体系として完結しながら、東海の瓷器系と瀬戸内の須恵器系に一部中国陶磁の直接的影響を思わせる複合的性格を具備していることを明らかにしえたと考える。なお、創業期珠洲窯の窯体構造は不明なものの、14世紀代の珠洲市法住寺3号窯<sup>64)</sup>が、全長9m以上、床面最大幅3.6mを測り、平面長舌状を呈し、半地下式から地上式に改築されていることを考慮し、湮滅したといわれる寺社カメワリ坂窯の床面幅約2.9mとの報告<sup>65)</sup>を可信すれば、須恵器窯の構築が量産に即応する東海の瓷器系窯に通有の大害窯に倣い、肥大化を図ったとも解されるのである。問題は、珠洲窯が在地の須恵器生産の存続を前提としたとしても、中核的生産地から遊離して、突然出現している以上、珠洲製品の生産技術体系の創成が、在地の須恵器生産集団の出自を負う工人による両系列の技術・技法の吸収・合成とみるか、それとも両系列の工人を現実の担い手の一部に想定しうるかであろう。この点にまで立ち入って考察を深めるにはなお資料が不足しており、確定は将来に期さざるをえないが、しいて仮説的な見通しを述べるならば、改良された紐叩打成形技法と片口鉢の系譜に端的に示される須恵器系の生産技術を基軸としながら、瓷器系示向が模写可能な加飾法のみならず、器種組成から大甕の成形と形態におよび、特に全器種平底の形姿を規制したと推定されることを重視して、須恵器工人が中核となり、あるいは後述する遊行聖＝修験者をも含む東海の瓷器系技能民の補助的参画をえて、その技法を取り込む形で固有の技術体系を確立したと想定しておきたい。

それでは、こうした珠洲陶器の複合的構成がどのような自然・人文的状況のなかで創成されたのであろうか。史的背後事情は後述するとして、流通史的環境について関説すれば、第一に、12世紀前半～中葉前後の越前・加賀が常滑窯の流通圏東辺を形成していたとみられることである。この点の資料も乏しいが、越前南部では保元2年(1157)在銘経筒を伴う大野市下黒谷経塚<sup>66)</sup>出土外容器を指標とする常滑甕・鉢が、北陸の頸口部に位置する敦賀市深山寺経塚群<sup>67)</sup>でまとまって発見されているほか、安



養寺、江波経塚<sup>68)</sup>等でも出土しており、点的な分布は加賀南部から奥能登におよんでいる<sup>69)</sup>ことを知ることができる。第二に、須恵器系については、11世紀代既述の産地未詳の甕類が先行して流通しており、一応讃岐・十瓶山窯等瀬戸内の須恵器系窯との技術的類似性が認められるが、器形など細部の対比ができない現状では産地比定は留保せざるをえない。なお、胎土分析の結果は、十瓶山窯ないし珠洲窯産と判定されており<sup>70)</sup>、重大な問題を提示した。ただ、右下がり簾状ないし細格子目状打圧原体については、Ⅰ期珠洲陶器との系譜的脈絡が辿れても、内壁を入念に撫でて押圧痕を消去する技法は珠洲陶器に連ならず、胎土の肉眼観察の範囲では、能登の須恵器に独特の新第三紀海成層に由来する海綿骨針の混和は確認できない<sup>71)</sup>。一方、瀬戸内の須恵器系の製品は、福井市曾万布遺跡<sup>72)</sup>で12世紀後半代の東播系片口鉢の出土が分布の東限をなすが、12世紀中葉頃の東播系窯が武生市五歩市地内で発見され<sup>73)</sup>、東播系工人の足跡が一過性にせよ越前南部におよんでいたことは、近年加賀南部で、紐輪積成形、内外面刷毛目仕上げの還元焰焼成の甕類が散発的に出土するのが注意されるようになった<sup>74)</sup>こととあわせ、在地中世窯開窯直前ないし創業段階の不安定な生産・流通状況を窺わせる。特に、東播系窯の製作技術を殆んどそのまま踏襲した五歩市窯の実在は、必ずしも政治的契機によるとは思えない工人移動の軌跡として、中世窯成立期における技術伝達の一方式を明示しているゆえに、珠洲窯の技術系譜に東播系の要素が組み込まれる過程を暗示しているとも考えられよう。こうした複数の生産技術系列の錯綜した生産・流通状況のなかで、いかに瓷器系、須恵器系が選択され、越前・加賀両窯および珠洲窯として定着していったかの詳細な考察は今後にまつとしても、越前・加賀両窯成立の前提として、越前と加賀南部がいち早く常滑陶器の優勢な流通圏東辺に編入され一定期間推移したことで表裏一体的な関係にあることは容易に想定され、奥能登が、交通運輸形態の限界もあって常滑陶器の点的分布圏として位置づけられるならば、越前・加賀両窯と自ら異質の須恵器、瓷器両系の合成的な珠洲窯が出現する一般的事情をも肯首しうるかと思われる。

ところで、今後、他の中世諸窯との関係について論述をすすめてゆくために、珠洲窯の成立年代について付言しておく必要がある。初現的な珠洲陶器の暦年代資料として、(1)新潟県天神山姫塚経塚出土仁安2年(1167)7月14日刻銘陶製経筒、(2)富山県京ヶ峰経塚出土仁安2年8月10日刻銘銅経筒を収納していた壺Ⅰ種と片口鉢(第8図4・15)、(3)新潟県横峯1号経塚出土「仁□□□」墨書銘を有する和鏡(山吹双雀鏡)を共伴した陶製経筒<sup>(安カ)(年カ)</sup><sup>75)</sup>の3例が知られている。このうち(2)(3)の珠洲陶器は、共伴した暦年代資料によって製作年代の下限が示されることとなるが、京ヶ峰経塚出土の

壺T種が当該器種で最古の型式観をそなえていることを定点として、仁安年間（1166～68）をどの程度遡りうるかを検討してみよう。京ヶ峰経塚出土の壺T種は、怒り肩長倒卵形の体部に鋭利に仕上げた口頸部を取り付けた薄作りの製品で、紐叩打成形の部位は器体の5分の3にすぎず、原体単位の識別が困難な程入念・整美な叩打を行うのが特徴的である。そして、これと同大同工の壺T種が、(1)でも刻銘経筒よりやや後続する状態で2点埋納されていることからすると、京ヶ峰タイプの壺丁種は、(1)のごとく埋経宗儀の執行日にあわせて製作された特注品とまではいかなくても、精巧な作例からして外容器として特定の使用者向けの特製品とみる余地は充分あり、伝世的保有期間を考慮する余地は少ないと思われる。したがって、ここでは、当該器種が型的に3段階の変化が迎れる<sup>76)</sup>ことをも勘案して、珠洲窯の成立が12世紀中葉を遡らず、1160年代を一応の目安にしておきたい。このほか、珠洲陶器で古相の型式観を有するものに、富山県荊波経塚出土の壺T種D類がある<sup>77)</sup>。器高30cm、下胴鉢形作りで薄手球胴の体部に、弧状に外反する長い口頸部を取り付け、右下がり叩打後、器体を倒置して二次的に叩き締め、外底面に木葉痕、内壁に同心円状押圧痕（第7図12B）を残す特異なもので、一見先行的要素が看取される。同一タイプとみられる壺は、富山県<sup>じんでん</sup>神田遺跡でも出土している<sup>78)</sup>が、共伴した基本三種はⅠ期の範型を出ないものの、荊波経塚でセットをなす片口鉢の型式観からして、Ⅰ期でも古期の所産かと思われる。

なお、珠洲窯の成立年代に關説して問題となる資料に、大治5年(1130)刻銘石製容器（石櫃）と同一地点から出土した、福島県松野千光寺経塚出土の珠洲系壺T種（3点）、R種AⅡ類<sup>79)</sup>（2点）、および久安5年（1149）刻銘銅経筒の外容器とされてきた、秋田県上溝観音寺経塚出土の非珠洲系の狭口長胴中壺<sup>80)</sup>（第21図3）がある。前者の石製容器には外筒を伴う大小2個の銅経筒が収納されており、その周囲から板石で蓋をした状態で出土したといわれる陶器にはⅡ期に下る櫛目文四耳壺を含み、他もⅠ期で特に古相を示す個体は見出されない。また、後者も、『雪の出羽路』によれば、久安5年刻銘経筒は河原石積みの遺構に埋納した状態で発見され、現存する壺（片口鉢は亡失）に収納されていたのは別の無銘銅経筒であったことが記事と挿図に記されており<sup>81)</sup>、明らかに別物である。当該素文叩打中壺は、松岡経塚で寿永3年（1184）および建久7年（1196）刻銘銅経筒を含む一群の遺物中に見出され<sup>82)</sup>、型式観も後述する赤川窯期に下ると考定される。したがって、紀年銘資料は両経塚群中で陶製外容器の採用に先行して築造された初現的な経塚の築造年次を示し、東北の珠洲系あるいは非珠洲系陶器の創成が12世紀前半代に遡る傍証とはならないことを確認しておきたい。

### 3. 北陸・東北の須恵器系中世窯

北陸・東北で確認された須恵器系中世窯は、新潟県1箇所1基、秋田県2箇所4群7～8基、福島県2箇所2群6基が報ぜられている。うち秋田県大畑窯と福島県飯坂窯は発掘調査が実施されているが、報告書が刊行されたのは大畑窯のみであって、他は未掘窯を含め公表されていない。以下、関係各位のご高配をえて各窯の概要を記す。

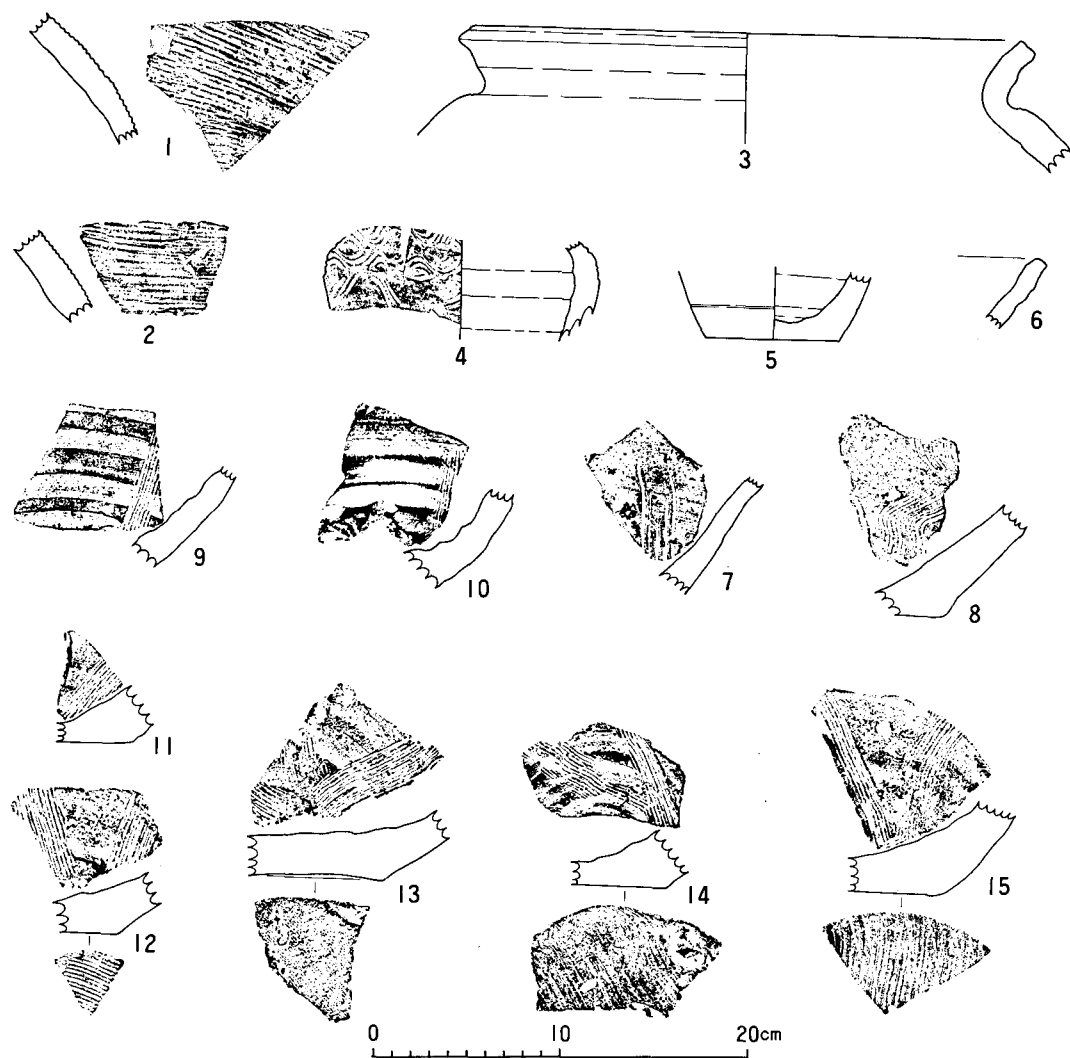
#### (1) 笹神窯跡群背<sup>せなかあぶり</sup>中灸窯

(新潟県北蒲原郡笹神村笹岡)

**窯 跡** 越後北部、阿賀野川北岸に東から西へ派出する菱ヶ岳(974・2m)山塊の山麓に所在する瓷器系の小窯跡群中に、須恵器系中世窯が1基所在する。本山塊は五頭連峰と通称されるごとく、途中に狭い地溝を挟み南北約20kmに亘り7つの丘陵が連なるが、一帯は奈良・平安時代から中世を経て近世に至る窯業生産地を形成している。中世窯は、その南端真光寺山(128.2m)麓で3単位群6基(山崎通称権兵衛沢1・2号窯、笹岡通称<sup>おおいんざわ</sup>狼沢窯・通称兎沢窯・字背中灸窯、堤通称小川山堤上窯)、および権兵衛沢窯から南8.5km遊離して1基(草<sup>くさ</sup>水<sup>みづ</sup>字赤坂山)、計7基が確認されており、今後の踏査によってかなり窯跡の検出が見込まれ、笹神、安田の2支群に分かれることも予期しておかねばならない。問題の背中灸窯は、堤上単位群と小支谷を隔てた南東約400mの丘麓で陶片が採取され、灰原の一部と推定されている。

笹神窯跡群を構成する瓷器系窯は全て14世紀代に帰属し、そのうち昭和38・47年に権兵衛沢、狼沢両窯の発掘調査が実施された。全掘された後窯は、窯本体の全長約16.5m、焼成部長11m強、最大幅約3m、床面勾配20度弱を計測する長舌状を呈し、分焰柱を具備した大規模な半地下式窖窯であった<sup>83)</sup>。

**遺 物** (第13図) 約20片の採集資料が存するにすぎないが、融着ないし灰被りの陶片が存することから窯跡が付近に所在することは間違いない。いずれも小片であるが、壺類(T種・K種・R種)と片口鉢類があり、甕ないし壺T種は、3cm当たり10目程度の細かい打圧原体を使用した胴部片である(1・2)。K種は、くの字状に外反し、外端でしっかり面を取った口径28cm弱の広口大形に復原できるもの(3)が1点知られている。R種は、波長の異なる太い櫛目波状文帯が3条めぐる肩部片(R種C類?4)と、底部片(R種B類?5)が各1点みられる。片口鉢類は、外端平縁で器肉の薄い口縁片(6)のほか、紐巻き上げ成形に伴う凹凸が鮮明に残る器内面に、



第13図 新潟県 笹岡背中窯陶器

細密・鋭利な櫛歯状器具を用い8条程度の柔軟な入り組み直線文（7・9～15）ないし波状文風（8）の卸し目を施す。底面には全て静止糸切り痕をとどめ、底部下縁に横撫で調整を加え、下胴と底面の境を円滑に仕上げた個体（15）がある。胎土は、珠洲陶器より粘りのある粒子の細かい、一見瓷器系に近い陶土を使用しており、判別が比較的容易である。

## (2) 南外窯跡群

(秋田県仙北郡南外村大畑・梨木田・大杉)  
なんがい

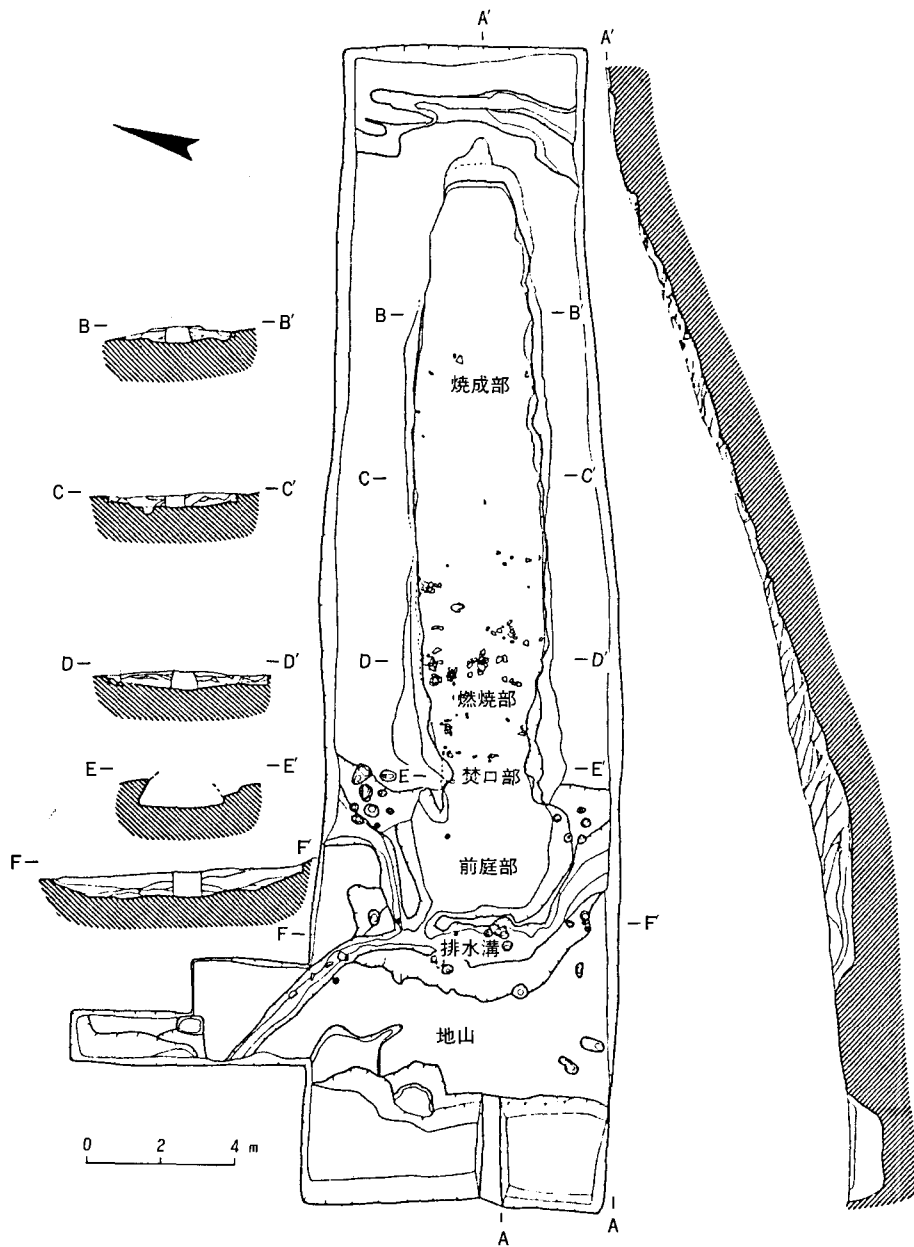
**窯 跡** (第14図) 秋田市街の南で日本海に開口する雄物川が、横手盆地北辺で玉川と合流する地点から南西約7km、雄物川に北流する小出川と櫛岡川の間隙に舌状に張り出す低丘斜面から櫛岡川東岸丘陵の小支谷にかかる径2km圏内に、単独または数基よりなる3単位群が存在する。小出川西岸には、約700mを隔てて梨木田群(数基)と大畑通称瀬戸かけ山(揺鉢山)窯(1基)が築窯され、櫛岡川東岸大杉地内通称赤平沢(瓶沢)にも陶片の散布が認められ窯跡と推定される。なお、大畑窯の反対斜面、赤平家地内にも窯跡が存在したが、開田工事で湮滅した模様である。このうち大畑窯は、明治中期の畑地開墾作業中に発見され、戦前地元の伊藤順三氏が遺物採集に努められたが、中世窯と認定されたのは、昭和45年、富樫泰時氏の現地踏査によってであり、昭和55年には村教育委員会により発掘調査が実施された<sup>84)</sup>。

大畑窯は、標高60m前後の緩斜面に築造された半地上式窖窯であって、全長14.4m、焼成部最大幅2.7m、焚口部幅1.8mを測る。床面は20度程度の傾斜をなし、焼成部で僅かに舟底状に膨らみつつ上端に至るが、煙道部は削平され消滅していた。焚口部前面には径4m、地下50cmばかりの略円形を呈し、周囲に周溝がめぐる前庭部が掘り込まれ、北西隅に排水溝がつづく。さらに、前庭部の焚口に接する両袖から各々数本の柱穴が検出され、この部分に覆屋の存在が知られた。また、本窯では窯壁の構築法が明らかにされた。それによれば、柱材を立て並べ、厚さ1cm、幅5～6cmの板材を横位に積み上げて縄で固定した骨組材の外側にスサを混入しない粘土壁を築いたことが確認でき、天井は径2～5cmほどの柴状木材をアーチ状に架構し骨組にしたかと推定されている。

**遺 物** (第15・16図) 大畑窯窯体および灰原出土遺物には、甕・壺・鉢類のほか陶錘と若干の分銅形陶製品がある。胎土は少量の小石を混入するが概して緻密で、色調は灰(黒)色と赤褐色を呈する製品がほぼ半ばする。

甕は少量で器形復原の可能な資料に恵まれないが、口縁形態は外端平縁(2～4)、稀に中凹み(1)に仕上げ、くの字状に外反させるタイプに限られる。胴部の平行条線状原体は、(a)細密なもの(5・6)、(b)粗荒なもの(7～9)のほか、(c)二条の凸線で1単位をなすやや特異なもの(10)がみられる。底部は砂底である。打圧原体a類は全般に器厚が薄く、大半は壺T種に帰属しよう。

壺はT種とR種がある。前者は口径18cm前後、推定器高35～38cm程度の中形品のほか短頸壺(17)が1点存し、後者は口径10～12cm、器高22cm程度ないしひとまわり小



第14図 秋田県 大畑窯窯体図（拠註84文献）

ぶりな肩が強く突出する長胴壺（R種B類，13～16）と，口径約6.5cmの短頸小壺（18）が若干存する。口縁形態は，(a)外端平縁（11・14），時に中凹みないし先端を嘴状に反転させたもの（13）と，(b)丸縁におさめたもの（12・15・16），に大別できる。R種B類は，内面に紐積み痕をとどめた厚手の粗造品である。

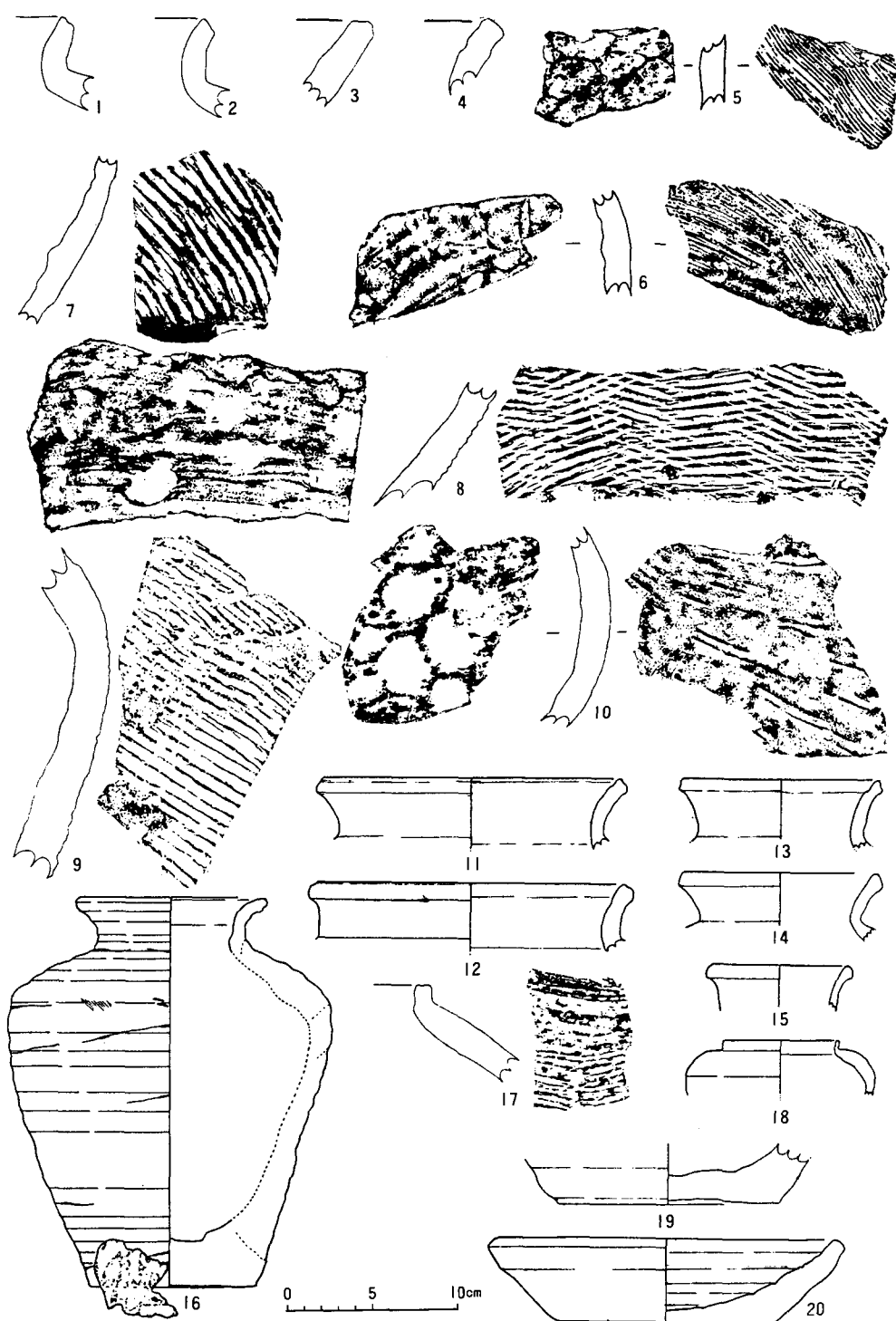
片口鉢は全個体の半数を占め，口径32～34cm前後の並製ばかりで，小形品は認められない。口縁形態は，(a)外端平縁に仕上げ，多くは先端を嘴状に反転させたもの（21～26），(b)先細りの断面長三角形仕上げのもの（27～31），(c)平縁を水平につくり出すもの（32），があり，b類が多くc類は1点のみである。内面の卸し目は，細密鋭利な櫛歯原体による8，10条を原則とし，施入法によって，(a)器面を8等分するように直線にて+→米に交叉させたもの（34・35），(b)直線ないしゆるい曲線で器面を2等分ないし4等分したのち，間隙を直・曲線で充填したもの（36・37），(c)底面あるいは口縁部方向から波線を1条ずつ施条するもの（33），に分類される。鉢類には，このほか口径20～23cm程度の粗造品を含む小形浅鉢（20）が若干ある。壺・鉢類の外底面には殆んど例外なく回転糸切り痕をとどめる。

### (3) 駒形茂谷沢窯

（秋田県山本郡二ツ井町駒形通称茂谷沢）

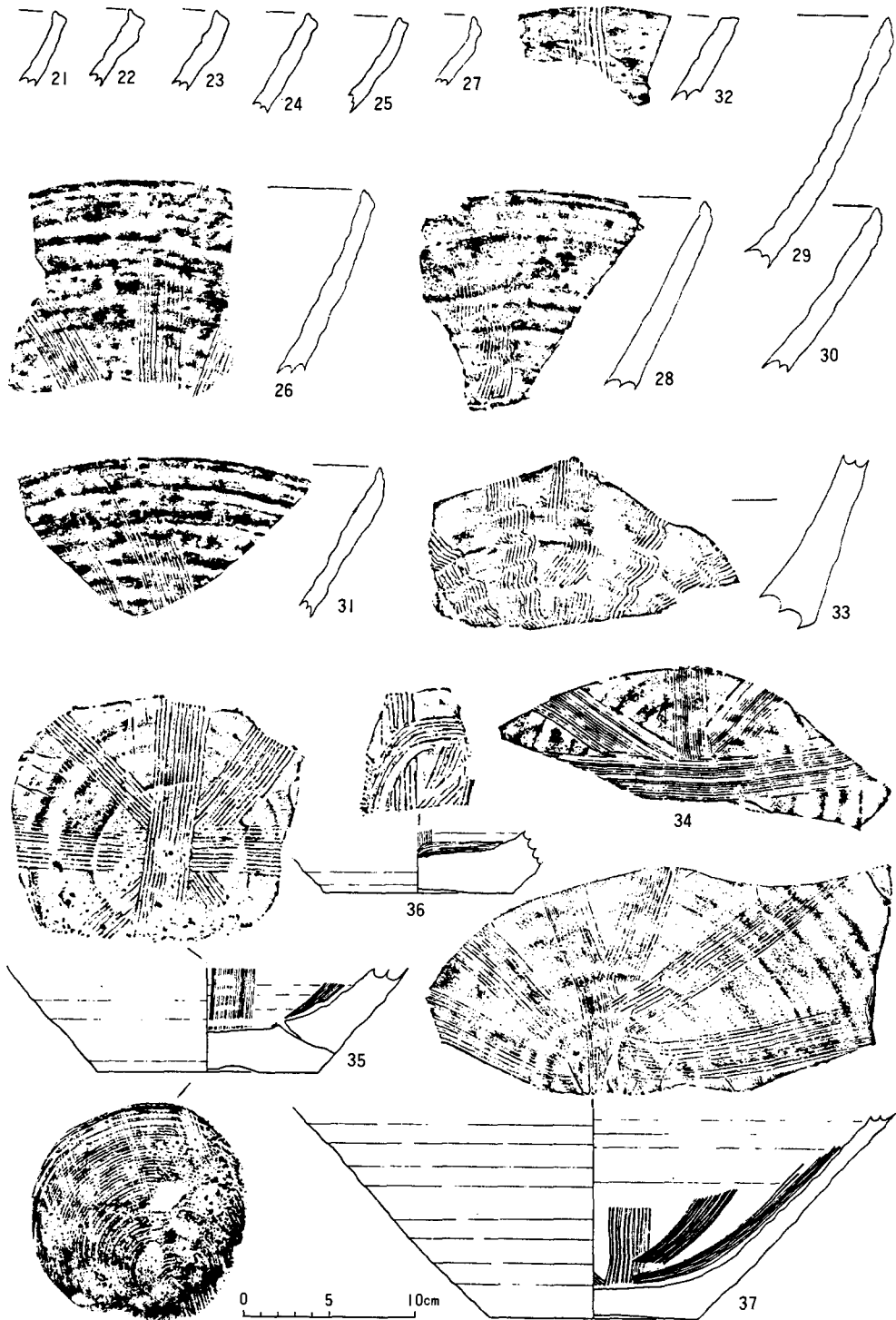
**窯 跡** 秋田県北部，能代平野を貫流する能代川を24kmばかり遡上した国道7号線沿いの駒形村落から南の丘陵地へ10kmばかり入った箇所に茂谷山（標高248m）がある。窯跡は，茂谷山北東方に谷を挟んで派生する丘陵中腹通称エヒバチ長根の一角に占地しており，狹隘な緩斜面に灰原の一部が露呈している。窯跡は昭和46年，能代考古学会が発見，予備調査が行われたが，かなり急峻な稜線鞍部を境に2基の窯跡が存在する可能性がある<sup>85)</sup>。なお，次に紹介する遺物と同一形態の甕・壺・四耳壺片が，大畑窯の北東約26kmを隔てた仙北郡太田町太田地内東方の丘陵地より採集されており，横手盆地北半部にも須恵器系中世窯が実在する可能性がある。

**遺 物**（第17図） 町教育委員会・秋田県立博物館・若松鉄四郎氏保管資料および筆者等の採集遺物が50片ほどあるが，大半は甕・壺の胴部片である。全体に良く焼き締まり青灰ないし灰色を呈し，胎土は比較的細かく，雑挟物は少ない。甕・壺（T種・R種A類）・片口鉢の基本三種が確認できる。甕類は，口縁部が弧状に強く反転し（2），外端縁辺に丸みをもたせて面をこしらえ，内面に口頸部を外反させる作業工程で生じた押引状凹溝をとどめ，胴部片（3～6）の叩打には3cm当たり12目程度の繊細・鋭利な原体が使用され，内面に縦列蛇行式の押圧痕が認められる陶片（3）

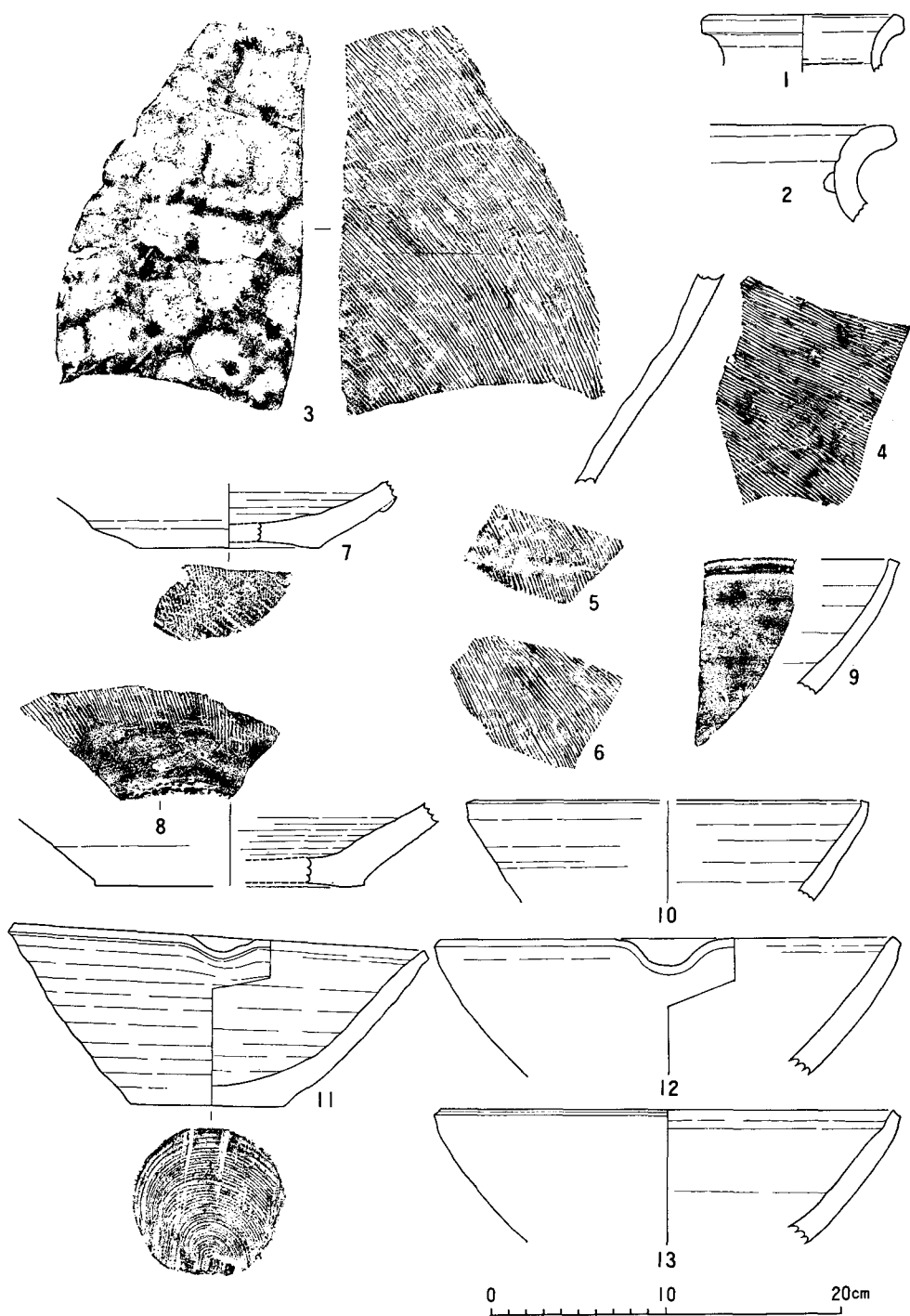


第15図 秋田県 大畑窯陶器（拠註84文献より作成）

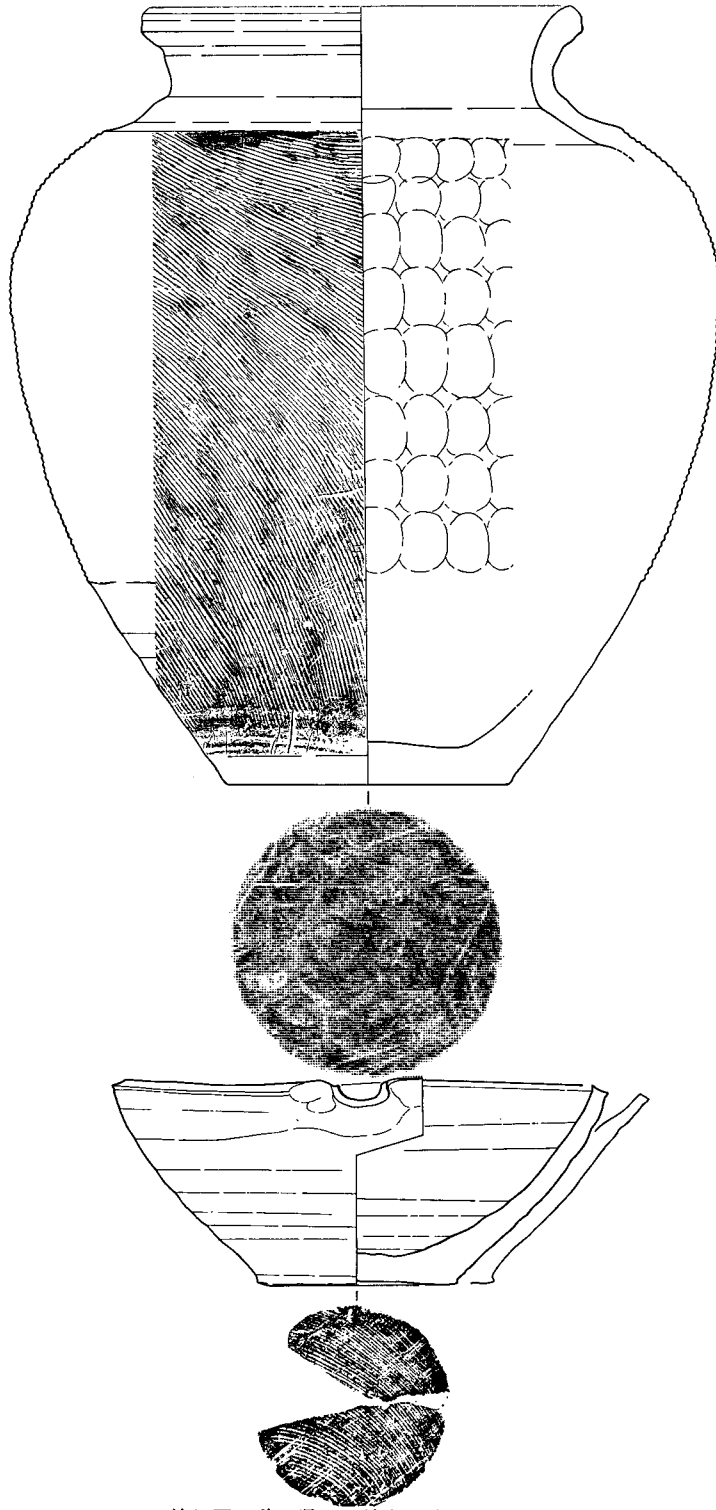




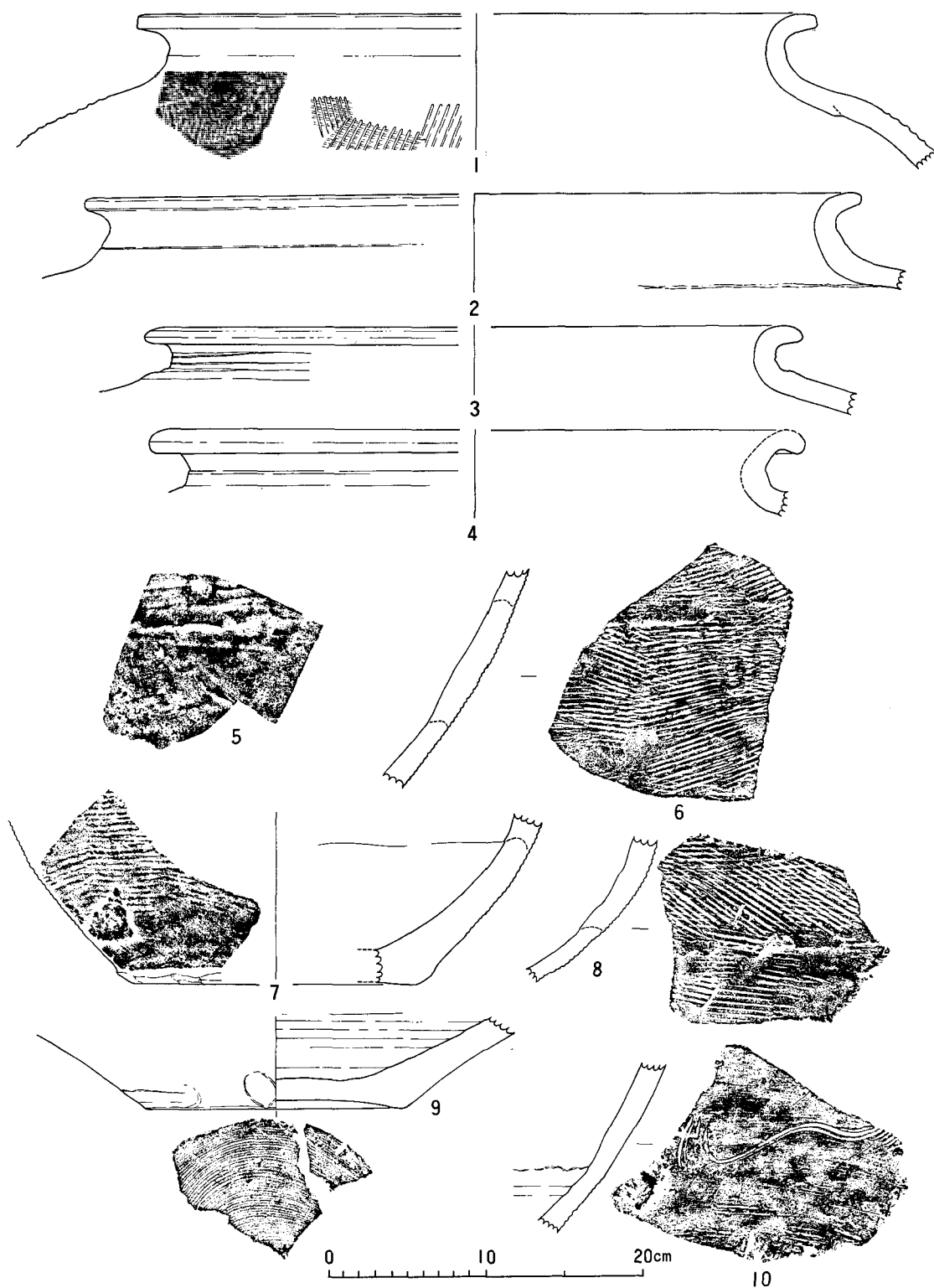
第16図 秋田県 大畑窯陶器（拠註84文献より作成）



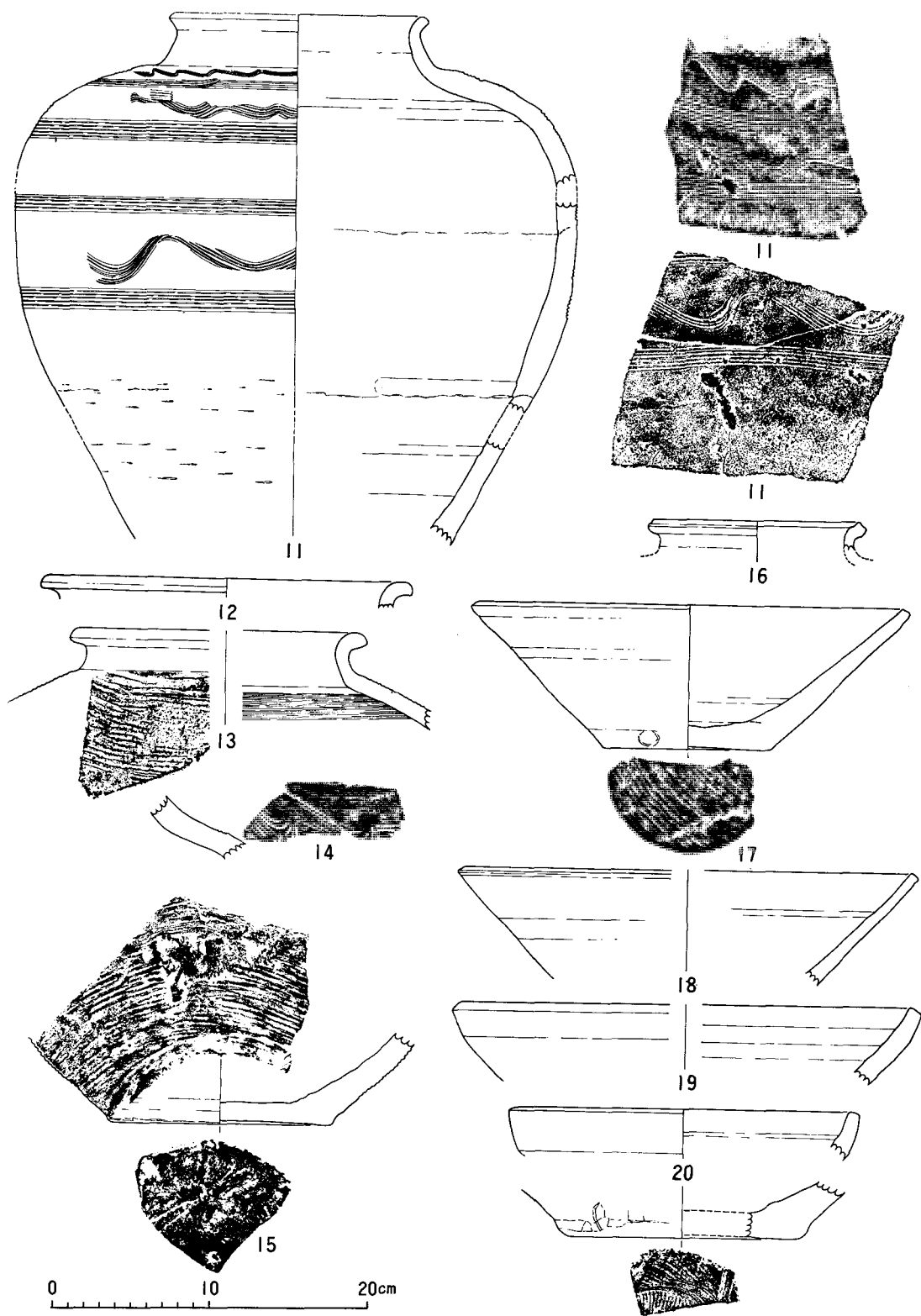
第17図 秋田県 駒形茂谷窯陶器(1~10)  
福島県 昆沙門平窯陶器(11~13)



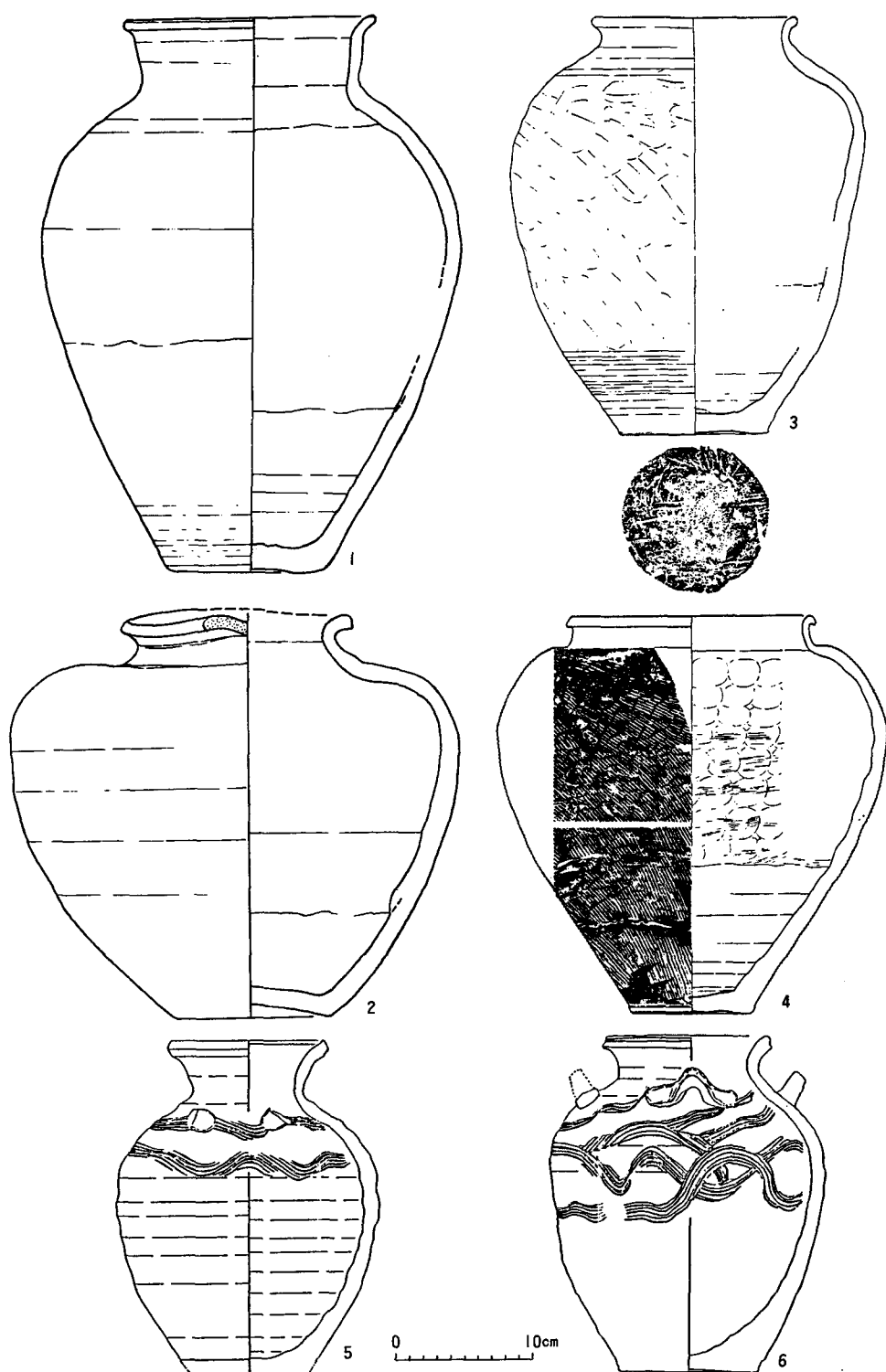
第18図 秋田県 五輪台遺跡陶器 (1/4)



第19図 福島県 赤川窯陶器



第20図 福島県 赤川窯陶器



第21図 東北の須恵・瓷器折衷系，珠洲系陶器

(1, 2 福島県天王寺経塚, 3 秋田県上溝観音寺経塚, 4 同松岡経塚, 5 同二ツ井町内, 6 同長森遺跡, 5, 6 は拠秋田県埋文センター『紀要』1)

もある。壺類には、口径11cm（1）と20cm前後の2法量があり、ともに口縁端部を肥厚させて稜角的に仕上げ、頸部中程に指撫でによる微隆起が残る。四耳壺（壺R種AⅡ類）の把手も採集された。片口鉢類（9・10）は、口径25～26cmの中形品が普通のように、半球形に立ち上がる器体の先端を直立に引き出し外端でしっかり面を取った薄手の精製品である。

#### （4）飯坂窯跡群

（福島県福島市飯坂町湯野通称毘沙門平、味川田古川岩通称赤川）

**窯跡** 福島盆地北辺の丘陵地に営まれた須恵器系中世窯であって、湯野および味川田古川岩地内で各1単位群が確認されている。湯野群は福島市の北郊約1.7km、盆地全域を眺視しうる丘頂に近い標高約310mを測る緩斜面に4基の窯跡が併列していたといわれ、うち2基が昭和44年、福島市教育委員会によって発掘調査された<sup>86)</sup>。現在付近一帯はリンゴ畑となり、陶片の採集も容易でない。古川岩群は湯野群の南西約2.5kmの赤川に面して派出する標高200m程度の丘端に近い南斜面で2基が確認され、1基は昭和38年、福島市教育委員会によって緊急発掘調査された。窯跡は焚口部から焼成部下半が地均し工事により損壊されていたが、平面長舌状を呈し、現存長約6m、最大幅約2.8m、焼成部床面勾配約30度を計測するおそらく半地下式の窖窯である。

**遺物**（第17・19・20図） 湯野毘沙門平1・2号窯の遺物量はコンテナパット数十箱にのぼるが、整理未了のため筆者が標本的に抽出、計測させていただいた資料の一部を紹介する。器種は甕・壺・片口鉢が確認できる。焼成は全般に良好で灰青色ないし灰色を呈し、胎土に石英などかなり大粒の礫粒を挟在するものが少なくない。甕は口径60cm程度の大形と、35～40cm程度の中形があり、頸基部からやや下がって3cm当たり10目程度の細かい平行条線状叩き目を施すものが大部分を占め、粗荒な叩き目は稀のようである。横位→縦位に叩打し格子目状とした陶片も見出せる。内面は、縦位の指頭状撫で調整を行う。口縁形態は、長く弧状に反転する端部を平直におさめるもののほか、先端が垂下・屈折し丸く撫でて仕上げるタイプが特徴的である。肩はなだらかな膨らみをもって張り出し、小ぶりの上げ底粗面の底部へつづく。壺類は、口径約30cmを測る丸口作りの大壺のほか、口径20cm前後の叩打中壺と推定される個体が見られる。また、口径10cm前後のR種B類当該器種と考えられる口縁片が見出され、口径6cmの完形の小瓶も1点存する。片口鉢類は、口径24cm、器高10cmを計測し、口縁外端で直角に鋭く面を取る中鉢の完形品（第17図11）と、口径27cmほどでひとまわ

り大きい製品（12・13）がある。器肉は概して厚めで器体は膨らみをもち、口縁外端でしっかり面を取る。壺・鉢類の外底面には、回転糸切り痕をとどめる。

次に赤川窯の遺物は、窯体内に約200片（口縁部19, 胴部約180, 底部6）が遺存しており、甕・壺・片口鉢がある。全体に焼成並製、胎土は毘沙門平窯と異なり鉄分が多く砂気がかち、器肌は赤褐色ないし茶褐色に発色したものが全体の約4分の3を占め、灰色・暗灰色を呈する陶片は少ない。甕と叩打壺あるいは紐輪積成形とみられる大壺の口縁部が10点存し、明確な区分は困難であるが、甕（1～4）は復原径40～50cm程度とみられ、端部を平直ないし円頭状にこしらえ、内傾しつつ強く反転する口頸部から球胴に張り出す胴部が、鉢形作り粗面の底部へ収縮するタイプが普通のものである。2～4は、飯坂町天王寺経塚出土の狭口怒り肩の中壺に近似したタイプになる。口頸基部から一段下がった位置から、3cm当たり8～9目のやや粗い平行条線状原体を用い、右斜一方向、あるいは右斜位→左斜位に交叉させて叩打し、内面は指頭状具により横撫で調整を施しているが、最終工程で布目圧痕をとどめた個体（5）がある。中壺は、器形・法量によって少なくとも2種あり、口径18～21cm程度の12・13・15と、口径約15cm、推高35cmばかりに復原でき、内傾する口縁上端を短く外屈させた倒卵形長胴の紐輪積成形成品11・14がありいずれも口胴指数が小さい。後者は体部を中太の櫛目直線文帯と波長の長い波状文帯で交互に画し、下胴に削り調整を施した装飾壺である。ただし、当類には、壺以外の器形も考えられる10のように、叩き目を横撫でによって消去し、振幅の大きい流麗な波状文帯をめぐらしたものもある。また、壺R種は、口径12.5cmを測り、内端面受口状にこしらえた小片（16）などが3点ある。いずれも紐輪積成形成品としてよく、さきの紐輪積成形の中壺と異質の製作技術が壺類に併存する。片口鉢の口縁部は5点あり、口径25.5cm、器高8.7cmに復原でき、体部が直線的に開く薄手の17が1点存し、ほかに器肉の厚薄、作工の精粗はあるものの、口縁部はいずれも外端で直角に面を取り、体部はやや膨らみをもち上端でかく屈折させるタイプ19がみられ、後タイプの小鉢（20）が1点見出せる。

以上、北陸東部・東北における創成期の中世諸窯を概観してきた。次に、消費資料も検討素材に加えることによって、珠洲と珠洲系ないし非珠洲系陶器の識別を試み、北東日本海域における中世窯業成立の実像に接近してみたい。

まず越後では、珠洲窯Ⅱ期の特徴をそなえた背中灸窯が知られているので、先行するⅠ期の窯跡の存在が予測されるが、消費資料の集成的研究が他県より遅滞している



こともあって、経外容器類を主体とするⅠ・Ⅱ期の完好品について観察した範囲では、珠洲陶器と特に異なる特徴を具備した製品を抽出できない。背中灸窯には、珠洲市法住寺2号窯に酷似した壺K種口縁片（第13図3）があるが、胎土は珠洲陶器と異なるためある程度判別可能である。また、片口鉢の卸し目施入技法も珠洲窯Ⅱ期のそれを忠実に表現しているが、施入器具、手法、素地のいずれに基因するのか明らかでないものの、施条のタッチがやや柔軟な点に微妙な差異が看取され、体部と底部の境を入念に撫で付ける傾向も特色がある。なお、北接する羽前・羽後南辺（山形県）では窯跡こそ未確認であるが、多面体状口縁、怒り肩扁球胴の壺T種を標識とする珠洲系陶器の生産地が、山形盆地と庄内平野および会津盆地で見込まれる。

次に羽後中樞部（秋田県）では、駒形茂谷沢窯ないし太田窯推定地（Ⅰ期）から南外窯（Ⅱ期）への展開を想定できる。駒形窯は内容が不分明であるが、創業期の珠洲陶器を特色づける器種・器形および加飾法の多様性は認められないようである。大畑窯が片口鉢を主産品とし甕類の生産量が少ないのも、器種の量比差を示すものであろう。また、口縁形態、叩打原体が共通する五輪台遺跡<sup>87)</sup>出土の壺T種AⅠ<sub>2</sub>類（第18図）を駒形窯の標準的な形姿としてよければ、寺社窯および石川・富山県下で典型的な球胴タイプの壺T種が見出されないことを考慮するとしても、型式上Ⅰ期でも後出的所産である。さらに、両窯の甕・壺T種についてみると、珠洲窯で主流を占める嘴頭状口縁は存せず、ほぼ外端平縁のくの字状口縁に限られるようで、口縁形態のみでは甕と壺T種の区分が難しい。管見では、打圧原体も駒形窯では細密な平行条線状ばかりで、逆に大畑窯の粗大なc類は珠洲窯ではみられない。このように、駒形窯から大畑窯への推移が珠洲窯の強い影響下におかれながら、越後より一段と在地色をおびる現象は壺R種でも認められ、東北の珠洲系に顕在する口縁端部を稜角的に仕上げたAⅡ類（櫛目文四耳壺）が窯跡（第17図1）と消費地から出土しており、珠洲窯ではみられない重心の低い球胴タイプ（第21図5・6）も独自の形姿といえよう。円頭状口縁で、肉厚の内壁に紐積み痕を残す粗造のR種B類の一群が大畑窯に見出されるのは、製品の過半が赤褐色を呈することとともに、この段階で太平洋域の須恵器・瓷器折衷系窯の影響を受けるようになったことを示すごとくである。甕壺に比べると大畑窯の片口鉢は全般に珠洲窯Ⅱ期に近似しているが、固有の口縁形態b類が顕在し、変化に富んだ曲線文あるいは刻印による加飾が皆無な上に、壺T種もあわせ底面回転糸切り技法を墨守している点で珠洲窯Ⅱ期と明確に区別される。

これら日本海域の珠洲系諸窯に対し、磐城（福島県）の飯坂窯を構成する毘沙門平窯と赤川窯は、いずれも半地下式窖窯構造による須恵器系中世窯であっても、珠洲系

陶器の範疇に包括しえない太平洋域独特の器種・器形および生産技術を保持している。毘沙門平窯と赤川窯の関係は、灰（黒）色から大半が赤褐色の器肌へ変化しているほか、甕壺類は円頭状口縁が主体をなす点で共通しながら、前窯の口頸部が長く先端も幅広く挽き出し屈折していること、片口鉢が前窯の膨らみを有する厚手半球形、回転糸切り底から、後窯の体部が直線化し低平に開く、静止糸切り底へ移行していることから、一定の時間差をもって継起した単位群と考えられる。赤川窯の甕壺類のうち、口径値未詳で、コの字状に立ち上がる口頸部の先端を短く屈折した怒り肩扁球胴のタイプ（第19図2～4）は、至近地に营造された天王寺経塚から出土<sup>68)</sup>しており、赤褐色に発色した承安元年（1171）刻銘経筒の胎質も赤川窯産としてよい。したがって、赤川窯の存続年次は12世紀第4四半期と考えてよく、先行する毘沙門平窯に第3四半期を中心とする年代観を与えて大過あるまい。

ここで改めて飯坂窯の製品についてみると、毘沙門平窯の中甕、天王寺経塚の怒り肩扁球胴壺および長胴壺（第21図1・2）は、紐輪積成形後、細かい刷毛目状調整を施す固有の技法が認められるが、それぞれ、常滑・渥美窯の広口大壺・中甕と長胴中壺（第9図2・14）の模作とみられる。もっとも、創業期の珠洲陶器に東海の瓷器系の影響を重視する私見からすれば、飯坂窯と珠洲窯との技術的な相互検証は困難となるが、毘沙門平窯の基本器種と生産技術にみる共通性、例えば毘沙門平窯の大甕の舌端状口縁先端を屈折・垂下させる手法などは、山形盆地を介する珠洲（系）陶器との接触を示唆するごとくであり、そのことは片口鉢の形姿に端的に示されているといえよう。しかし反面、珠洲陶器の壺Ⅰ種に対応する狭口長胴中壺についてみると、赤川窯では検出されていないが、上溝観音寺（第21図3）・松岡両経塚出土の素文打庄原体を使用した同一型式の中壺は、地理的にみても飯坂窯からの搬入品とすることはできないので、横手盆地南部に赤川窯に近似した性格の中世窯の存在を想定するのが現実的である。松岡経塚出土品中に、頸部が内傾した円頭状口縁の珠洲系壺Ⅰ種が見出され（第21図4）、大畑窯の製品の過半が赤褐色の器肌に焼成されていることも、赤川窯を転期として13世紀代のうちに分焰柱を具備した大窖窯を導入し、本格的な東北固有の瓷器系へ転換を遂げていった<sup>69)</sup>、太平洋域の中世窯の影響とみることができるであろう。このように、東北太平洋域と日本海域の初期中世窯相互に一定の技術的交流を認めるとしても、それが一列の生産技術による展開の結果なのか、あるいは日本海域と太平洋域がともに須恵器系生産技術に足場をおきながら、それぞれ独自に中世窯を創成したのかは、今後の課題とせざるをえない。毘沙門平窯が珠洲（系）窯と基本的には無縁に開窯したとすれば、当然その生産母胎となった須恵器生産（工人）

が12世紀前半代まで存続していたこととなり、筆者もかつて東北で一般的な多面体状に面を取った甕・壺瓶類の口縁形態と一部の中世陶器の近似に着目したことがあるが<sup>90)</sup>、編年研究が供膳器を主体にすすめられている現況もあって、依然、10世紀末に下る須恵器窯は未確認で、数少ない消費遺跡でも甕類の出土は報ぜられておらず、かえって、須恵器窯跡群から隔離した地域に中世窯が出現する傾向が認められる。ただ、問題を日本海域に限定するならば、一連の珠洲系諸窯は、珠洲窯からの間接的な技術伝播とするには緊密な技術体系を共有しており、一時的出職による教習の可能性を含め、珠洲窯工人の直接的移動、開窯と推定したい。

#### 4. 中世窯成立の史的背景

上記繰述してきたところによって、珠洲陶器の特質が、(1)紐轆轡・紐叩打分割合成技法に具象される轆轡の多用、(2)堅牢精質な還元焰燵焼成による平底製品、(3)独自の櫛目文をはじめとする多彩な加飾法の発達、(4)基本三種とともに多様な宗教器を併焼する器種別未分化な生産形態、(5)上記の独自性が、在地の須恵器生産技術を母胎に、東海の瓷器系、瀬戸内の須恵器系、一部中国陶磁・金属器・漆器の影響下に案出された、と約言できよう<sup>91)</sup>。そして、北東日本海域で上記生産技術を共有する珠洲系諸窯の分業圏が連鎖的に成立したが、それは珠洲窯からの一元的直接的な技術伝播を媒体としたと推察した。そのことは、確認された初現的な珠洲系窯がⅠ期でもやや後出的様相を示すこと、珠洲窯より器種が比較的単純で、加飾法も限られているらしいこと、特に、Ⅱ期の越後・背中灸窯、羽後・大畑窯とも、当期以降、珠洲製品の流通量の増大に対応して片口鉢を主産品とするゆるやかな窯跡群相互間の器種別分業関係を形成した可能性があること、さらに、大畑窯の壺R種B類の一群にみられる粗造化、東北太平洋域の瓷器系の影響を思わせる技術的主体性の喪失傾向が、Ⅲ期以降、ほぼ珠洲製品の一元的流通圏への転換に連なるとみられることを述べた。

さて、珠洲窯跡群の所在する能登半島先端地域は、縁辺に国領方(片)上保、高屋浦、蔵見村、珠洲正院、真脇村が存在したが、郡の大半は寛治年間(1087~94)に能登守を勤めた源俊兼が私領化し、康治2年(1143)、子季兼より皇嘉門院藤聖子(崇徳中宮)に寄進して、公田五百町歩と公称される若山庄の成立をみた<sup>92)</sup>。本庄は、その後九条家(本所)に伝領され、日野家(領家)が預所職を領掌して庄務権を握り、室町時代まで推移した。それゆえ、珠洲窯の創成が12世紀中葉を遡らないとする私見で大過なければ、当地域における庄園公領体制<sup>93)</sup>の確立と一定のかかわりをもつこと

が予測されよう。そのことを端的に裏づけるのは窯跡の分布である（第1図）。現在までに確認された窯跡は、内浦に3群〔(1)珠洲市三崎町寺家・大屋、2基、(2)同上戸町寺社、宝立町春日野・柏原、14基、(3)珠洲郡内浦町行延・加ヶ谷、2基〕、外浦に1群〔(4)珠洲市馬繰<sup>まつなぎ</sup>、1基〕の4支群計19基にとどまり、南北約18km、東西約10km圏内に分散する。その分布は、一部方上保（三崎支群）を取り込むとはいえ若山庄域に限られること、しかも、建久8年（1197）以降、領家日野家の祈禱所に指定され、庄惣鎮守と推定される法住寺白山神社が所在する宝立支群のみが、複数の単位群より構成され中世を通して継起的に移動する<sup>94)</sup>意味は重要である。

かかる観点からまず問題となるのは、珠洲陶器の生産が若山庄の収取機構ないし地域の商品流通経済でどう位置づけられるかであるが、京都における近年の各種中世遺跡の莫大な発掘資料で珠洲（系）陶器は、左京三条四坊四町所在の高倉宮跡（後白河院皇子以仁王居宅）の井戸から十字装飾叩打文中壺が出土している<sup>95)</sup>にすぎないことから、庄領主への公事物として備進・京上された形跡は窺えない。このことは、中世京都の貯蔵・調理器が瀬戸内の諸窯と常滑製品および中国陶磁の寄せ集めの需給関係で維持されており<sup>96)</sup>、特に遠隔地からの移入を必要としないという一般的状況からも支持されよう。もっとも、現実には陶山用益権の実質的な管掌者である庄官級在地領主や領家祈禱所への生産物の一部が備進されたことは充分予測されるし、いわゆる東海型庄園で典型的にみられた（後述）、交易による調達を前提とする特定の公事物あるいは年貢の代物として生産されたことも否定できない<sup>97)</sup>。後者のケースは、間接的ながら庄経済の維持に一定の役割を果たしたこととなるが、その場合も、庄官が生産物の全てを一元的に徴収・交易し指定貢納物を進納しえたのは開窯当初の段階にとどまり、窯業生産の拡大に伴い経営主体が多元化する過程では、当然経営主体の手元に収益の一定分が留保されたはずであるから、基本的に庄園収取体系の枠外におかれていたと考えてよからう。

反面、珠洲製品が、当初より基本三種を主体とする量産の側面と多様な加飾性に富む宗教・奢侈器の特注に応ずる生産体制を兼備し、加賀北部から越後南部あたりまでを包括する広域流通圏を形成した点に着目すれば、珠洲陶器は民間必需の非需給品としての側面が濃厚な、地域間広域流通物資＝商品的生産物であったことを物語る。したがって、製品の運搬も年貢・公事物の京移送の帰り荷<sup>98)</sup>といった、庄園公領制的運輸形態の寄生的産物としてのみ流通したのでなく、隣接する越前、加賀および東北の珠洲系諸窯と競合しつつ、意図的に北東日本海域に商圈を開拓していったと考えるべきである。そのことは、珠洲窯の築窯が古代能登の中核的な須恵器生産地から隔離

し、かつ低丘陵＝生産地から海浜＝搬出地までせいぜい2、3 kmにおさまる半島先端部を選定していることでも明らかであろう。須恵器成形技術の著しい便化と大形貯蔵器の量産によって特色づけられる中世陶器の遠隔地流通が、重量品の廉価＝大量輸送手段として海運と不可避免的に結びつかざるをえなかったとすれば、珠洲窯の占地が、列島中央の太平洋域に突出した知多、渥美の広域型窯業生産地の発展に触発されたことは間違いなく、窯跡が河口港をひかえた中小河川流域に築窯されていることからしても、開窯当初より舟運の利便をもって西は加賀から、東は富山湾沿岸域より越後南部一帯の農山漁村が市場として意識されていたと考えねばならない。

ここで、珠洲窯の創成事情に接近するため初現的な寺社カメワリ坂窯に目を転ずると、Ⅱ期以降中核的支群を形成する宝立地区（直郷）から北東3 kmばかり隔離し、しかも内浦海岸より約2.5 km内陸へ入った標高約180 mの高所に孤立的に築窯され、Ⅰ期のうちに閉窯している。当地は若山庄政所がおかれたと推定される若山郷に近く、『天文年中旧書写』<sup>99)</sup>には上戸領主として「本庄殿」を載せることから、おそらく庄成立期より田所として貢納物徴収の実務に携わった本庄氏<sup>100)</sup>の所領であった可能性をもつことが注意される。開窯に当たり、情報の収集・選択と新たな製作・加飾技法を案出し、独自の製陶技術として定型化するまでの試行期間の存在、須恵器窯の数倍の容積を有する大形窖窯維持のための莫大な燃料資源＝焼山の確保、さらに国域をはるかに越えた市場獲得のための流通機構への関与を考慮すれば、本庄氏ないし上級の庄官（預所）級在地領主<sup>101)</sup>の主導下に、積極的な庄経済振興策の一環として、陶器工長らが招寄され周辺村落から採木・採土・築窯・窯詰（出）等に要する補助的な労働力を徴発する形で、操業が開始されたことが想定されるのである。

ところで、檜崎彰一氏は東海（猿投・常滑・渥美）を中核とする瓷器系生産技術の伝播が院政権を媒体としていることを示唆し<sup>102)</sup>、保立道久氏も、『新猿楽記』に列举される「諸国土産」のうち越後特産の鮭の貢納が、国衙による国内河川の鮭梁の直接的掌握と、その輸送に近江大津の納所が介在していたことを指摘し、女院領として成立した備前・珠洲両窯もかかる権力的な特産物の分業体制の一環として、工人は国衙所属の「所」に編成されていたと推察される<sup>103)</sup>。たしかに、第1項でふれた11～12世紀前半代の須恵器生産が、国衙の「所」<sup>104)</sup>に足場をおく「陶器寄人」によって維持され、珠洲工人が国衙を介して招寄・再編された可能性は否定できず、さきの複合的技術体系の創出条件からしても、そのことは看過できない。しかし、中世陶器の主体は在京顕貴の奢侈的な嗜好とは無縁の耐久性に富む厨房用貯蔵・調理器であり、恒常的に専業的工人を直接把握する必要性は認められず、特に珠洲や常滑製品は「諸国土

産」とは性格を異にする。若山庄へ招寄された陶器工長らが、当初一般にいわれる工匠給免田支給のような形で生活を保障されたのかは詳らかでないが、開窯時には庄政所の直営の生産形態をとり、生産物は庄官が徴収・交易した可能性は否定できない。しかし、遅くともⅡ期には三崎（三崎郷）・内浦（木郎郷）両地区でも操業を開始し、珠洲窯が安定的成長の段階を迎え、法住寺白山神社を核とする宝立支群が鵜飼川流域の低丘端に4単位群を派出して膨張を遂げ、海上輸送に接続するための立地選定が窺われるとともに、若山庄全域の支群が一斉に稼動する。かかる広域分散型の生産形態を陶山を求めて移動した単一の工人集団の軌跡とするには、一部公領に亘ることや郷を生産の基礎とし、かつ各支群がある程度完結性を保持することから肯首し難い。各支群を個別に完結した経営体とみるか、それとも中核的な宝立支群に集住する工人が各経営体の要請に応じて断続的季節的に巡回・出職したと解すべきかは、群構成と窯跡出土品相互の把握が不十分な現況では確定できないものの、次第に村落の農閑副業として定着していったと考えられるのである。窯跡が集散的に分布する半島の内浦地帯が、承久3年（1221）『能登田数注文』で「若山庄，五百町」と公称されたことに端的に示される中世的水田開発の先進地であり<sup>105)</sup>，Ⅰ期からⅡ期にかけて製品が規格的量産示向と一体的な厚手粗造品に転じ、一部の特注品を除く基本三種は、農漁民が一定の教習期間を体験すれば充分習得しうる技術水準のものであったことは、右の推定を支持しよう。中世後期の生産経営形態の考察は別稿に譲るが、刀禰（番頭）級有力名主の多角的経営の一翼を構成する段階から、惣的村落結合を紐帯とする生産単位に再編されるのは、越前窯では15世紀後半～16世紀代のことであった。

以上、珠洲窯の成立事情について大胆な憶測をめぐらしてきたが、私見の普遍化を図る意味で、以下、渥美窯について検証を試みよう。

渥美窯跡群は、戦後、小野田勝一氏等により調査が推進され、窯跡数500基以上、発掘調査の対象とされたもの約40基に上るが、群構成の分析は行われていない。一方、渥美半島における庄園公領体制の成立については、「参河国。卅戸。本神戸廿戸。<sup>号渥美</sup>神戸。」<sup>106)</sup>の中世的再編、「<sup>二宮</sup>本神戸。<sup>号作二十八</sup>」<sup>107)</sup>と厨菌群の創営を介する伊勢神宮との関係を中心に研究がすすめられてきた<sup>108)</sup>が、所領形成の経緯および収取関係史料が乏しく、考察の対象とする渥美半島西部で12世紀以前に成立が確認できるのは伊良胡御厨のみ<sup>109)</sup>で、14世紀前半代に下る『神鳳鈔』にみえる厨菌群のうち12箇所は現地比定が一応可能<sup>110)</sup>なものの、実態は不分明である。ただ、加治御菌のように在銘経筒によって12世紀第3四半期の実在を知りうる事例（後述）が存することからすると、12世紀代のうちに相当数が創営されていた可能性を否定できない。棚橋光男

氏によれば、神宮厨菌の中世的体制確立の画期は1180年代に求められ、その成立に当たっては、領家・領所職を領掌する給主＝禰宜層が在地の（惣）検校ないし下司の主導下に住民を神人に編成、灌漑施設の整備を梃子として農耕地を獲得する新立（再）開発型（遠江・鎌田御厨他）と、封戸物の便補弁済型（遠江・都田、蒲御厨他）の存在が指摘されている<sup>111)</sup>。田原町では、汐川下流域（神戸地区）と今池川上流域（野田地区）に条里地割が認められるが、半島西部は全体に非農業的生産への依存度が高く、上記2類型のほかに別類型が想定できるのか確定し難いが、南出真助氏は、本神戸の拠所と目され神明社と「市場」が存する田原町神戸に神戸司がおかれ、それを基地とする自墾地系の御菌が多いと考えておられる。その場合、『神鳳鈔』に周辺御菌の貢納物の記載を欠くことから、御菌が独自の経営体をなさず、収取機能は渥美神戸司に統括されていたと推定される<sup>112)</sup>。次に、渥美窯跡群の分布調査の成果<sup>113)</sup>に依拠し、Ⅰ期（12世紀前・中葉）、Ⅱ期（12世紀後半～13世紀初葉）、Ⅲ期（13世紀前半～中葉）の編年軸<sup>114)</sup>に沿って、渥美郡田原・赤羽根・渥美三町における窯跡群の動態と、『神鳳鈔』に載せる厨菌の配置関係を通観しよう（第22図）。

まず、汐川下流域は本神戸の拠点であり、周域に厨菌（主として御菌）が集中的に設営されたが、大洲岬を包括する吉胡御厨域では荒古（単位群名、以下同じ、Ⅰ）→尾崎（Ⅱ）と小群のまま推移する。蔵王山南麓の田原御厨菌域<sup>115)</sup>は大沢下<sup>116)</sup>（Ⅰ）を核とし臨海地の柳沢・五軒町・殿町（Ⅱ主）と西方の藤七原（Ⅰ・Ⅱ）・石取下・桜町・十七谷（Ⅱ主）の2地区へ展開するようであるが、Ⅲ期の窯跡は確認されていない。衣笠下（Ⅰ）は、<sup>せいや</sup>勢谷御菌域かと思われるが未詳。清谷川南岸丘陵の加治御菌域は笹尾（約20基、Ⅰ）と坪沢（約50基、Ⅰ～Ⅲ）の両中核群<sup>117)</sup>を擁し、Ⅰ期では半島屈指の生産規模を有するが、Ⅱ期には、それぞれ奥恩中と新美<sup>にいのみ</sup> A・Bとして継起するとともに、七ツ釜・茶畑（Ⅱ主）→加治踏分（Ⅲ）へ拡散・終熄する模様である。当該地は、周知のごとく伊勢・<sup>あさまたま</sup>朝熊山経塚群出土陶製経筒に「加治（鍛冶）御菌」（後述）とみえる故地であるが、経筒類の出土は報ぜられていない。加治御菌との境界は定かでないが、南接する丘陵地は新家御厨菌域に比定され、大師田（Ⅰ）と新道 A（Ⅰ）および周辺の新道 B・C、極楽<sup>118)</sup>・黒河（Ⅱ主）グループが小群を形成している。一方、南東の蜷川に臨む浸蝕台地の一角を占める院内、浜田両御菌域では、それぞれ院内<sup>119)</sup>・神ノ釜（Ⅰ）→花水（Ⅱ）→数原（Ⅲ）と富山 A・B（Ⅰ）→C（Ⅱ主）→<sup>どうどう</sup>百々（Ⅱ・Ⅲ）の展開が迎え、数基程度の小群のままで完結する典型的な支群構成を示すが、天白（Ⅲ）への転移は根田御厨菌域に跨がる院内工人の軌跡になるかもしれない。汐川中流域南岸には33単位群以上が密集し、4～5の支群（生産集

団?)の競立が予測される。西辺は大草御菌域おおくさごきんに同定されるが、全群が単一の支配領域に包括されるか不明で、Ⅲ期に下る窯跡は未確認のようである。

次に、汐川以西、赤羽根町一帯では、今池川上流域の田原湿原が半島西部で最大の水田地を形成し、律令国家による開発とされる。郡内唯一の式内社阿志神社が鎮座する芦ヶ池西辺に築窯された大アヲコ窯<sup>120)</sup>(8基以上,Ⅰ)にて三河国守藤原顕長刻銘壺が出土していることから、中世にも公領として存続したと考えられている。大アヲコ・籠池(Ⅰ)→平岩<sup>121)</sup>・浜宝珠・郷津(Ⅱ主)→八王子(Ⅲ)の30数基よりなるグループのほか、谷を隔てた南西麓のへんび(Ⅰ)→野添原A・B,奥新田(Ⅱ主)グループ、南方の海蝕台地に拡散する竜ヶ原<sup>122)</sup>・夕<sup>123)</sup>等の小群が併存する。赤羽根町西半部から渥美町へかけて窯跡の分布は著しく稀薄となる。福江港一帯と遠州灘側の小塩津以西の半島西辺部を包括する広大な伊良胡御厨域における窯業生産の開始はやや遅れ、しかも皿山<sup>124)</sup>(8基,Ⅰ・Ⅱ)→皿焼(13基,Ⅱ)の支群のほかは、東大寺再建瓦窯として著名な瓦場<sup>125)</sup>(3基,Ⅱ)が知られているにすぎず、13世紀初葉頃には閉窯したとみられている。

以上、群構成の図式的な分析操作によって、(1)神戸・芦ヶ池・伊良湖の3地区および厨菌推定域は、単位群・支群の分布密度ないし窯跡数、群の時期別構成等で様の展開をみせず、したがって小地域毎で窯業生産の占める比重が異なる。その反面、(2)厨菌推定域を操業領域と仮定すると、複数の支群が併存する場合を含め普遍的に存在しており、支群に示された工人の移動範囲は大体1.5~2.5km圏内におさまる。渥美窯のかかる広域分散型分布は、専業度の高い特定の厨菌ないし公領での特産的生産に否定的な点で、基本的に珠洲窯と同一の生産形態と解されよう。この2点をふまえて3地区の生産動向を概括すると、12世紀前半代に特定地区で開窯した中世陶器生産は、12世紀中葉前後には、18~20支群前後の生産集団が一斉に稼動、後半代にかけて全盛期を招来し、13世紀前半代には急速に生産規模を縮小して解体の方向を辿る。知見の範囲で13世紀後半代まで存続したのは、壺沢窯南群の一部にすぎないようである<sup>126)</sup>。そして、かかる生産動向は、器種組成の変化に明瞭である。Ⅰ期前半は碗皿類主体かと思われるが(後述)、後半には碗皿類とともに、甕・壺・片口鉢の基本三種多数と各種宗教器を併焼する点で共通しながら、焼成中に窯体が崩落し器種組成を確実に把握しうる坪沢2号窯では碗皿と大甕・壺瓶を併焼したのに対し、大アヲコ2・6号窯は大甕専用窯に近く、大沢下2・4号窯に至っては貯蔵器の大部分が中壺によって占められるなど、窯群の焼成時ごとの相異が目立つ。Ⅱ期の様相は、大草御菌域にあって宝竜群(10基,Ⅰ)から発展した惣作群<sup>127)</sup>(21基,Ⅱ主,一部Ⅰ・Ⅲ)について



第22図 渥美窯跡群(西部)の分布と群構造

● 窯 跡(単位群)  
□ 園 厨



みると、Ⅰ期（11号窯）を核とする単位群（1～4号窯他）のほかに別の単位群（5～7号窯）を北方に派出し、南下しつつ膨張を遂げているが、貯蔵器の生産は少数で調理器は殆んど見当たらず、皿山窯のように皆無に近いものもみられる。Ⅲ期には燃焼部と焼成部の間に昇焰壁（段）を設け、分焰柱を具備しない窯構造の改変<sup>128)</sup>とともに、大体碗皿専用窯に転換したと考えてよい。上記渥美窯跡群の推移は、今後、編年の地域別細分作業がまたれるが、13世紀初葉頃知多半島では碗窯と甕窯に分化しつつ生産力を飛躍的に増強し<sup>129)</sup>、渥美工人の移動を契機として開窯した遠江・湖西窯もこれに連動して、碗窯＝地域窯に転換した<sup>130)</sup>のと原理的に同じ方向を辿ったと推察してよいであろう。

それでは、上記生産動向は、製品の流通とどうかかわるのであろうか。この点の事実関係の認定も、渥美窯と湖西・遠東諸窯との識別を含めて検討課題とせざるをえないが、おおづかみにいって、東海・中部高地・関東から東北太平洋域一帯に亘る商圈と、一衣帯水地域にある伊勢・志摩方面では明確な差異がある。すなわち、関東の状況を鎌倉についてみると<sup>131)</sup>、一定数の甕壺類のほか少数の片口鉢と水注・瓶子等の宗教器が消費され、供膳器は貯蔵器に付随して少量移出されているにすぎない。また東北でも、平泉藤原氏関係遺跡<sup>132)</sup>以外の消費地の実態は不分明であるが、渥美独自の袈裟襷文・蓮弁文壺が常滑三筋文壺とともに蔵骨器・経甕など宗教器として点的ながら広域で検出されるという消費傾向<sup>133)</sup>が認められる。他方、伊勢・志摩では近年村落遺跡の調査によって、瓷器系統皿類が供膳器の主体を占めることが明らかにされている<sup>134)</sup>。伊勢にはⅠ期前半に帰属する瓷器系統窯（四日市市岡山3・5号窯<sup>135)</sup>）が存在するが、伊勢・志摩全域にまで分業圏を確保したとは考え難いので、消費遺跡出土品の厳密な産地同定は今後にまつとしても、識別が可能な甕壺類の出土状況を勘案すると、神宮周域を含む伊勢南部は一応渥美・湖西窯の商圈と推定できよう。しかしとすれば、渥美窯の大勢がⅡ期以降準碗窯に転換しても、直ちに厨菌推定域を単位とするような自給的小地域窯へ転向したとはいえず、前記窯別の器種分化が貫徹しないままに貯蔵器を少量併焼する生産形態が持続した可能性も残されているが、今後、特定の窯群のみが近国ないし遠隔地窯として稼動し、大半が小地域窯に転換したのかどうかを見極めてゆく必要がある。

ここで、右の視点を具体的に深めるため、従来から衆目を集めている在銘資料を援用しつつ、特定地区の窯群から渥美窯の創成事情と生産形態の特質の一端を窺ってみよう。さて、渥美窯の開窯が12世紀第1四半期を下らぬことは、保安2年（1121）在銘陶製経筒（後述）の实在や、楢崎彰一氏の三筋文系陶器の編年研究<sup>136)</sup>によって傍

証され、確認された範囲では、芦ヶ池地区大アラコ窯群<sup>137)</sup>で藤原顕長・遠清刻銘壺を出土した同3号窯他より先行する4・5号窯がその段階の所産とみなされる。大アラコ4・5号窯は、灰原資料のため詳細を知りえないが、施釉した埴皿が主体をなし子持器台・陶錘が若干併焼されている程度で、特殊宗教器は見出されない。12世紀前半代に帰属する量産以前の精製な経筒類が当窯で焼成されなかったとはいえず、袈裟襷文壺の上限が12世紀初葉に遡るとすればその産出窯も問題となるが、前記2窯の器種組成からすると在地窯としての生産形態が払拭されておらず、甕壺類を主産品とする本格的な遠隔地向け中世窯として稼動するのは、当地区では12世紀中葉以降であろう。

顕長・遠清刻銘壺の性格については種々論ぜられてきた<sup>138)</sup>が、銘文の趣意は受領藤原顕長（正五位下行兵部大輔兼三河守）と夫人（比丘尼源氏）および惟宗・遠清（従五位下）が、その一族の現世安穩と親縁の道守氏、内蔵氏<sup>139)</sup>の祖先霊の追善供養を祈念した願文であることは異論がなく、一般の願文と書式が異なるものの、経筒銘文に近似の文例が存する<sup>140)</sup>ことから、本来経容器ないし外容器を意識して製作されたとしてよいであろう。ただ、当刻銘壺が顕長の三河守在任期間（保延2<1136>～久安元年<1145>、久安5<1149>～久寿2年<1155>）の製作にかかることは疑問がないとしても、顕長は遥任と考えてよく遠清も在京官僚とみられるから、京都へ貢進し発意通りに使用されたかは問題が残る。むしろ、三河国内の何箇所かで経塚造営の供養具に充当するため、窯元へ製作を依頼したとするのが現実的ではなかろうか。ところが、現在知られている消費地出土の3例は、いずれも三河以東の近隣国に限られており、今後も事例の増加が見込まれる。すなわち、出土状況未詳の甲斐・徳間例<sup>141)</sup>はしばらくおくとして、早く報告された遠江・三ツ谷新田例<sup>142)</sup>は、和鏡・小刀を伴わない石組施設内に埋置され、経塚、墳墓のいずれか決し難いが宗教器として使用されている。また、相模・宮久保例<sup>143)</sup>は、谷地形に二次堆積した相当数の渥美甕壺類を含む包含層中より検出されたため厳密な共伴関係を確定しにくいものの、銅経筒蓋が同一層から出土しており、経外容器の可能性もある。当遺跡は、渋谷庄司重国の居宅域の一角を構成し、遺物は柵列で囲繞された台地上の居住域、ないし近傍に設けられたかと思われる経塚等の宗教遺構から流出・埋積したものと判断されている。したがって、かかる出土・分布状態は、願文本来の趣意に基づく埋経行為が実際執行されたかどうかは別として、顕長・遠清刻銘壺が、渥美製品の流通した中部高地ないし関東南部のおそらく在地領主層向けの宗教専用器として基本三種とともに広域的に移出されたことを物語っており、三河国衙からの発注品とは別に、交易物資として製作され

た分があったことになる。この点は、生産地の状況に即してみると一層明瞭であって、窯体内（燃焼部）で出土が確かめられたのは大アラコ3号窯のみで、ほかは大体3号窯と灰原を共有するかあるいは窯体修築のための二次的移動とみてよい<sup>144)</sup>が、複数回の焼成にかかる異個体数は10点近く、器種は短頸壺に限られているが形態差があり、法量も器高50cm、40cm、30cm代に区分される。また、銘文の体裁はほぼ整っているが字体、崩しの誤記、脱字、配字の不統一があり、筆致も工人の模写を思わせる概して粗略な個体が目立ち、複数の筆者が割り出されている<sup>145)</sup>。これらの諸点を勘案すると、願文は「万」「大」など文字の呪術性に由来する刻字文に近い加飾的要素を円弧状器面に書き連ねる形で拡大し、かつ在任通算17年におよぶ国守（在京貴族）の政治・宗教的権威を示威することで宗教専用器の性格を強く印象づける効果を付与し、渋谷氏に代表される不特定少数の在地領主層を対象にかなりの数生産され、交易ルートに乗せられたと考えられるのである。そうとすれば、遠清と縁族のみの刻銘壺が製作された意味も納得できよう。

願長・遠清刻銘壺の性格を上記のごとく解してよければ、従来やや漠然といわれてきた渥美窯をはじめとする東海の中世諸窯が、院政権や国衙・庄領主権力を媒体に創出され、新興在地領主層を消費基盤としたとする論調<sup>146)</sup>に、やや具体的な論証を加えることができたことになる。ただし、願長刻銘壺自体必ずしも国衙管理下の「所」のような直営的生产機構から国衙を介する一元的配布を想定する必要がないことは、大アラコ窯創業時の生産形態が確認された範囲では基本的に在地窯として規定できること、12世紀中葉以降渥美窯が遠隔地窯として発展を遂げる段階で、半島のほぼ全域で一斉に窯群が稼動を開始し、広域分散型の展開を示すことから明らかであろう。しかしそのことは、大アラコ窯に具現される渥美半島への中世窯業の移植に、在庁官人級在地領主層の関与を否定するものでなく、彼らが陶山用益権や海上（交易）権の代償として国衙＝受領に何らかの形で経済的負担を義務づけられたことは充分予想されるところである。その意味で、渥美窯に国衙や宗教的権門が関与したという論旨は、“間接的”という条件つきで尊重すべきであるが、なお、窯業生産と流通管掌者が留守所を構成する官吏として公権とどうかわらせつつ活動を維持したか、その他の生業とともに彼らの生産経営体総体を歴史的にどう評価するかを明確化しなければ、庄園公領体制との相関性は軽々に論断できないと考える。

次に、承安2年（1172）8月18日の「奉施入 如法經箱（中略）鍛冶御蘭住人僧銀秀造之」在銘陶製經筒<sup>147)</sup>（『経塚遺文』276号、以下同じ）、同3年の「奉造立 如法經龜壳口事（中略）伊勢大神宮権禰宜正四位下荒木田神主時盛〔 〕散位度会宗常」

在銘の伊勢・朝熊山10号経塚出土陶製経筒（280号）、文治2年（1186）の「奉造立如法経ツ、一口（中略）加治御菌下司散位渡会宗恒助成」在銘の同3号経塚出土陶製経筒（327号）に現われる加治御菌は、銘文によって12世紀第3四半期以前に設営され、給主荒木田時盛、下司渡会宗恒（常）の所領であったことが知られる。当御菌域に顕在する坪沢群は群集規模と器種組成から、清谷川北岸田原御菌域の大沢下窯とともに、渥美神戸の拠点へいち早く陶器工長らが招寄され、開窯した可能性を有し、初期の近国・遠隔地窯の中核として稼動したと推定されるのである。そう考えてよければ、「為現世後生安穏太平」に経塚造営主体ともなった渡会宗恒は、神宮の禰宜級祠官と擬制的同族関係を結び当該地区の開発を領導した郷保長級在地領主であり、窯業生産の開始に深く関与していたことは容易に推察できよう。

この加治御菌を含む汐川流域の貢納物（年貢・公事・供祭物）が、当該地の中世的体制の形成期にあって、神戸司に一元的に管掌されていたと仮定した場合、それに関連して注目されるのは、神宮禰宜庁で正員禰宜層への昇任を排除され下部組織を構成する職掌人<sup>148)</sup>として、清酒作・御筭作・忌鍛冶等とともに陶作内人がみえることである。陶作内人の職務は、平安時代には三度祭（6・9・12月）の祭料および五所宮の雑器物として、「缶・瓶・比良加・埴・波佐布・坏・佐良・水麻利」465口を調達することにあり<sup>149)</sup>、中世でも本神戸内の窯業生産地から引き続き貢納されたらしいことは、『神鳳鈔』に「本神戸内。御神酒三缶。用紙三百。瓶子十二口。祭料造酒米二石。懸力稻三十束。荷前調絹四尺。畳二十枚。」とあることから一応推測してよい。もっとも、この記載が『神鳳鈔』が編述された14世紀代の実態とすると渥美窯廃絶後となり、「瓶子」<sup>150)</sup>は渥美産でなく、瀬戸産ないし漆器の可能性もある。いずれにしても、陶作内人が供祭物（御贄物）の一種として調達したかもしれない陶器は生産物のごく一部であって、伊勢神宮の自給・家産的再生産体制の一環を担う<sup>151)</sup>にとどまり、陶作内人が神戸と周域厨菌群の窯業生産物の大部分を徴収・配分（交易）したとは考え難い。伊勢神宮禰宜層が分割的に領有し、その経済基盤とした厨菌の年貢・公事の内容は殆んど知りえないが、建久3年（1192）『伊勢大神宮神領注文』<sup>152)</sup>に列举する供祭物は、各種の絹・糸・布・料紙・河海産物のほか鉄・馬・麩・油・菓子等で陶器は見出せず、後述する伊良胡御厨も「外宮 上分三石 雑用三十石」、あるいは「三石 干鯛三十俵」<sup>153)</sup>とあって、神戸預・刀禰あるいは各厨菌の（惣）検校、下司等庄務権を分割的に保有し、陶山の用益権を行使しうる庄官級在地領主を介して、地域内部ないし近国・遠隔地へ放出された点は、珠洲窯と同様であったと考えられよう。

ところで、東海における庄園収取機構の特色として、絹・綿・糸を年貢・公事物に指定するいわゆる東海型庄園群の实在が重視されてきた<sup>154)</sup>。このことは、例えば遠江西辺（浜名湖西岸）の湖西窯（湖西市、約60基）を含む吉美庄（承久2年〈1220〉以前成立）の明応6年（1497）の貢納物が「年貢絹四百匹 年貢布三百枚三百反 四丈白布六段」<sup>155)</sup>であり、農耕適地が乏しい知多半島南西岸域に展開するしのど池群（知多郡美浜町）から内福寺群（同南知多町）まで7群ばかりの中世窯を擁し<sup>156)</sup>、かの長田庄司忠致の一族の寄進にかかると推定される野間・内海庄（安楽寺院領、保延6年〈1140〉立券）が、建久2年（1191）当時、調度品（簾・座・畳他）・砂金および兵士役を負担し、鎌倉中期以降は「絹百三十疋、糸二百二十両」<sup>157)</sup>に変更されていることから、渥美窯をもあわせ中世陶器が指定年貢・公事物の弁済代物として生産されたことは予想できるものの、陶器販売の収益分がどの程度充当されたかは不明というほかはなく、その間に庄官級在地領主層が介在する以上、やはり彼らの私富蓄積活動としての側面を濃厚に具備していたと考えるべきであろう。その意味では、渥美窯を伊勢神宮の鎌倉時代における重要な経済的基礎とする見解は<sup>158)</sup>、神宮の權益を厨藺の領有を介して分割的に享受する（権）禰宜＝給主祠官層、ないし（惣）検校・下司級在地領主の収益源の一部と改補する必要があるであろう。問題をこれ以上深化させるためには、生産地の支配機構や村落構造、海上権の掌握者との相互関連性の検討が要請されるが、既存の資料では立ち入った議論は難しい。ただ、工人の存在形態について付言すると、さきの窯跡群構成のあり方から名主的小経営が生産の基礎単位かと推定され、生業基盤の比重は小地域ごとに異なるとはいえ、ここでも農業・漁業・海運業等多角的かつ未分化な生産経営形態が想定されるであろう。瓦経・陶製経筒等の特殊宗教器が、銘文によって農閑期にかかる8、9月ないし以後に日常雑器と併焼されたことが知られる<sup>159)</sup>のも、そのことの傍証となろう。また、伊良胡御厨の事例であるが、伊良湖岬を望視する瓦場窯群の南西250mほどの低海蝕崖上で検出された3×2間（33m<sup>2</sup>）の掘立柱建物では、壺・碗を柱穴の根石代わりに用い、しかも相当数の石鍾を伴う<sup>160)</sup>ことから、漁撈に従事するかたわら窯業生産にも参加する御厨神人の映像が浮かび上がってくるのである。また、中世陶器の運送・販売についても、伊勢・志摩方面へは供祭物等の貢納船への便乗積載が予想されるほか、神宮領安濃津御厨の刀禰中臣国行等のごとく、「依無指寄作田畠、往反諸国成交易之計、致供祭勤、成世途之支者」<sup>161)</sup>が早くから神人特権をえ、地廻り海運業者として流通の一端を担ったと考定される。

ところで、渥美陶器の生産・流通問題を考察する際、上記略述した主として地域向

けの埴皿と、主として近国・遠隔地対象の基本三種のほか、宗教器の占める比重と消費のあり方は、渥美窯成立の現実的契機とその後の消長を考える上で看過できない<sup>162)</sup>。そして、宗教器も経筒・瓦経・尊像・瓦塔・五輪塔等、特定の需給関係を介する臨時の特注品と、広口瓶・水瓶・瓶子・火舎・子持高坏等の一般宗教器では性格が異なり、後者は基本三種に準ずる物資としてよく、常滑窯が大甕の量産を特色とするのに対し、袈裟襷文・蓮弁文や刻字文で加飾した壺類を一般宗教器として多産しているのは、民間雑器を象徴する片口鉢の生産量が低い点とも関連する渥美陶器の特質としてよいであろう。そこで、この点に關説して、経営主体と工人像を探る好資料である、伊良胡御厨を舞台とする伊勢・小町塚（伊勢市浦口町）出土瓦経（26点）・陶製光背（4点）・台座（1点、無銘）、五輪塔（地輪、1点、無銘）の一括、同亀谷経塚（同市前山町）出土陶製経筒について若干検討を加えよう。

本資料については、奥村秀雄<sup>163)</sup>・和田年弥<sup>164)</sup>氏等によりつとに解明がすすめられた結果、(1)承安年間（1171～74）を盛期とする神宮周辺の埋経宗儀が、荒木田・度会氏をはじめとする神宮権禰宜層と類族を檀越・同心として推進されたこと、(2)小町塚瓦経の大願主ないし大勧進西観・遵西が伊良胡郷万覚寺僧であり、筆者の一人聖賢も渥美郡福江町美保出土瓦経片<sup>165)</sup>にみえること、(3)「白瓷瓦」（284号）、陶製光背（283号）あるいは「経筒」（322号）の製作者とみられる「瓦工 三河国平四郎」（284号）、「作者僧隆円」（283号）、「造手藤井成重」（322号）が登場すること、等が明らかにされた。現在、小町塚瓦経の生産地は建久6年（1195）、東大寺再建用瓦を焼成した瓦場瓦窯一帯と考定されている<sup>166)</sup>が、先行する皿山窯（渥美町和地）で埴皿と少数の甕・片口鉢、火舎・子持高坏、また皿焼窯<sup>167)</sup>（同堀切）でも埴皿・甕のほかに五輪塔が焼成されていることからすると、皿山・皿焼地区で焼成された可能性もある。当御厨の成立経緯は詳らかでないが、11世紀末葉には存在しており、神戸地区中枢部や芦ヶ池地区より幾分遅れ、12世紀中葉以降窯業生産を開始し、給主に特殊宗教器を備進する需給関係を保持していたことになる。当御厨の給主は、小町塚瓦経銘文に「当御厨前領主度会神主常行」（286号）とみえ、埋経事業は常行（寛治元〈1087〉～永暦元年〈1160〉）没後14年目にその追善供養を祈願し、給主氏寺（伊良胡神社宮寺か）とも思われる万覚寺僧西観・遵西を大願主、観道・聖賢・良中ら一門の僧尼を筆者・助筆、常行の二子をはじめとする親族（氏子）と荒木・佐伯・磯部氏らを結縁衆に加えて執行された<sup>168)</sup>。

当瓦経をめぐる問題の一点は、経塚造営主体と在地伊良胡御厨の関係であるが、萩原竜夫氏は、常行次男春章が「母伊良故住末吉（女カ）」<sup>169)</sup>との間にもうけられた

ことに着目し、大檀那会度常春を春章の義父末吉と同一人物かとされる<sup>170)</sup>。瓦経銘文に即してみると、長男雅雄も名を連ねているが、常春と春章の主導下に推進されたことが窺え、檀越個々の出自、本貫地を明らかにしえないものの、後述する陶製光背の造立者藤井氏をはじめとする在地領主層の積極的な参画を推察できよう。その意味で注目されるのは、瓦経残欠の1枚にみえる「書写之御所近辺安穩□□」(292号)の刻書である。写経(刻経)が行われた万覚寺に関する文献・口承・地名は現存しないが、「御所」は御厨政所を指すと考えてよいから、万覚寺はその近辺に所在し、給主をとりまく神領民たる在地有勢者や執筆僧との緊密な人的交渉の場として機能したとみられる。度会常行は、生没年次から父常生とともに伊良胡御厨の創営＝開発にかかわり、そのことが埋経の盛行<sup>171)</sup>とあいまって手厚い供養事業発願の契機をなしたのであろう。その際、埋納供養具一式が陶製で製作されたところにも、在地との深い結びつきが窺われる。棚橋氏も注意されたように、常行が60歳で春章をもうけていることから、長期に亘る在地経営への参画を想定すべきであろう。このように、小町塚経塚の造営は、所用供養具類の生産地とは経済的関係(交易)のみで結ばれた宮院顕貴による埋経事業とは異なり、在地性の濃厚な神宮祠官と特定の在地領主層との、いわば人格的提携によって実現をみたところに特色があり、その前提として、在地領主が供養具を含む窯業生産を管掌する姿を透視しうるのではなかろうか。

第二に、常滑窯との差異として、渥美製品で占める特殊宗教器の比重については、今後の集成調査を必要とするが、熊野本宮経塚(和歌山県西牟婁郡本宮町)出土の松尾社祠官秦親任を檀越とし、大般若経600巻を収納した、渥美産最古の保安2年在銘陶製経筒<sup>172)</sup>(「白瓷箱十二合 箱別五十巻」93号)や、朝熊山経塚群の発掘調査で、保元3年(1158)から文治2年(1186)に亘る在銘品6口を含む54口にのぼる陶製経筒が出土している<sup>173)</sup>。一方、駿河・三明寺経塚(沼津市岡一色)では、伊勢神宮や熊野三山の精製品と対照的に粗造の渥美産陶製経筒が40点出土し<sup>174)</sup>、三河・鳳来山鏡岩下遺跡(北設楽郡鳳来町)における埋経地から、納骨墓地への転化過程で豊富な渥美産外容器や壺類が消費され<sup>175)</sup>、在地領主層による経塚宗儀の一端が示現されるなど、多様な消費形態が判明しつつあり、窯跡での遺存度が稀少であるというだけで過小評価できない。そのほか、現存する渥美産陶製経筒には形制・加飾に創意を凝らした精製品が少なくなく<sup>176)</sup>、また瓦経等は製作が長期間に亘ったことが知られるので、檀家・結縁衆から支出され窯業経営主体に還元された所得は、生産物全体で相当の比重を占めたのではなかろうか。従来、渥美窯が13世紀中葉前後に常滑窯との競合に敗退・廃絶した理由を、耐火度が低くかつ可塑性に難点がある砂質陶土に基因する



燃料経済の効率の悪さ（燃焼部を深く掘り下げ、間接焰とする窯構造）が説かれてきた<sup>177)</sup>。たしかに基礎的条件として看過しえないが、13世紀初葉以降、経塚造営の風習が急速に退潮するとともに、高級施釉陶器専業体制を整えた瀬戸窯の台頭による蔵骨器転用器種（四耳壺・瓶子）の増産も加わって、渥美窯の特産物資であった特殊宗教器の特注をはじめ一般宗教器ないし装飾壺類の需要が急減したことも、衰微の一因と考えられるのである。猿投窯東山地区の動向<sup>178)</sup>も、器種別分業生産体制を整備することなく、13世紀初葉頃には瀬戸窯との競合のまゝに衰微した点で、原理的に同一の事象と理解できよう。ところが、東海のごとく地域内部で競立、補完し合う生産地が欠落していた北東日本海域では、創成期に渥美窯と近似した性格を具備した珠洲窯が、民間雑器窯として発展を遂げた常滑窯に追従して、基本三種を基軸とする生産体制への転換に成功しえたのであった。

さて第三は、瓦経・陶製経筒類の製作工人の問題である。まず、小町塚瓦経は、法華経とその具経無量義経・観普賢経、秘密三経といわれる大日経・金剛頂経・蘇悉地経のほか12種の經典が、承元4年5月11日（282号）から7月6日（292号）に亘って書写され、復原埋納総数は四百数十枚にのぼる。刻経作業は、大願主、筆者・助筆僧9名以上と結縁衆の一部の参加が確認でき、同一經典でも書式不同で、丁付けもいくつかのグループに分かれ、かつ異筆に対応するとされる<sup>179)</sup>。つまり、2箇月に亘る複数グループの刻経と本体の製作は並行して行われたと考えられるので、それほど多数の工人を必要としたとは思えないが、成形工程にいたる労働量を考慮すると「瓦工平四郎」は、陶器工長的立場にあった人物と考えるのが妥当であろう。また、瓦経と一括埋納された陶製光背の「作者僧隆円」は、簡便化されているとはいえ、台座とともに儀軌にかなった図様の描刻から「仏師隆円」（289号）であったことも自然に肯首しえよう。ただ、亀谷経塚出土陶製経筒の「造手藤井成重」について、奥村氏が「陶工関係の工人」<sup>180)</sup>とするのに対し、中村五郎氏は「造らせた者」あるいは「経塚を造営した者」<sup>181)</sup>と解された。「造手」は用例に乏しく、「経筒一口（中略）治承二年七月十二日造之」をうけ、願主僧寛喜と併記されていること、小町塚陶製光背（289号）の檀越・結縁衆に名を連ねていることを考慮すれば、造手=造立者として処理できなくもない。この問題を探る手がかりとして、瓦経・経筒類の紀年銘が埋経宗儀（供養）のどの段階で、誰が記銘したかを通観すると、紙本・銅板・瓦経は「書写畢」の時日とみてよく、銅・石・陶製経筒は、鑄造（258号他）、經典の入筒（289号他）、あるいは埋経日時を予め記銘した事例（27・35・56号他）も存するが、やはり収納する經典の書写終了の日時を記銘する事例が目立つ。ところが当経筒の場合、

順読すれば生乾きの製品に記録した日時と解され、かつ手なれた能筆の筆致が一般工人による模写とは考えにくいことからすると、成重自身が「造手」として刻書したとも推定できよう。藤井姓は現在も渥美町和地に集住し、小塩津・堀切等にもみえ<sup>182)</sup>、往時の在地有勢者の名残りをとどめているとも考えられるから、成重は単なる檀越でなく、窯場を直接管掌する在地領主層として、生産に深く関与していたかもしれない。

以上、推量の多い仮定ながら、伊良胡御厨における特殊宗教器の製作工人が、一般供膳・貯蔵・調理器の生産に従事した農漁民を率いる陶器工長的工人であり、伊勢神宮から職能的神人と目されていたかと思われる平四郎と、仏師隆円をはじめとする万覚寺の執筆僧との緊密な連携のもとにすすめられたと考えてみた。ここで、さらに仮定を重ねるならば、定住僧としては多すぎる10名を越える僧衆のうちに、遊行聖が含まれていたと考えられないかということである。経塚の造営事業が、台密系の遊行聖＝修験者の広域的な勧進活動を媒体としたことはつとに指摘されており<sup>183)</sup>、特に院政期以降隆昌をきわめた熊野信仰の全国拡大が注目されてきた<sup>184)</sup>が、瓦塔・仏像・五輪塔等の特殊宗教器の製作が、仏師隆円のごとき僧侶の参画をえてはじめて可能であったことは贅言を要しまい。連想を能登半島につづけると、『梁塵秘抄』に載せる「我等が修行に出でし時、珠洲の岬をかい回り、打ち廻り、振り棄てて、单身越路の旅に出でて、足打ちせしこそあはれなりか」は、法住寺白山社<sup>185)</sup>から内浦を北上、『白山之記』に「高嶺能登鈴モスノ白山」とみえる毛雲白山社(珠洲市三崎町雲津)を經由し、半島先端に鬱蒼たる原生林に覆われ神奈備型に聳立する須ヶ嶽(山伏山, 172m)を踏破する修験者の姿を彷彿とさせる<sup>186)</sup>。『新猿蓑記』に大峯、葛木、熊野、金峯山とともに「越前の白山」がみえ、その宗勢が越後・能生白山社(西頸城郡能生町)まで伸びていたことは周知のごとくであるが、珠洲陶器の創成に当たり、東海の瓷器系、瀬戸内の須恵器系のみならず、宗教器に中国陶磁・金属器・漆器をも取り込んだ複合的構成は、広域的な情報収集、技術伝達能力をそなえた修験者による器種・器形ないし加飾法選択の助言を思わせる。そのことは、創業期の中世陶器が、在地領主層の開発資材であると同時に、多分に奢侈的宗教的欲求に呼応する側面を有し、遊行僧＝修験者が領導する一過的な経塚・墳墓、あるいは日常的な仏事祭礼の場で消費される一連の社会性を前提として創出されたこととも、深くかかわると考えられるのである。

## 結 言

以上、珠洲窯を中心に中世窯業創成の技術的歴史的背後事情について、迂遠な考察をめぐらしてきた。これを約言すれば、(1)珠洲陶器の生産技術は、10世紀代に進展した律令的土器生産体制の解体後も存続したとみられる、在地の甕壺専用窯のそれを継承しながら、東海の瓷器系、瀬戸内の須恵器系の影響下に、合成的かつ固有の技術体系として定立された。(2)珠洲窯は当初より基本三種および一定数の宗教器の定型・定量的組成と大形窖窯構造をそなえ、常滑・渥美両窯の対極に位置してその発展に触発され、舟運の便をもって北陸南西部を商圈とする、広域型の窯業特産地として成立した。(3)北東日本海域には、珠洲窯と生産技術を共有し、その一元的直接的な技術伝播を媒体とする珠洲系諸窯が展開し、中世前期を通して稼動した。(4)創成期の珠洲窯を担った工人の存在形態は、陶山用益権と広域的交易業務を掌握する庄官級有力在地領主の招寄・管掌下に、その多角的な生産経営の一環として編成されたと推定されるが、直接庄経済＝年貢・公事収取対象とされず、基本的に在地領主の私富蓄積活動と規定できよう。(5)珠洲陶器は、国衙に結集しあるいは庄園公領に分散しつつ所領・権益の公認と拡大を準備しつつあった、新興在地領主層の開発資材ないし宗教器確保の要請に呼応すべく開窯した点で、当初は庄公経済振興策の側面を有しており、その意味で庄園公領体制と一定の相関性が認められる。

上記のうち、(5)については別稿に譲り、創成期の広域型中世窯で占める珠洲窯の位置を明確化するため、中世窯の成立事情を要約すると、生産器種に規定される需給者（支配権力）との関係によって、おおづかみに東日本（東海・北陸）と西日本（瀬戸内）の相異として捉えられる。

まず東日本では、基本三種と一般宗教器を併焼し、一時的に屋瓦生産を介して中央権門に結びつきながら、直接開窯の契機をなさず、基本的に庄公経済機構の枠外で展開を遂げた常滑窯、特殊宗教器の占める比重が大きく、その特注的需要によって伊勢神宮・熊野三山をはじめとする宗教的権門勢力と結託し、東日本太平洋全域に製品を供給した渥美窯が挙げられる。他方、珠洲窯は、特殊品を含む多様な宗教器の量比が相対的に高く、器種別未分化な生産形態をとった点で常滑・渥美両窯の性格を兼備しながら、中央権門からもっとも遠心的位置におかれ、在地領主・百姓層を供給基盤とした点で、東日本の典型的な広域型中世窯とできよう。なお、猿投（東山）窯は、屋瓦・特殊宗教器によって中央権門と一定の需給関係を保持したが、広域流通の実態が

いまひとつ不分明で、在地領主・百姓層を主要な供給基盤としたともみられるので、渥美窯に準ずるものと理解しておきたい。

これに対し、神出窯（神戸市）に具象される東播の中核窯<sup>187)</sup>が、“国王の氏寺”たる法勝寺・尊勝寺や鳥羽離宮への屋瓦調進を現実的契機として、中世的窯業生産体制を確立したことは共通認識となっている。その詳細は稿を改めねばならないが、神出窯で最古に編年される釜ノ口5号窯（11世紀第4四半期）の組成は、圧倒的多数の埴と少量の皿、一定数の甕・片口鉢・屋瓦とされ<sup>188)</sup>、地域向けの埴窯としての性格から脱脚しきっていないが、12世紀前半代のうちに屋瓦の量産と片口鉢專業化示向を強めつつ、広域型中世窯として発展を遂げた。この間の推移に関する近年の所論は、神出窯の突然の開窯と閉窯に着目して、国衙権力による須恵器工人の強制的編成と製品管理が強調される傾向がある<sup>189)</sup>。この観点は、12世紀前半代にはほぼ屋瓦専用窯として成立をみる魚橋窯（高砂市阿弥陀町）を、建久3年（1192）、加古川上流域に所在し、瓦2万枚を尊勝寺・蓮華王院へ貢進した安田庄（多加郡中町付近）に「加納」された「瓦保」<sup>190)</sup>に比定する今里幾次氏が、「当初の段階では、播磨国衙に直属<sup>191)</sup>」していたとする見解に通ずるものであろう。氏はさらにすすんで、平安末期における播磨諸窯の屋瓦型式を“播磨国衙系屋瓦”と汎称し、それらの生産には大なり小なり播磨国衙が関与していた<sup>192)</sup>と考え、その例証として、尊勝寺215型式を出土した志方窯（三木市志方町一帯）東中遺跡をはじめとする印内郡内の瓦陶兼業窯、門前1号窯・中津倉1号窯等の付近に「細工所」の地名が遺存することを挙げられる<sup>193)</sup>。たしかに、東播の諸窯のみならず、1130年代以降鳥羽殿東殿用瓦を焼成した尾張の諸窯<sup>194)</sup>も、瓦保のごとく雑役免の代償として「瓦勤」のほか、一国平均役の課役などの貢納方式によって屋瓦の確保が図られたこと、それを契機とする西日本への移出促進は充分考えられる。そして、12世紀後半代には、院政権の造寺造宮事業の衰退により、国衙直営から民窯への転換が説かれるのも、大筋として認めてよいであろう。

ただし、神出工人の出自は、12世紀代に神出窯が屋瓦と片口鉢、三木窯（三木市）が屋瓦と甕、魚橋窯がほぼ屋瓦専用という地域窯相互の分業体制を整備する過程で、政治的技術的旧守性ゆえに廃絶する志方、西脇・竜野両窯<sup>195)</sup>（西脇市・加東郡竜野町）の製品系列には求めにくく、北接する三木窯がやや先行し、神出地区にも10世紀代の須恵器窯が実在する<sup>196)</sup>こと等からして、三木・神出の須恵器小集団を核に再編成された可能性も否定できない。また、神出窯では12世紀前半代には広域対象の片口鉢が増産され、瓦当型式から三木・神出、魚住（明石市）、魚橋の諸窯の窯業集団が各々一定の主体性をもって操業していたと推定されることから、東日本と共通する民

需品生産の一面も軽視できない。このことは、上原真人氏が早く論じた播磨系屋瓦の多元的な需給関係を所課国あるいは造国制のみで理解しがたい<sup>197)</sup>ことからいえるのであって、印南野段丘東辺の農耕不適地に設定された神出保が、便補保として在庁官人の主導下に“開発”されたとするのが実態に近いのではあるまいか。かつて、上原氏は院政期の求心的屋瓦生産に、屋瓦専用形態をとる丹波・讃岐と、瓦陶兼業形態をとる尾張・播磨の差異から国衙の干渉の強弱を読みとろうとした<sup>198)</sup>。讃岐国庁が設営された綾川上流約4kmに所在する陶(十瓶山)窯では、中世的窯業への移行が漸移的で、かつ古代須恵器生産域がそのまま膨張する形で展開する数少ない事例である<sup>199)</sup>が、その生産は阿野郡陶地方の郡領氏族でありのちに在庁官人化した綾氏によって管掌され、鳥羽南殿への運搬業務も彼らの手で行われたと推定されている<sup>200)</sup>。瀬戸内海域の須恵器系諸窯の生産形態の分析は今後に残されているが、東日本の諸窯と異なり窯構造・規模が従前の須恵器窯と大差ないこと、および十瓶山窯の特産品である独特の広口長胴平底甕の系譜が平安時代以来の器種系譜を負い、東播系の甕が外底面を叩き出す成形の第三工程を省略せず、須恵器の製作技法を忠実に継承した広口球胴丸底に作られていることが問題となる。これと群構成、ひいては工人組織のかかわりは即断できないものの、例えば神出窯が膨張する12世紀前半代には1世代ほどの稼動期間が見込まれる生産の基礎単位となる小群が5～6単位併存するようで、そのことは圃場整備事業に伴う分布調査によって2ブロック以上の小村落と、付設された3群の粘土採掘土壌等の検出<sup>201)</sup>から一端が窺知される。今後作業単位と窯跡小群の対応関係の追跡がまたれるが、集約的な生産組織の実在した形跡は認めにくく、旧守的な須恵器調納国の伝統を負う複数の須恵器小集団の編成を思わせるのである。

前記略述してきたところによって、京畿内権門の膝下におかれた瀬戸内諸国の窯業生産が、庄園公領体制の強固な枠組みの下で、須恵器窯の中世的復興の形をとって中世窯業へ転換せざるをえなかったのに対し、庄公権力の関与が間接的にとどまり、いち早く広域型中世窯として展開した東海・北陸の諸窯の差異の一端を明らかにしえたいと考える。しかし、瀬戸内の諸窯にあっても、当初より在庁官人層の領導下に工人編成が図られ、彼らの私富蓄積活動としての側面を有していたとみられることから、土師器・瓦器生産工人にみられる給免田支給を介する座的手工業者群<sup>202)</sup>とは異なる中世前期の在地領主制と商品経済生産の問題として、その実態と評価を深めてゆく作業が要請される。

## 註

- 1) 石井進「中世窯業の諸相」『講座・日本技術の社会史』4（1984年）、保立道久「中世民衆経済の展開」『講座日本歴史』3（1984年）他。
- 2) 荻野繁春「中世の須恵器を議論するにあたって一分類を中心に」『福井考古学会会誌』1（1983年）。
- 3) 檜崎彰一「古代末期の窯業生産」『日本史研究』79（1965年）。なお、論文の要約は、便宜的に筆者の用語を使用した部分がある。
- 4) 拙稿「地方窯の展開―能登・珠洲窯の場合」『地方史と考古学』（1977年）、同「中世陶器の生産と流通(一)」『考古学研究』108・110（1981年）。
- 5) 間壁忠彦・葎子「備前焼ノート(1)(2)(3)」『倉敷考古館研究集報』1・2・5（1966～68年）。
- 6) 註3文献。
- 7) 愛知県陶磁資料館『研究紀要』2（1983年）。なお、前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最終末の諸様相―瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして―」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』Ⅲ参照。（1984年）
- 8) 拙稿「奈良平安時代の土器編年」『東大寺傾横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会（1983年）。
- 9) 田中照久「第2章 第1節 越前・若狭の須恵器窯」『福井県窯業誌』（1983年）。
- 10) 田嶋明人「9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡』I（1986年）。
- 11) 福島正実・宮下栄仁「柳田タンワリ1号窯跡」石川県立埋蔵文化財センター（1982年）、浜岡賢太郎・嵯峨井亮・橋本澄夫・吉岡「能登烏屋古窯址群の調査（第1次）」『石川考古学研究会々誌』9（1965年）。
- 12) 1973年、石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施。
- 13) 註11浜岡他文献。
- 14) 浜岡賢太郎「池崎第1号窯」『七尾市史・資料編』4（1970年）、土肥富士夫・近間強『池崎窯跡』七尾市教育委員会（1985年）。
- 15) 平田天秋・宮下栄仁「花見月遺跡」石川県立埋蔵文化財センター（1984年）。
- 16) 浜岡賢太郎「第3章 第6節 古窯跡」『富来町史・資料編』（1974年）。
- 17) 浜岡賢太郎「第3章 第4節 歴史時代 倉垣コマクラブ窯跡・猪の谷貯水池窯跡」『志賀町史・資料編』（1974年）。
- 18) 拙稿「洲衛古窯址群」『石川考古学研究会々誌』10（1966年）。
- 19) 平田天秋「第5章 第2節 宮犬古窯跡」『内浦町史』（1981年）。
- 20) 宇野隆夫「古代的食器の変化と特質」『日本史研究』280（1985年）。
- 21) 平行条線状打圧原体は、木目と刻み目の関係が(a)直行、(b)斜行、(c)平行に分類される（横山浩一氏の示唆をえた）。
- 22) 笹沢浩「凸帯付四耳壺考」『長野県考古学会誌』51（1986年）。
- 23) 宮下幸夫「戸津9号窯」小松市教育委員会（1980年）、註8文献。
- 24) 望月精司氏の教示による。
- 25) 宮犬窯の器種・器形は、能登窯跡群後山支群出土須恵器と近似し、倉垣窯より幾分先行する可能性がある。
- 26) 福島正実・木立雅朗「第1章 第4節 1～3」『辰口町史』2（1987年）。
- 27) 小村茂『戸津』小松市教育委員会（1983年）、樫田誠・望月精司『戸津―第4・5次発掘調査概要報告書』（1985年）。
- 28) 田嶋明人氏との共同観察所見。ただし、資料整理中の閲覧の所見なので、本報告書刊行の時点まで最終的判定は留保したい。
- 29) 小笠原好彦「東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』（1976年）他。
- 30) 檜崎彰一「愛知県猿投山西南麓古窯址群」愛知県教育委員会（1957年）、愛知県教育委員会『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』I（1980年）。

- 31) 石井清司「篠窯跡出土の須恵器について」『京都市埋蔵文化財情報』7 京都府埋蔵文化財センター (1983年)。
- 32) 註9文献。
- 33) 望月精司「戸津古窯跡群・ニッ梨古窯跡群」『北陸の古代寺院—その源流と古瓦—』北陸古瓦研究会編 (1987年)。
- 34) 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」『造瓦と考古学』(1976年)。
- 35) 拙稿「平安前期の地方政治と国分寺 (上) —加賀国分寺をめぐる問題—」『金沢大学日本海域研究所報告』8 (1976年)。
- 36) 『政治要略』巻55, 交代雑事15, 国分二寺事 (新訂増補国史大系本)。
- 37) 高堀勝喜・金山顯光・吉岡・浅香年木『加賀三浦遺跡の研究』松任町教育委員会・石川考古学研究会 (1967年)。
- 38) 田嶋明人・平田千秋他『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会 (1979年)。
- 39) 拙稿「施釉陶器・陶硯・墨書土器」前掲『東大寺領横江庄遺跡』。
- 40) 宇野隆夫「後半期の須恵器—平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成」『史林』67—6 (1984年)。
- 41) 拙稿「第4章 珠洲古窯跡」『珠州市史』1 (1976年)。
- 42) 身を印篋作りとした東海の瓷器系外容器を写した珠洲系外容器は、山形県普広寺山経塚例等がある。また、猿投産牡丹三筋文外容器 (『世界陶磁全集』2, 原色図版1) に酷似する、太身印篋作りの筒に環状鈕付蓋が被る珠洲外容器 (写真図版2) が知られている。
- 43) 磯部幸男・杉崎章・山下勝年『ニッ峯古窯址群』武豊町教育委員会 (1976年), 杉崎・山下・磯部・奥川弘成『松洲古窯址群』常滑市教育委員会 (1981年), 杉崎・山下・奥川・中野晴久『出地田古窯址群発掘調査報告書』同上 (1983年)。
- 44) 常滑製品の製作技術については、赤羽一郎『常滑焼—陶芸の歴史と技法—』(1980年), 杉崎章・村田正雄『常滑窯—その歴史と民俗—』(1988年), 中野晴久「知多古窯址群における中世陶器成形技法の再検討」『知多古文化研究』I (1984年) 参照。
- 45) 東播系甕類における紐叩打一貫成形, および綾杉状叩打ないし綾杉状原体使用の始期と出自は不明であるが, かつて荻野繁春氏が提示された中世形成期における高麗と日本の文化・技術交流の視点 (『東北アジア世界の中の日本中世社会・夢想』『福井考古学会会報』2, 1983年) からすると, 鹿児島県カムイヤキ窯跡 (伊仙町教育委員会『カムイヤキ古窯跡群』I・II, 1985年) の甕類にみられる綾杉状原体が12世紀前半代に遡ることが可能視されており, 今後瀬戸内の須恵器系諸窯, ひいては珠洲窯との交渉が問題となろう。
- 46) 宇野氏は, 畿内および周辺 (篠窯) の玉縁状口縁鉢の器形的系譜を, 「9世紀末の高台を消失した甕Cが盤Aを吸収して生じた」 (註40文献79~80頁) と解されたが, 甕Cの系譜は広口鉢として10世紀代の周辺窯に採用されていると考えられるので, 片口鉢の主たる祖型は盤Aとみられる。今後, 機能性を加味した検討を期したい。
- 47) 杉山洋「2 霊仙寺跡経塚とその出土遺物」『霊仙寺跡』東背振村文化財研究会 (1980年)。
- 48) 亀井明徳「宋代の輸出陶磁 日本」『世界陶磁全集』12 (1977年)。
- 49) 平出紀男「白磁四耳壺について」『古代文化』35—11 (1983年)。
- 50) 愛知県清林寺遺跡 (甚目寺町教育委員会『甚目寺町文化財調査報告』I, 1983年) 出土有筋牡丹・樹木文四耳壺および有帯牡丹文四耳壺片 (第11図7他) は, いずれも器高40cmを越える大壺で, 瀬戸窯で定型化される灰釉四耳壺と系譜上連結しないと考えられる。
- 51) 山下一年・宮石宗弘他『菱野団地古窯址群』瀬戸市教育委員会 (1970年) 98頁以下。
- 52) 赤羽一郎氏の教示による。
- 53) 奈良国立博物館『経塚遺宝』(1977年) 図版196。
- 54) 水瓶については, 中野政樹「水瓶について」『MUSEUM』97 (1959年), 景山春樹「建治2年の布薩水瓶その他」『史迹と美術』336 (1963年), 蔵田蔵編『仏具』日本の美術16 (1967年) 他。

- 55) 山本信夫『大宰府条坊跡』Ⅲ（1984年）第13図30。
- 56) 註53文献，図版201。
- 57) 常滑製品の加飾法については，猪飼英一「常滑古窯知多古窯と押型文の変遷」『古代学研究』38（1964年），杉崎章「第6章 行基焼製品にみられる押印文様の編年」『大知山旭大池古窯址』（1970年），坂野俊哉「出土遺物にみられる押印文について」『鎗場・御林古窯址群』常滑市教育委員会（1985年）他。
- 58) 渥美製品の加飾法については，小野田勝一他『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』田原町教育委員会（1971年）105頁以下他。
- 59) 兵庫県教育委員会保管資料。
- 60) 大村敬通・水口富夫他『魚住古窯跡群』兵庫県教育委員会（1983年）46・49頁，寺島孝一・鋤柄俊夫他『魚住古窯跡群発掘調査報告書』明石市教育委員会・平安博物館（1985年）44～46頁。
- 61) 奈良国立文化財研究所『平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡 附尊勝寺発掘調査報告』（1961年）。
- 62) 沼田頼輔『日本紋章学』（1926年）1158頁。
- 63) 渡部明夫「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』（1980年）他。
- 64) 高堀勝喜・浜岡賢太郎・平田天秋・吉岡他『珠洲法住寺第三号窯』石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会（1977年）。
- 65) 石川考古学研究会『石川県（加賀能登）石器時代古墳時代遺跡地名表』（1951年）459「瓶わり坂」。
- 66) 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録一経塚遺物篇一』（1967年）図版21。
- 67) 敦賀市教育委員会保管資料。
- 68) 宮崎村教育委員会『江波横穴墓群・日吉神社裏山経塚群発掘調査報告書』（1984年）。
- 69) 小森秀三・荻中正和他『三木だいもん遺跡』加賀市教育委員会（1982年），四柳嘉章・辻本馨他『西川島一能登における中世村落の発掘調査一』穴水町教育委員会（1982年）。
- 70) 三辻利一氏の分析資料による。
- 71) 陶片の観察に当たっては，田嶋明人・北野博司・前田清彦氏の協力をえた。
- 72) 福井県立埋蔵文化財センター保管資料。
- 73) 福井県立朝倉氏遺跡資料館保管資料。甕・片口鉢・小皿約10片が採取され地形環境から窯跡と推定される（荻野繁春氏教示）。なお，器形は東播系製品に近似するが，片口鉢外底面に再調整を施すなど技法上微妙な差異も認められる。
- 74) 加賀市三木だいもん遺跡，小松市白江遺跡（石川県立埋蔵文化財センター保管資料）他。
- 75) 拙稿「珠洲系陶器の暦年代基準資料」『北陸の考古学』（1983年）。
- 76) 拙稿「経外容器からみた初期中世陶器の地域相一須恵器系中世陶器を中心に一」『石川県立郷土資料館紀要』14（1985年）各説「7 北陸」。
- 77) 註76文献，第16図64—1。
- 78) 上市町教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編一』（1982年）図版3—42。
- 79) 小井川和夫「喜多方市松野千光寺経塚出土遺物について」『福島考古』26（1985年）。
- 80) 「第5章 第3節 5経塚出土遺物」奈良修介・豊島昂『秋田県の考古学』（1967年）。
- 81) 「雪の出羽路」平鹿郡三，「観音寺由来」によれば，「観音寺の古寺山に四ツの古ル塚あり，（中略）一ツの塚の底は軟岩てふものにして，其甜石を穿うがちて，そが内に紫銅の経筒の如キ器に同じさまの蓋ありて，（下略）」云々とみえ，在銘経筒は外容器を使用していない。現存する壺は「また一ツの塚をもこぼち見よとて，れいのあら男ら鉏鋤とりて掘り崩てば一ツの瓶あり，」に該当し，そのことは挿図に在銘経筒と別の銅経筒の収納状態を示し，法量も合致することで明らかである（『菅江真澄全集』6，124～125頁，および巻頭図版260・261）。
- 82) 註76文献，第26図97—3。
- 83) 中川成夫・倉田芳郎他「笹神村権兵衛沢窯址の調査」『水原郷』新潟県教育委員会



- (1970年), 中川成夫・川上貞雄・土井義夫『新潟県北蒲原郡笹神村狼沢窯址群の調査』笹神村教育委員会(1973年), 渡辺文男「越後五頭山麓赤坂山の中世陶窯」『新潟史学』11(1978年)。背中灸窯跡と遺物の調査・発表に当たり, 川上貞雄・鈴木芳彦氏の配意をえた。
- 84) 小松正夫「仙北郡南外村大畑窯跡発掘調査報告書」南外村教育委員会(1980年)。窯跡と遺物の調査に当たり, 伊藤又四郎・小松正夫氏等の配意をえた。
- 85) 窯跡と遺物の調査に当たり, 磯村朝次郎・宮越陸奥男氏等の配意をえた。
- 86) 窯跡の実見と遺物の調査, 発表に当たり, 目黒吉明・秋山政一・中村五郎・柴田俊彰氏等の配意をえた。赤川窯の概要は秋山氏恵贈資料による。
- 87) 吉田昭治氏保管資料。小野正人「高岩五輪台遺跡と経塚」『ニッ井町史』ニッ井町役場(1977年)502~503頁。
- 88) 『福島県史』6(1964年)図版1343~1344。
- 89) 拙稿「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』18(1982年)。
- 90) 註89文献。
- 91) 中世窯の器種組成・器形の選択にみられる独自性は, 珠洲窯や須恵器系窯のみならず, 瓷器系でも一般的に認められる(岸本一郎『播磨・緑風台窯址』西脇市教育委員会(1983年), 柳内寿彦「大戸窯跡群における表面採集の中世陶器」『会津考古』1(1986年)他。
- 92) 若山庄に関しては, 註4拙稿, 東四柳史明「第3章 第1節 若山庄の伝領と支配, 第2節 珠洲びとの社会と信仰」『珠洲市史』6(1980年), 同「第4章 第1節 若山庄荘主郎郷の世界」『内浦町史』(1981年)参照。
- 93) 網野善彦「第4章 荘園公領制の形成と構造」『体系日本史叢書』6(1973年)。
- 94) 拙稿「中世陶器の生産経営形態」『国立歴史民俗博物館研究報告』12(1987年)。
- 95) 拙稿「珠洲系陶器分布の西限と南限」『歴博』14(1985年)。
- 96) 註40文献。
- 97) 若山庄の収取形態は, 日野家関係史料が遺存しないため明細を知ることができず, 僅かに本家九条家に対して延慶年間(1308~11)に雑公事綿200両(「九条忠教注給条々」「珠洲の中世史料」35), この前後に, 相析(菜)料・褰装束料(延慶2年「九条忠教遺誠」同上34), 報恩院御八講御布施(綾被物・裏物・疊), 同御影日供料(銭納), 成就宮祭上綱他(「諸御領仏神事役等注文」同上39)を負担していたことが判明するにすぎない。以下, 若山庄関係文献史料は, 特に断らぬ限り註99文献より引用。
- 98) 脇田晴子「中世土器発掘と商品流通 素描」『岩波講座日本考古学』7, 月報(1986年)。
- 99) 東四柳史明「珠洲の中世史料」『珠洲市史』2(1978年)195。
- 100) 康元元年(1256), 「日野宣家袖判下文」(『加能古文書』82)に, 「可早致一庄平均其沙汰田所宗光参洛時夫役草手事」として初見。以後, 本庄氏の有力国人領主, 室町幕府奉公衆としての活動は, 註94文献参照。なお, 豊田武氏によれば, 本庄・新庄・古庄などの苗字は, 庄司・田所職の庄官に多いとされる(『家系』1980年, 43頁)。
- 101) 文永4年(1267), 「日野権中納言資宣家御教書」に, 庄官打波右衛門尉がみえ(『加能古文書』93), 珠洲市黒丸(直郷)に「内並五郎左衛門館」が所在した(橋本澄夫編『加賀・能登城堡館名集』36頁, 1971年)。
- 102) 檜崎彰一「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集』3(1977年)他。
- 103) 註1保立文献, 186~189頁。
- 104) 和嶋俊二氏は, 「郡衙に所属した須恵器の工人らが, 荘園内の有力寺院の庇護をうけてようやく活路をみだして生産を再開した」(「珠洲地方の中世社会からみた珠洲焼」註64文献118頁)と珠洲窯成立の事情を予測している。
- 105) 能登の田積は, 『倭名類聚抄』(20巻本, 永観2・984年以前成立), 『掌中歴』(保安3年<1122>頃成立)の8205町余から, 『色葉字類抄』(10巻本, 鎌倉初期成立), 『拾芥抄』(暦応4年<1341>)の8479町余と大差なく, いわゆる「大開発時代」の成果がどの程度反映されているか疑点も残るが, 『拾芥抄』が平安末期の状況を反映していることが明らかになってみると, 『色葉字類抄』で全国40位でも, 平地に対する田積占有率は低いとはいえないであろう。

- う（弥永貞三「『拾芥抄』及び『海東諸国紀』にあらわれた諸国の田積史料に関する覚え書」『日本古代社会経済史研究』1980年）。
- 106) 『神宮雜例集』第四神封ノ事（『群書類従』巻4）。
  - 107) 『神鳳鈔』参河国（同上巻9）。
  - 108) 西垣晴次「戦後の伊勢神宮についての研究(一)(二)一中世以降を中心とする一」『歴史評論』152・161（1963・64年）。
  - 109) 建久3年「伊勢大神宮神領注文」『鎌倉遺文』614。
  - 110) 厨園群の現地比定は、清水正健『莊園志料』第三篇近国二（参河国）、『愛知県の地名』日本歴史地名大系23（1981年）による。
  - 111) 棚橋光男「中世伊勢神宮領の形成とその特質」上・下、『日本史研究』155・156（1975年）。
  - 112) 南出真助「中世伊勢神宮領莊園の年貢輸送—三河・遠江を事例として—」『人文地理』31—5（1979年）28頁。
  - 113) 註58文献、「V 渥美半島の古窯址の分布」、愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告』V（1986年）。上記2文献に使用される群名を、一応生産の基礎単位＝「単位群」とみなし、群の年代的成層構成については、後書の暦年代観に依拠して作業をすすめる。なお、「単位群」は独立した丘陵や支谷等のまとまりをもった小地形に密接して一定期間稼動した小群、「支群」は中小河川流域等の小地域を基盤に操業時期の異なる複数の単位群より構成される窯群を指す。
  - 114) 久永春男・芳賀陽「渥美半島古窯址群出土行基焼の編年」『豊橋市大岩町北山古墳群・豊橋市植田町大膳古窯址群』豊橋市教育委員会（1968年）。ただし、Ⅲ期の暦年代観は、註113『分布調査報告』が妥当と考えこれに従った。
  - 115) 『神鳳鈔』には、「根田。田原。新家。」とのみあって、厨園のいずれか確定できない。
  - 116) 檀崎彰一・柴垣勇夫・真田幸成・小野田勝一「大沢下第二号窯・大沢下第四号窯」『渥美半島埋蔵文化財調査報告』愛知県教育委員会（1967年）。
  - 117) 註58文献「Ⅳ 坪沢古窯址の発掘」。
  - 118) 吉田章一郎・小野田勝一他「極楽古窯址群」『渥美半島埋蔵文化財調査報告』（1965年）。
  - 119) 小野田勝一「院内古窯」『田原の文化』10（1984年）。
  - 120) 小野田勝一「第3章 第3節 学術調査された古窯址」『田原町史・考古編』（1971年）。
  - 121) 小野田勝一「平岩古窯址群」『豊川用水路関係遺跡調査報告』（1965年）。
  - 122) 小野田勝一他『竜ヶ原古窯址群』赤羽根町教育委員会（1981年）。
  - 123) 小野田勝一他『夕古窯址群』赤羽根町教育委員会（1982年）。
  - 124) 杉崎章他『皿山古窯址群』『豊川用水埋蔵文化財調査報告』愛知県教育委員会（1965年）。
  - 125) 久永春男・高平修一・清田和夫「伊良湖東大寺瓦窯群」『渥美半島埋蔵文化財調査報告』（1967年）。
  - 126) 註114文献，61頁。
  - 127) 小野田勝一他『惣作古窯址群』田原町教育委員会（1976年）。
  - 128) 註58文献，167～170頁他。
  - 129) 檀崎彰一他「古代・中世窯業の地域的特質—東海」『日本の考古学』Ⅵ（1967年）。
  - 130) 後藤健一他『青平古窯跡・新古窯跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会（1983年）。
  - 131) 手塚直樹・河野真知郎・斉木秀雄他『鎌倉市千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団（1982年）、服部実喜・玉林美男他『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会（1984年）他。
  - 132) 平泉藤原氏の柳御所跡では、12世紀後半代を中心とする包含層的状態の陶器の産地別構成は、常滑甕壺98片、鉢3片、渥美甕壺196片（袈裟襷文他3片）、片口鉢11片、須恵器系甕壺片53片と集計され、渥美陶片は常滑陶片の約2倍である（平泉町教育委員会『柳御所跡発掘調査報告書—第11・12次発掘調査概報—』1983年，付表）。
  - 133) 山田友治「房総における中世のやきものについて(1)(2)(3)」『史館』5・6・9（1975・76・77年），藤沼邦彦「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館 研究紀要』3（1977年），足立順司「中世陶器生産と消費・序説—東海地方東部地域の場合—」『東笠子第

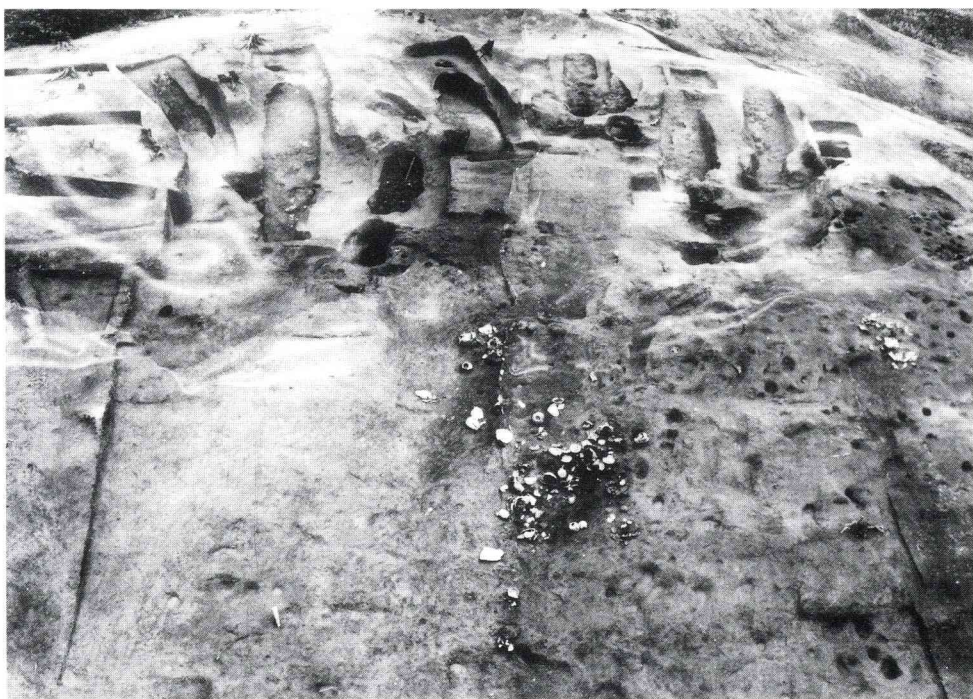
- 27地点遺跡発掘調査報告書』（1982年），註66・76文献他。
- 134) 満岡忠成「伊勢市出土の渥美窯製品」『陶説』141（1964年），山沢義貴他『古里遺跡発掘調査報告書—C地区—』三重県教育委員会（1973年），伊藤久嗣・伊勢野久好「堀田遺跡」『昭和55年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』同上（1981年），高見宜雄・岩中淳之「中ノ垣外遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』同上（1984年），岩中淳之『小御室前遺跡発掘調査報告』伊勢市教育委員会（1980年）他。
- 135) 児玉道明・山沢義貴『岡山古窯址群発掘調査報告』四日市市教育委員会（1971年）。
- 136) 檜崎彰一「初期中世陶における三筋文の系譜 第一部三筋文系陶器とその編年」『名古屋大学文学部研究論集』24（1978年）。
- 137) 小野田勝一『大アラコ古窯址群』田原町文化財調査会（1973年），および斉藤孝正氏の教示による。
- 138) 吉岡富夫「惟宗遠清云々の刻銘について」『陶説』180（1968年），本多静雄「遠清の壺」同上，足立順司「頭長銘の壺」『森町考古』12（1978年）。
- 139) 足立氏は銘文に現れる各氏について綿密な考証を行われたが，内蔵氏が土器生産に関係する内蔵窯の職掌に由来するとの理由で，陶器生産や交易への関与を想定するのは無理であろう。
- 140) 関秀夫編『経塚遺文』（1985年）347・348他。
- 141) 清雲俊元・小林真他「富沢町徳間発見の「頭長・遠清」銘の短頸壺について」『甲斐路』52（1984年）。
- 142) 清水吉彦「箱根山西錦田村三ツ谷新田地先発掘経塚様の物に就て」『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』12（1933年）。
- 143) 国平健三「神奈川県綾瀬市宮久保遺跡」『第1回東国中世土器研究集会資料』（1987年）。
- 144) 大アラコ2号窯灰原からは約70片，6号窯灰原からは12片の関連刻銘壺片が出土しているが，いずれも3号窯灰原と重複しているようである。ただ，平岩3号窯然焼部の刻銘陶片は当窯で焼成された可能性があり，竜ヶ原2号窯では補修用材に使用されていたとされる（小野田勝一氏教示）。
- 145) 註143文献。個体相互の観察所見は註141文献に従う。
- 146) 註1文献，柴垣勇夫「古代窯業の発展」『古代の地方史』4（1978年），註138足立文献他。
- 147) 朝熊山経塚から，ほかに『経塚遺文』未収録の承安2年8月28日在銘，鍛（加）治御菌住人比丘尼貞妙・僧観秀・大中臣有常を願主とする同趣意の陶製経筒が出土している（小野田勝一『むかしの田原』1986年，170～171頁）。
- 148) 註111文献。
- 149) 『皇太神宮年中行事』6月15日項（『大神宮叢書 神宮年中行事大成』前編），および『皇太神宮儀式帳』陶器作内人項（『群書類従』巻1）。なお，陶器作内人が調達する祭料の種類・変遷・仕様等については，『二宮由貴供具弁正』（『大神宮叢書 神宮神事考証・前篇 746～747頁），『神事提要』「土師御器，陶御器」項（『同上 神宮隨筆大成・前篇 29～30頁），大西源一「有爾郷の伊勢神宮祭器調達につきて」『考古界』8—8（1909年）他参照。
- 150) 「長講堂所領注文」（『鎌倉遺文』556）には，節供物として「白瓷鉢・酢瓶」とともに「酒瓶（子）」を貢納（ただし，建久2・1191年以降のある時点では，「不動之」とある）する庄園として，篠本庄等美濃の7庄園を挙げる。愛知県鳳来山遺跡・鎌倉市千葉地遺跡から渥美産としてよい珠洲製品Cタイプの瓶子が出土している（註131文献第64図3，註175文献第4図A9）が，窯跡では確認されていない。あるいは，この瓶子は12世紀代では渥美窯で比較的多数焼成された広口瓶のタイプを指すとも考えられる。
- 151) 西岡虎之助「日本の農家における自給経済生活の史的展開」『民衆生活史研究』（1948年）16～21頁。なお，鈴木国弘「伊勢神宮と神戸の変質」『史学雑誌』75—11（1966年）48頁以下参照。
- 152) 『鎌倉遺文』614。
- 153) 『神鳳鈔』および『外宮神領目録』（『統々群書類従』神祇部）。

- 154) 大山喬平「絹と綿の荘園―尾張国富田荘―」『日本中世農村史の研究』(1978年)他。
- 155) 註133足立文献, 70~71頁。
- 156) 杉崎章『常滑の窯』(1970年) 86~88頁。
- 157) 「長講堂所領注文」『鎌倉遺文』556, 上村喜久子「内海荘」『国史大辞典』2 (1980年)。
- 158) 檜崎彰一「古代・中世窯業の技術の発展と展開」『日本の考古学』Ⅵ (1967年) 107~108頁。
- 159) 『経塚遺文』に収録する瓦経・陶製光背・陶製経筒(外筒) 35件中年紀銘を有する 28 件の月別内訳は, 1月1, 2月1, 4月2, 5月1, 6月4, 7月4, 8月7, 9月5, 10月3となり, 製作期間は1~10月に亘るが, 70%弱は7月以降に収まる(小町塚経塚のごとき多量一括埋納は1件とし最終年紀で算定)。なお, 1月16日の日付けを有する福岡県古賀町出土陶製経筒(81号)は, 「如法経供養并四観経書了」とあって収納する經典書写終了日である。また, 愛媛県宇和町出土陶製経筒のように, 「國久五年閏八月 三 埋納之」(337号)のように埋経日を予め刻銘した例も存する。
- 160) 加藤岩蔵・斉藤嘉彦他「瓦場遺跡群一大草地区」前掲『渥美半島埋蔵文化財調査報告』。
- 161) 建久7(1196)年「太神宮神主帖」『鎌倉遺文』842。網野善彦「中世前期の水上交通について」『茨城県史研究』43 (1979年)参照。
- 162) 註133足立文献でも, 渥美窯の宗教器を重視している。
- 163) 奥村秀雄「伊勢地方における埋経―渥美半島との関係において」『MUSEUM』167 (1965年)。
- 164) 和田年弥「伊勢小町塚経塚の研究」『三重考古』3 (1980年)。
- 165) 後藤守一「三河に於ける見聞」『考古学雑誌』14-4 (1924年)。
- 166) 註125文献。
- 167) 註124文献。
- 168) 註164文献, 11~13頁。
- 169) 『豊受大神宮禰宜補任次第』(『群書類従』巻52)。
- 170) 萩原竜夫『神々と村落』(1978年) 87頁。
- 171) 12世紀中葉前後から後半代にかかる埋経の盛行は, 御師化した権禰宜層による新たな所領獲得運動(伊勢神宮寄進地系荘園の誘発)と一体的な事象と理解される(萩原竜夫「伊勢信仰の発展と祭祀組織」『増訂中世祭祀組織の研究』1975年)。なお, 文永5年(1268)「志摩国崎神戸狼藉人注文」(『鎌倉遺文』10239)に「伊良胡大夫文貞」がみえる(同上549頁)。
- 172) 杉山洋「熊野三山の経塚」『文化財論叢』(1983年)他。
- 173) 小玉道明「伊勢市朝熊山経塚群について」『三重の文化』33 (1963年)。
- 174) 鈴木裕篤「三明寺経塚とその周辺」『沼津市歴史民俗資料館紀要』6 (1981年)。
- 175) 江崎武「鳳来山出土の中世陶器」『東洋陶磁』3 (1976年)。
- 176) 赤羽一郎・小野田勝一『常滑 渥美』日本陶磁全集8 (1977年)他。
- 177) 檜崎彰一「渥美古窯址の性格」『渥美半島古窯址群』日本陶磁協会 (1965年)。なお, 赤羽一郎氏は, 東海諸窯の製品の鎌倉での消費量が, 渥美→瀬戸→常滑と推移した背景として, 幕府重臣が三河守・国司→山田郡御器所=瀬戸窯→栢頭子庄(常滑市南半)の順に支配権を行使したことに対応すると仮定された(「関東平野における中世常滑窯製品の出土分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要』3, 1984年)が, 渥美, 瀬戸製品が単独で支配的な時期を形成した形跡はなく, 両窯の器種組成の差異, ないし消費総体の傾向性としても東国全域の共通的事象であって, 鎌倉に限定できない。
- 178) 檜崎彰一『知多古窯址群』愛知県教育委員会 (1961年), 小島一夫他『H-101号古窯跡発掘調査報告』名古屋市教育委員会 (1973年), 名古屋考古学会裏山一号窯調査団「八事裏山一号窯発掘調査報告」『古代人』38 (1981年), 愛知県教育委員会『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』Ⅱ (1981年)。
- 179) 註164文献, 9~10頁。
- 180) 奥村秀雄「経塚研究の一視点―藤井姓に関して―」『大和文化研究』8-8 (1963年) 28

頁。

- 181) 中村五郎「岩代承安銘に見える藤井氏について」『大和文化研究』10—5 (1965年) 30頁。
  - 182) 註180文献, および小野田勝一氏の教示による。
  - 183) 石田茂作「越中日石寺裏山経塚」『考古学雑誌』42—4 (1957年), 註133文献他。
  - 184) 五来重編『吉野・熊野信仰の研究』(1975年)他。
  - 185) 「法住寺白山宮」としての初見は弘安7年(1284)であるが(『加能古文書』124), 領主祈禱所に指定される経緯を勘案すると, 中世前期に遡ってよいと思われる。
  - 186) 橋本秀一郎「須須神社の成立についての諸問題」『珠洲市史』6 (1980年)。
  - 187) 東播系諸窯については, 大村敬通「播磨の古代窯」『日本やきもの集成』9 (1981年), 荻野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』3 (1985年), 同「近畿地方における中世の須恵器」『東洋陶磁』14 (1986年), 森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心に—」『神戸市立博物館 研究紀要』3 (1986年)他参照。
  - 188) 丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 (1985年)他。
  - 189) 山仲進・神崎勝・徳原多喜雄『神出一神出古窯址群に関連する遺跡群の調査—』妙見山麓遺跡調査会 (1986年)他。
  - 190) 「御白河院下文」『鎌倉遺文』515。
  - 191) 今里幾次「播磨魚橋瓦窯跡」『播磨考古学研究』(1980年) 401頁。
  - 192) 今里幾次「姫路市本町遺跡の古瓦」『本町遺跡(本文)』(1984年) 212頁。
  - 193) 今里幾次「加古川市東中遺跡の古瓦」『東中遺跡発掘調査報告書』加古川市教育委員会 (1981年) 65~67頁。
  - 194) 柴垣勇夫「尾張における平安末期の瓦生産—その分布と史的背景—」『愛知県陶磁資料館研究紀要』1 (1982年)。
  - 195) 上月昭信「兵庫県南部の窯業生産遺跡(1)(2)」『考古学ジャーナル』216・220 (1983年), 中村浩他「札幌古窯跡群発掘調査報告」加古川市教育委員会・大谷女子大学資料館 (1983年), 西脇市役所『西脇市史・本編』(1983年) 199頁以下。
  - 196) 真野修氏保管資料。
  - 197) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 (1978年)。
  - 198) 註197文献, 86~87頁。
  - 199) 香川県教育委員会『香川県陶邑古窯跡群調査報告』(1968年), 註63文献。
  - 200) 羽床正明「讃岐守高階泰仲と讃岐国在庁官人綾氏—鳥羽殿造営のための瓦の生産を中心に—」『香川史学』10 (1981年)。
  - 201) 註189妙見山麓遺跡調査会文献。
  - 202) 遠藤元男「12世紀前後における手工業者の経営と生活」『日本職人史の研究・論集編』(1961年), 浅香山木「第4章 第2節 平安期の窯業生産をめぐる諸問題」『日本古代手工業史の研究』(1971年), 脇田晴子「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ (1986年)他。
- 補註 成稿後, 中野晴久「知多古窯址群の研究(1)」, 森下雅彦「七曲古窯の甕の押印について—知多古窯の押印の変遷を通して—」『知多古文化研究』3 (1987年)が発表された。中野氏の論考は, 筆者同様, 生産器種の組成を重視する視点から常滑窯の成立に迫っており, 工人の存在形態も内湾漁撈(兼農)民が製塩から製陶へ生産基盤を転換しつつ, 中世窯業の担い手となったと論定された。ただし, 中世製塩遺跡の考古学的検証は不十分なので, 知多半島の製塩が11世紀中葉前後で廃業し, 中世に存続しなかったかどうかは検討を要する。





北陸の終末期須恵器窯跡群

(上) 石川県戸津窯跡群遠景

(下) 同、C地区全景

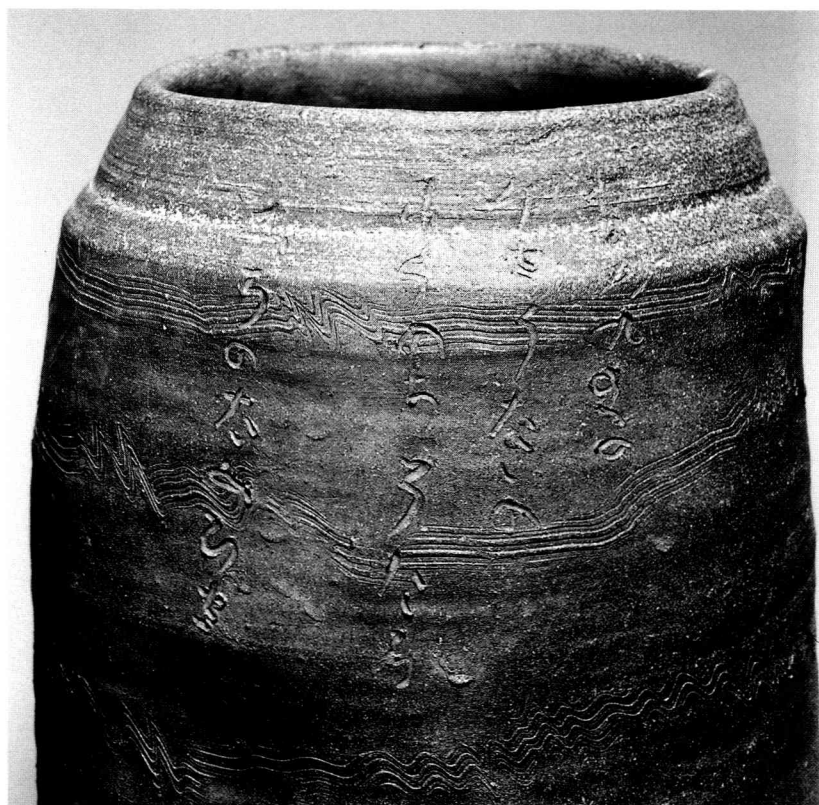
(石川県立埋蔵文化財センター・小松市教育委員会提供)



〔釈 文〕

「わかやまの みさうたか  
こくのちそにし おちのためひさ」

（提・箱根美術館『越前・珠洲』  
作品目録・解説 榎崎彰一）



珠洲 経筒外容器 総高41.0cm

（愛知県陶磁資料館蔵・写真提供）